

自立した女と男を 人間らしい生活を 差別のない社会を
育み 創り出す

新しい家庭科

We

ウ イ



7
1991

特集 生と死を授業で

季節のうた

仙田敬子



「茗 荷」

ぎぼし
擬宝珠に
ふれて渡りぬ
京の夏

・特集・

生と死を授業で

●小学生が「死」を考える

―野見山美子ちゃんと

下田小学校4年2組の子どもたち

2

●「生きている」実感が不確かな時代

―子どもは「死」をどうとらえているか―

長谷川 孝

12

●死は隠されている

平山正実

16

●生と死、そして超越

ト部文磨

21

●非暴力といのちの尊重

―湾岸戦争とフェミニズム―

奥田暁子

26

「クオリティ・オブ・ライフ」の確立を

飯塚眞之

30

配偶者を失った人をたずねて竹内希衣子

32

健やかに生きる権利、安らかに死ぬ権利

松根敦子

35

在宅ケアの今とこれから

季羽倭文子

38

「生と死を考える会」に関わつて大関ミヨ子

40

〈情報〉

婦人問題企画推進有識者会議意見

―変革と行動のための5年―

55

連載

●大学

ターミナルケア教育の試み

庄司進一

42

●短期大学

看護学生と共に「生と死を考える」

平田文子

47

●中学校

義父の死から考える

磯部幸江

52

荒野のバラ 小さな死の大きな意味に学ぶ

田中裕一

64

男性学への契機／魔男の宅急便

あえて父親殺しの汚名を着て

諸橋泰樹

68

精円の夢 続「暴力的」ということについて

武田秀夫

70

あかきたな 教室中に鳴りひびく悲鳴

福田 緑・加藤由美子

72

買うて来て使う 草履

山本謙吉

75

波 緑の中の学園

半田たつ子

76

〇ひと 李順愛さん

25

・イキイキぐるうぶ 74 ・わたくしからあなたに 80
・We なんでも言おう なんでも聞こう 82
・十字路 84 ・泉 86 ・アンテナ 87 ・編集後記 88

表紙／長野ヒデ子 季節のうた／仙田敬子
特集イラスト／降矢奈々

新しい家庭科を創るために

小学生が「死」を考える

野見山美子ちゃんと



下田小学校 4 年 2 組の子どもたち



おとうさんのこと

野見山美子（東京）

一九八八年の一月にみんなでスキーに行きました。そのあと、おとうさんは病院に行きました。わたしは、どうしたのかなと思いました。

二月に、おとうさんとおかあさんと弟のたろうとわたしで上野の動物園に行きました。そのあと、おとうさんは入院して手じゅつをしました。わたしはどうして手じゅつなんてするのかと思います、ちょっといやな気分でした。

そして四月に、おとうさんはい院しました。わたしはよかったと思いました。夜にいつしよにおふろにはいつたら、おなかの上のほうからまっすぐいって、おへそのところまでまがって一センチくらいのところまで、切ったあとがありました。わたしは、

「いたくないの」

と聞くと、おとうさんはおなかをたたいて、「いたくないよ。でも、おすいたいよ」といいました。わたしはおとうさんがかわいそうだと思いました。おふろから出ておとう

さんがガウンに着がえおわったら、わたしはおとうさんにだいていただきました。するとおかあさんが、

「入院中、おとうさんにだいていただけなかったものね」といいました。わたしは、

「なかつたら、もったってこしてね」といいました。するとおとうさんは、

「なかつても、もう大きいんだからだっこはしないよ」

といいました。わたしは、おとうさんのかたをにぎりました。

おとうさんは、五月にまたおながいたくなつて入院してしまいました。おとうさんの病気の名前は「いがん」というおそろしい病気です。

わたしは、弟のたろうといつしよにおばあさんの家にとまり、学校へ通いました。

おとうさんが入院している時、おじいさんも入院していました。わたしはおかあさんの大変さがわかるような気持ちでした。

わたしは、おばあさんの家でねる時、いつもおとうさんやおかあさんのことばかり考えていました。おとうさんはどうしてこんな病気になったのか、今でも考えています。五月

「生と死」を授業でどう取り上げる
ことができるのか、と考えあぐねていた
時「生と死を考える会」の会報 No 10
に、野見山美子ちゃんの作文が載りま
した。会員であるお母様、野見山富美
子さんが、「たまにはこんな投稿があ
ってもいいのではないかしらと思ひ」
と添え書きしていらっしやいます。七
歳の時、お父様を亡くした美子ちゃん
が半年ほど経った頃、学校で書いた作
文ということです。

この作文には、会員からの励ましの
便りが寄せられていましたが、子ども
たちは、どう受けとめるのだろう。そ
れが知りたくて、横浜市立下田小学校
の植垣一彦さんに、授業で取り上げる
ことをお願いしました。

作文は家に持ち帰らせなかったそう
ですが、家庭訪問での話題はもっぱら
このことで、子どもたちは美子ちゃん
のことを家で話したようでした。植垣
さんは、作文を読んだり、相談にのっ
たりしながら、一時間中泣きっぱなし
だったそうです。私も、子どもたちの
誠実さに深く頭を垂れました。(半田)

三十日に、おとうさんは、また手じゅつをし
ました。わたしは、二回も手じゅつをするな
んてかわいそうだと思います。

おとうさんは、六月にもっとおながいた
くなつてしまいました。おかあさんは、おと
うさんが、

「さむくなつた」

という、ベッドまでガタガタゆれると話し
てくれました。わたしは、おとうさんがかわ
いそうでかなしくなりました。そして早くよ
くなつてほしいと思いました。何日かたつ
と、おかあさんが病院にとまるようになって
しまいました。わたしは、もっとかなしくな
りました。わたしもときどき、おとうさんの
病院に行きました。

七月十日には、家に、おかあさんの妹やい
とこが来て遊んでくれました。わたしは、い
とこと弟といっしょに、二階のおじいさんの
へやにいました。一階には、おとうさんの友
達などいろいろな人が来てくださっていました。
わたしは、どうして来てくださったのか
わかりませんでした。わたしのいるへやに、
おかあさんが青い顔して帰ってきました。わ
たしはおかあさんが帰ってきたので、おとう
さんがおって、たい院したのかと思つてう

れしくなりました。でも、それはちがいまし
た。わたしたちは、おかあさんによればベッ
ドのへやに行きました。おかあさんは、しん
けんな顔で、

「おとうさんはね、午後、なくなつたの」
といいました。わたしは、おかあさんのひざ
に顔をすりつけながらなきました。おかあさ
んは、わたしの頭をそつとなでてくださいま
した。

七月十一日にお通夜をしました。お通夜に
は、いろいろな方が大ぜい来てくださいまし
た。

七月十二日のお昼に、おそう式をしまし
た。夕方、おとうさんは、おこつになつて帰
つていらっしやいました。おとうさんの友達
が、かたを組んで丸くなり、おもしろい歌を
歌ってくださいました。わたしは、おもしろ
いのですきになりました。

おとうさんは、世田谷小学校の前で、わた
しに自てん車の乗りかたを教えてくださいま
した。スキーを教えてくださいったのもおとう
さんです。おとうさんはおこるとこわいけ
ど、本当はとってもやさしいおとうさんなん
です。

そんなおとうさんが、わたしは大きすぎです。

植垣 一彦

一

たとえばかつて、ジョン・レノンが凶弾に倒れたとき、わたしは、一時間を潰して子どもたちの前でギター片手に「追悼コンサート」を開いた。詩人の石原吉郎が死んだとき、勤めを休んで告別式に行き、教室で彼の詩を朗読した。また、未知の杉本治君が自死したときには、新聞記事を集めて子どもたちと読み合い、議論し、追悼の「文集」を作った。敬愛する三浦つとむがこの世を去ったときには、彼の著書『こう考えるのが正しい』の中から「ライオンと鉄砲」を教材化した。「追悼授業」を行い、亡骸にその報告をしたのだった。

この種の実践(?)は他にもいくつかあるが、そのどれもが教室の子どもたちにとって、前口上を聞かされたにせよ、唐突であつたらうと思う。しかし、わたしにとっては不可避の表現なのであつて、子どもたちにしほしお付き合いを願った次第である。

他者の〈死〉に対するわたしたちの感応は、おそらく距離の問題が介在してくるのだからと思う。その意味で、編集部から送られてき

た野見山美子さんの作文「おとうさんのこと」は、わたしにはある意味で唐突で、どういう授業にしたものか苦慮した。普遍的なテーマを抽出する方向で数時間の授業を組むか、あるいは、感想をめぐって話し合う授業にするか、などというように。

結局無理をしないで、わたしにとっては今後の課題として〈死の教育〉を構想する端緒になればそれでよし、子どもにとっては読後感を書くこと自体に意義がある、と落ち着いた。

授業は、「作文ゼミナール」と称して特設している国語の時間に行われた。まず「おとうさんのこと」をプリントして全員に配り、わたしが朗読したあと、「感想か、お手紙」を書いてもらう形ですめられた。途中で思いついて、わずかばかりのアンケートもとった。

美子ちゃんの作文を追う子どもたちの当初のとまどいの表情は、事の重大さを察知するやたちまち真剣になり、核心へと引き込まれていった。そして、次にみるように、自分に引き寄せた誠実で厳肅な作文を寄せてくれた。

二

今日の子どもは近親の死を経験しなくなっ

て、死の観念が希薄になってきた――と世上では論じる。確かにそういう一面はあるかも知れないが、しかし、言い切ってしまうのは早計だとわたしは思う。

たとえば、家に帰ったらいるはずのお母さんがいないというような親の〈不在〉に対する不安感、雑踏で迷子になったときの世界への通路を断たれたような孤立感、あるいは、暗闇の中での恐怖感などは、子どもにとって〈死の観念〉の基層として体験されてゆくはずである。

へこれまでに人や動物の死に接したことがあるか」を訊ねてみたら、三十五人中三十一人が「ある」という。多くはペットの犬や猫、ハムスターやうさぎ、金魚やかめなどの死であるが、わが家の経験から言ってもたとえばペットの死といえども子どもの愁嘆は見るに忍びないほどである。つまり、何も「身近な者の死」だけが子どもの〈死の観念〉を形成するのではないだろう。

さて、三十一人のうち十一人が、「おじいちゃん・おばあちゃん・親せきの人」の死に接している(昨年、ある男の子のお父さんは、「伯父の葬儀があるので社会勉強のつもりで息子を連れていく」と連絡帳に欠席届を書い

てよこした。むしろわたしは「大賛成」の返事を書いたのだった。さらに、クラスの三分の二の子どもが、「親の死」を考えたことがあるという。

そうした子どもたちの内的世界に触れたり、真剣な作文を読んだりしてみると、学校教育の手の届かない時空で子どもたちが確実に「生と死の観念」を形成していつているように、わたしには思われるのだが、さてどうであらうか。

美子ちゃんへ



中川 美郷

美子ちゃん、とてもかなしい、思いをしたんですね。私も「お父さんが死んだら」と、考えたことが、あります。夜ねる前、ベットに入って、考えました。とても、かなしい、さみしいことでした。美子ちゃんのお父さんの病気が、そんなに、おそろしいのか、と、しました。それから、半年。とても、さみ

しかったでしょう。美子ちゃんの、作文を、読むと、お父さんの気持、お母さんの気持、弟が、どうなっているか。そして、美子ちゃんの、思うこと、いろんな気持が、わかります。私に、とっては、勉強になる、作文でした。私のお父さんも、おこるところわくても、けっこう、やさしい人です。

お父さんは、おもちゃや本を、かってくれたります。たぶん、本のほぐらいは、お父さんが、かってくれました。それから、妹にも、だっこをしてくれて、私は、お父さんの前では、「お母さんがすき」といっています。でも、ほんとうは、家族は、みんな、大好きです。美子ちゃんも、やさしい子でしょう。とてもいい作文でした。さようなら。

山本 静

今日、先生にこの文を読んでいたきました。わたしは、目になみだがたまりました。先生も読みながらなっていました。わたしも、よし子さんみたにお父さんがなくなつたら、お母さんにだきついてなくとおもいます。よしこさんは、お父さんやお母さんがなくなるゆめをみたり思ったりしたことがありませんか。

わたしは、そういうゆめをみたりすると、ねてるあいだに、なみだがでてきます。

わたしは、ねこを、三びきかっていた。でも一びきのねこは、わたしたちのへやにしないでいました。

もう一びきのねこは、にげてしまいました。もう一びきのねこは、いたずらねこで、ふとんの上におしっこやうんちをするのです。できませんでした。でもいまでは、こうかいしています。

森田 峰仁

七月十日にお父さんがなくなつて、さんねんですね。ぼくも、うちになくなつたおばあちゃんの写真があつて、夜ねるとき、ふとんの中にもぐつて、かんがえたことがあります。どうしてさいごに、人間はしんじやうのかな、どうしてびょうきになるのかな、まだまだ、いろんなことをかんがえました。そういうことをかんがえていると、しぜんになみだがでてきます。

中里 恵

美子ちゃん。よくゆう気を出してこの作文を書いてくれました。一月から七月までたい

へんだったね。よくそれをのりこえて今日までやってきたね。神様はなぜこういう悲しい出き事を人の人生におくるんだらうね。人の人生は悲しい出き事とかで大きくなっていくんだらうね。わたしは今四年生です。美子ちゃんより三つぐらい上です。わたしより小さいのによく書いたね。わたしならにげていたと思います。わたしも美子ちゃんと同じ年のころおじいちゃんをなくしました。

だから美子ちゃんの悲しみと気もちはよく分かります。くじけないで。もう美子ちゃんはおねえちゃんだものね。美子ちゃん。悲しみなんかのりこえてがんばって。なみだなんかゆう気ある美子ちゃんに合わないぞ。

わたしね、夜ふとんに入ってお父さんやお母さんが、橋から落っこちて死んでしまった事を想像しました。するとなみだが、たきのように出てきて止まらないのです。とても悲しかったです。でも美子ちゃんは、こんなのじゃなくもっと大きな悲しみでしたね。

わたしは美子ちゃんに会った事はないけれど、そんな強い美子ちゃんがとってもすきになりました。こんなになんばり強い美子ちゃんは、みんなにあいされているんでしょね。これからもがんばってね。

西橋 奈未

お父さんや、お母さんは、いつかは、美子ちゃんと、おわかれする日があります。美子ちゃんも、お父さんやお母さん、弟の太ろうくん、おわかれする日が、必ずきます。もちろん、わたしだって、お父さんやお母さんとおわかれする日は、きます。でも、くじけないで、今、自分がいきていることを、大切に、がんばっています。美子ちゃんも、お父さんが、空から見守っていることを、けっしてわすれないで下さい。

三石陽一郎

美子ちゃんの、お父さんは、どうして、「いがん」という、病氣にかかってしまったんだろう。ぼくのお父さんは「いがん」までには、いかないけど、毎日、いの薬を飲んで、かいしゃに行っているよ。でも、ぼくのお父さんも「いがん」にかかって、亡くなったらしい。とてもかなしい。スキーや動物園に行った思い出ではわすれないでね。

いがんは、二回も手じゅつをするほど、たいへんな病氣なんだね。

ぼくのお父さんはおこるとこわいけど、いろいろなことを、教えてくれたよ。きみにと

っては、お父さんは思いでの人なんだね。

小川久美子

私も、「お父さんが死んだら」と考えたことがあります。私のお母さんは、中学生の時に、お父さんがなくなりました。お母さんが、十三歳の時です。でも、美子さんは七歳で、お父さんをなくしたので、もっともつと苦しかったでしょうね。私のお母さんは、自分で、「まだ、お父さんはいきている」と考えていたそうです。もし、私のお父さんや、お母さんが、なくなったら、悲しくて、毎日毎日、ねる時も、ゆめの中でも、ぜったいにないと思います。七歳の時にお父さんがなくなったら、私は、一人っ子だしなにもできないと思います。私は、美子さんの作文を読んで、美子さんの気持が、とてもよく分かりました。

渡辺謙太郎

ぼくは、この文章をよんで、とてもかわいそうな感じがしました。ぼくは、「自分のおとうさんが亡くなったらどうしよう」と、考えたことはあります。もしぼくのおとうさんが、いなくなったら、どういうふうだろうをと

っていいのかわかりません。ほんとに、「いがん」という病気は、おそろしいですね。ぼくも、美子ちゃんの気もちは、よくわかります。ぼくは、いきなり、自分のおかあさんから、「おとうさんは、きょう なくなったの」なんていわれたら、一日じゅう、ないでなくて、どうしていいかわかりません。「みんなでスキーに行きました」「上野の動物園に行きました」と書いてあるけど、おとうさんは、美子ちゃんに思い出をつくってあげたかったからじゃないんですか。ぼくは、そうだと思います。ぼくも、自分のおとうさんが入院したら、かわいそうだと思います。七月十一日はお通夜。七月十二日には、おそう式。その二日は、とてもだいいじな日だと思います。ぼくのおとうさんはおおることこわいけど、本当はやさしいおとうさんだと思います。おとうさんがいないせい活でも、がんばってください。ぼくは、いつまでも、美子ちゃんをおうえんしています。

金平 奈々

美子さん。お父さんが、なくなっちゃってしまっ
て、本当にとても、かなしいだろうと、思
います。美子さんの作文を、よませて、もらい

ました。お父さんがなくなるまでに、いろい
ろな、ことがあったんですね。スキーにいっ
たり上野の動物園にいったりそのころは、ま
だ、お父さんの身体があんていしていたみた
いですね。でも、その後、おとうさんが病院
に、いくのをみて美子さんはどう思いました
か?……やはり、ふしぎに思ったでしょう。
お父さんは、三回も入たい院して、三回も手
じゅつをしたのですか。お父さんもくるしか
ったでしょうね。お父さんといっしょに、お
ふろに入って、おなかの上の方から切ったあ
とがあったら、私だって考えただけで、かわ
いそうになります。お父さんにだいていただ
いて、よかったですね。それが、さい後だっ
たのでしょうか。七月十日に、お父さんが、な
くなったのですね。さんねんなことです。私
は、お父さんが、なくなったら……と考えた
ことがあります。そして、考えているうちに
ないてしまいます。
では、さようなら。

相川 文江

美子さん、わたしはお父さんが死ぬとい
うことは、一ども考えたことがありますんでし
た。もし、わたしたのお父さんが死んだら、わ

たしはないてしまおうと思います。美子さんは
お父さんが死んだとき、どう思ってたか。考
えませんでしたか。わたしだったら悲しい気も
ちになって大泣きするでしょう。半年ほどたっ
てから「お父さんのこと」をかいとありま
すが、わたしならまだお父さんの死んだ悲し
みがうすれないので、そういう文はかけない
と思います。もし会えたら、なぐさめてあげ
たいなあと思います。わたしもしお父さん
が死んじゃったら、だれかになぐさめてもら
ったら少しは元気になると思います。早くお
父さんが死んだ悲しみをわすれて元気になっ
てね。わたしもおおえんするよ。

半田 瑞紀

美子ちゃん、お父さんが亡くなっちゃって
かわいそうだね。

美子ちゃんは、どんな気持ちでこの長いお
話を書きましたか。いやだけれど書いたの
か、泣きながら書いていたのですか。

二月に、お父さんとお母さんと弟の太郎く
んと美子ちゃん得上野動物園に行つて楽しか
ったですか。そして四月に、お父さんがたい
院してよかったですね。

私も、よかったと思いますが、おなかの上

のほうからまっすぐいって、おへその所で曲がって、一センチぐらいの所まで、切った後があるから、かわいそうだと思いました。

お父さんは、五月にまたおなかがいたくなつたから、かわいそうだよ。お父さんの病気の名前は、「いがん」というおそろしい病気だからいやだよ。

みずきより。

長島 裕章

ぼくは、おかあさんやおとうさんがなくなつたら、ということ考えたことがありません。自分がなくなるのとおなじぐらい、かなしいんだよ。とくに、せつかくだいいんできたのに、また入院しちゃったのは、さんねんだったね。たぶん、スキーにいったり、上野の動物園にいったりしたのは、おかあさんとおとうさんがそうだんしていったんじゃないかな。死ぬってかんじさせないために、「なおつても、もう大きいんだからだつこはしないよ」っていったんじゃないかな。よしこちゃんも、がんばって生きていってね。

あかしこうき

ぼくは、お父さんも、お母さんもちやんといます。でも美子さん、あなたは七月十日にお父さんをうしなしました。もちろんぼく

も、お父さん、お母さんおとうとが死なないでほしいと思っています。でも美子さんのお父さんは、いがんというもつとおそろしいびょうきにかかってしまいました。なぜいがんとかゆうびょうきができたんでしょうか。

それをこのあなたの作文を読んで思いました。ぼくは、びょうきがあつてほしくないと思います。みんないえ、日本ぜん国のの人にきいてもしなないほうがいいでしょう。

たぶんぼくのお母さんやお父さんが死んでしまふかくりつはあるかもしれません。

ぼくは、こんなことがあつていいのかと思つています。でも、人間はいつか死んでしまいます。美子さんおとうさんがいなくてもしつかり生きぬいて下さい。

建部 登

スキーにいったそのあとおとうさんが病院にいつてさいしょどう思いましたか。上野動物園にいつてそのあとに入院して手じゅつをしていたときに心から「なおつて」といっていましたか。そしておとうさんがたい院して夜にいつしよにおふろにはいつたときおとうさんはこにこしていましたか。切つたあとかあつたときに美子さんはどんなきもちで

かわいそうだと思いましたか。おとうさんにだいてもらつたときにどんなかんじでどんなきもちでしたか。どうしておとうさんのかたをにぎりましたか。

またおなかがいたくなつて入院したときにおとうさんの病気がいがんだったときに美子さんはどんなきもちでしたか。ねるときにいつもおとうさんやおかあさんのどんなことを考えていますか。二回目の手じゅつするのはかわいそうです。ぼくも二回も手じゅつしたらもうさんざんでへろへろです。

おとうさんがなくなつたときにとくにどう思いましたか。ぼくだったらすごくないで一日じゅうなくかもしれません。おとうさんがいなくなつても元気でいてください。

「おとうさんのこと」を読んで



ぼくは、この作文を読んで、「この中の家族だったら」と一番先に考えました。一月に

堀 祥光

みんなでスキーに行ったのは、たぶんお父さんが、もうすこしで死んじやうから思い出をのこすためにお父さんとお母さんが、計画をたてていたんだと思います。ぼくは、この作文のこまかい所をたくさん見つけました。

お父さんのおなかの切ったあとのことや日にちのことです。お父さんが、おこつになつてかなくとも、おもしろい歌で心が楽しくなつて、よかつたと思います。

石橋真理子

わたしは、この作文を読んでとても悲しくなりました。わたしは今までおとうさんやおかあさんが、死んだら……という考えは何にも思いつきませんでした。よし子さんは小学一年生のときに父親をなくして、とてもかわいそうですね。わたしのお母さんは、赤ちゃんのときお父さんが、びょうきで死んでしまいました。だからお母さんはお父さんのかおをおぼえていません。お母さんのお父さんは、とても子どもすぎだったときいています。よし子さんのお父さんは「いがん」と言うおそろしいびょうきで、くるしんでいたんですね。わたしのともだちのお父さんはびょうきでなくなりました。そのともだちは、よし子さ

んとおなじくらい年でお父さんがなくなつて、かわいそうです。わたしはそのおともだちのお父さんのおそう式にお母さんといっしょに行きました。そのともだちもおそう式に行きました。とてもかなしそうなかおでした。よし子さんもおとうさんがなくなつてとてもかわいそうです。わたしは、よし子さんの作文を見て死ぬってゆうことは、とてもかなしいことなんだなと思いました。

上村 文人

ぼくはこの作文をよんで、心の中では大泣きしてました。ぼくは、もしお父さんお母さんが死んでしまつたら、ぼくも死にます。それはなぜかという、いろいろなたのしいおもいでがいっぱいあるからです。もし、自分をうんでくれたお母さん、お父さんでも、親らしくなく、すごくいじの悪い親だつたら、べつに死んでもなんともありません。ぼくはときどき神におねがいます。えいえん、というのはわりかもしれませんが、お母さん、お父さん、おばあちゃん、おじいちゃんが、いつまでもいつまでも長生きできるように。その心を、むだにしてほしくないから、ぼくは、お父さんにこういいました。タバコ・ビ

ール、お酒、おそくかえってくるのはやめてねつて。お母さん、お父さん、だつていつかは死にます。でもそこでくじけてぼくの人生をおえてはいけません。

久保寺杏奈

私は、美子ちゃんが、とてもかわいそうだと思います。私は、悪いことをしてないのにどうして、いがんになったのかな、と思います。美子ちゃんも弟もなにもしていないのに、どうしていがんになるのかなと美子ちゃんもたぶん、考えていると思います。

お父さんはやさしかったのにいきなりいがんになつちゃつたんだからしょうがない。でも家族が一人でもなくなるとやつぱりさびしいかんじがします。私もいやです。美子ちゃん、どうしながら作文を書いたでしょう。またまたきもんです。私もそのきもんを考ええています。美子ちゃんも、手つだつて下さい。

松崎 義和

野見山美子さんは、きっと、この文を、くるしみながら、かいたとおもいます。ぼくならきつとかけません。

美子さんのお父さんは、この文をよんでも、

ひとことも美子さんの心に、きずつけていないのが、すばらしいお父さんだと、おもいます。じっさいにあったことを、ここまで、うまく文にかけるのが、すごいと思いました。

中谷 衣里

わたしは、お父さんがなくなったらどんなにかなしいだろうと思います。わたしにはお父さんがいるけど、いなくなったらつらいと思います。美子ちゃんは、お父さんが午後になくなったとき、どんなに悲しかったことでしょう。美子ちゃんの大すきなお父さんがなくなつて、かわいそうだと思います。

久保田 光

ぼくは美子さんの作文を読んで、はっとしたことが、いくつありました。その一つは、ぼくのお父さんが死んでしまったことを頭の中に、ふつと、イメージしたのです。なんだかきゅうに、悲しくなってきました。手じゅつを二回もやったお父さんの心は、どんな気もちだったでしょう。「いがん」とゆう病気でこんなことになったということは、ほんとうにおそろしいことです。

鎌田 善子

わたしはこの文をよんで、美子ちゃんがかわいそうだなと、おもいました。わたしはお父さんとお母さんとかがしんだゆめをみた、思ったりしたことがあります。でもほんとにしんではいけません。わたしは文をよんですごいなと思ったのは何月何日っておぼえていからです。わたしなら何にちもたって何月何日っておぼえていません。でも美子ちゃんはおとうさんのことを思っているからかもしれません。わたしは、お父さんがくちびるをけがしているときに、かわいそうだなと思いました。でも美子ちゃんのお父さんけがじゃなくてわたしはかわいそうだなと思いました。わたしのお父さんがしんだらかなしむかもしれません。ほんとうにかわいそうです。

小林美奈子

美子ちゃんは七さいの時にお父さんがなくなつてしまい、ほんとうにかわいそうだと思います。もしも、わたしの父がなくなつてしまつたらどうするでしょうか。わたしは、母がなくなつてしまうのは思つたことがあります。もちろん父がなくなることも、かんがえたことがあります。

でも、それがげんじつになったことは、一度もありません。でも、美子ちゃんはそのことがげんじつになってしまったのです。だから、わたしたちがなったこともないくるしいことを、七さいの時になつてかわいそうです。

普勝 裕美

美子ちゃんの作文を読んで、わたしは、すごいなと思いました。わたしだったら、お父さん、お母さん、弟たちがいなくなつたらこんな作文はかけないと思います。スキーに行ったこと、動物園に行つたことなどいろいろなお父さんとの思い出を作文に書いてすごいと思しました。「そのあとお父さんは病院へ行きまして」とかいてあつたので、わたしもどうしたのかなと、作文を読んでいるとちゅうで思いました。

新井明日香

私はこの文を読んで、心の中で思いました。もし自分のお父さんがなくなつたら。私はとてもこわくなりました。でも、美子ちゃんは、じっさいにお父さんがなくなりました。スキーや動物園は、お父さんが考えた「思いで作り」だったのでしょう。お父さんはちっ

とも、美子ちゃんをあまやかさず、二回も、手じゅつをしました。そして、むすめ・むすこ・つまをのこして、世を去りました。

美子ちゃんたちは、とても悲しかったでしょう。でも、くじけずきつといっしょうけんめい、生きています。

伊予田まゆみ

私のお父さんもやさしいお父さんです。でもなくなつてはいません。私は、この作文を読んで「かわいそうだなあ。本当にやさしいお父さんだったんだなあ」と思いました。

美子ちゃんのお父さんの病氣は、さいしょもうちょうと思いましたが、なぜかと言うと、もうちょうは手じゅつをするからです。

でも、読んでみたらちがいました。

私は、お父さんやお母さんがなくなつたゆめを、思い出しました。スキーとか、自転車をおしえてくれたのも、全ぶお父さんでした。私は、「美子ちゃんは、お父さんの思いで、たくさんあるんだなあ」と思いました。

小林 節宏

ぼくは、美子ちゃんが、とても、かわいそうだなと思いました。そのわけは、まだ七才

という小さなうちに、自分のお父さんが、死んでしまったからです。ぼくがその立場だったら、とてもがまんできず、学校にこないで、ただ、家でずっとないているかもしれない。それにぼくは、美子ちゃんは、すごいなと思いました。なぜなら、お父さんが死んで、半年しかたつていないのにこんなすごい文をかけるからです。

もしぼくが、美子ちゃんだったら、半年たつても、こんないい文はかけないでしょう。三年たつてもかけないかもしれません。そこるところを、ぼくはすごいと思いました。

松本 理

一九八八年一月にみんなでスキーにいったあと、お父さんはどうして病院にいったのか、ぼくも、どうしたのかなと、思いました。それから、二月に、こんどは、上野の動物園にいった、そのあとまた、病院にいった、こんどは入院して手じゅつして、ぼくはこんどこそ、ほんとうにしんばいになりました。ぼくは、「どうしたのかな」と思つてつづきを読んでみると、「いがん」という病氣で、びっくりしました。五月三十日にまた、二回目の手じゅつで、もう、めっちゃちゃんしんばいに

なりました。そして、お母さんが青い顔をして帰ってきたときに、「午後にお父さんがなくなつた」

といったときぼくは、いがんとは、とてもこわくておそろしい病氣だと思いました。

瀧本 青磁

ぼくは、美子さんの作文を読んだとき、お父さんになにかがおこつたんじゃないかとおもいました。美子さんのお父さんはなんで、「いがん」という病氣になつちやつたんだろ。ぼくは、ぼくがいがい全いん死んじやつたゆめをみちゃつたよ。美子さんののは、げんじつだからかわいそう。美子さんは、おこるとこわいおとうさんが、大すぎなんだね。

横田 静照

ぼくは、もしも、ぼくのお父さんお母さんがしんばら、いつまでもくよくよするかもしれませんが。けれど、美子さんはいつまでもくよくよなんかしませんでした。でも本当はさみしいでしょう。そういうことがいろいろわかります。ちがうせかいにいつてしまったお父さんも美子さんに合いたいと思つたかもしれません。

生と死を授業で

「生きている」実感が

不確かな時代

—子どもは「死」を

どうとらえているか—



長谷川 孝

「子どもは「死」をどうとらえているか」というテーマで原

稿を引き受けながら、はたと思考停止に陥っています。それがよくわからなくなってきたことも理由のひとつですが、そもそも「死」（死ぬ）とは何かということも、考えれば考えるほどわからなくなった、と感じているからです。

ただ、「生きている」という実感をどれほど感じ得ているのかなあ、と思います。近代の行きつまり感のあるこの時代に生きるわたしたちが、どれだけ実感を持ち得ているかと考え、学校をはじめ子どもたちの生活の現状を見ると、自分が生きているという手応えを子どもたちがあまり感じ得ないで

残ります。

「ひとつの生き物としての自分の統合性がバラバラに解体すること」とすれば、何が統合を司どっているのか？ を問うことになると思います。どちらの問いもつきつめていくと、自分の存在とか実存とかという問い、つまり「自分が何者なのか」という問いにつながるでしょう。これは「自分が何者なのか」がわからなくなってしまうという「二十世紀の人間たちに共通する問題」（内山節著『続・哲学の冒険』毎日新聞社）なのです。

もうひとつ、「死」とは「自分にとってのこの世の終わり」

いても不思議ではありません。この実感とは、たんに「いのちが輝く」ことだけではなく、苦しいときも気が落ち込んだときも、生きている自分（自分の中の自分自身、自分らしい自分）が確かに在ると感じることをイメージしています。

「死」（死ぬ）とは——。「自分の〈いのち〉がなくなる（終わること）」と考えたと、〈いのち〉とは何か？ という問いが

でもあります。これは、あの世（死後の世界）や霊魂はあるのかという問いにつながります。じつは、この問いも、死後の世界のイメージのあり方は生きている人間の生き方にかかわると考えると、存在への問いに結び付くと言えるでしょう。最近の死後の世界や霊魂への関心の高まりはたぶん、存在の不確かさを反映するものだという気がします。

子どもたちは、自分が何者なのかという近代の行きづまりの課題を背負わされているのだと思います。たとえば、六年前にビルから飛び下りて亡くなった横浜市の小学五年生、杉本治くんの自死について、わたしがずっと考えさせられてきたのも、このことでした。子どもたちはみんな、学校に仮面をつけて（ほんとうの自分を隠して）行っているのにちがいないし、もしかすると家庭でもそうなのかもしれません。治くんは、〈自分らしい自分〉（実存）が死んじゃった（殺された）という感受とともに、かろうじて保たれていた〈学校に合わせた自分〉（存在）も教師とのトラブルの中で崩壊したという思いに襲われたのかもしれないと、わたしは思ってきました。「学校なんて大きい。みんなで命を削るから」という尾山奈々さんのことば（『奈々十五歳の遺書・花を飾ってくださるのなら』講談社）を思い出します。

子どもたちは、学校によって〈自分が自分であること〉を疎外された状態（存在）に追い込まれているような気がします。

す。〈自分らしさ〉＝自分が自分である状態が、日々押しつぶされて（殺されて）いくような、学校の現実です。学校にうまく適応する自己の存在の仕方を要求され、一方で子どもたちはそのような自己の存在を否定して〈自分らしい自分〉を少しでも実現していきたいと願っていているのです。治くんも奈々さんも、学校に合わせていけなくなり、自分らしい自分を削り取られたのであり、その自死は、死なされてしまった自分に現実を合わせたのではないかと、思われます。

一九八〇年代に自殺した少年（十八歳未満）は八六年の八百二人をピークに、年平均六百二十人（小学生は十二人）。このところ減少していますが、これだけの子どもが自ら命をたつたのです。わたしは一昨年から、子どもたちに〈へいのち〉について考えてもらうための素材を提供しようと、仕事先の小学生向けの新聞で「〈へいのち〉の不思議——生きること・死ぬこと」（筆者は宗教思想家のひろさちや氏）を始めました。この新聞で「死」の問題を真正面から取り上げたのはたぶん初めてのことでした。

宗教を選んだのは、生き死にとかかわりや〈へいのち〉を考えた人間の知恵の集積が宗教だと思からです。たとえば、食べるということは、ほかの生き物を殺してその〈へいのち〉をもらうこととか（わたしは、「いただきます」は「あなたの〈へいのち〉をいただきます」と言っています）。

そうやって「へいのち」がつながり合い支え合っていることなども、書いてもらいました。世界中の人たちが死後をどう考え、「へいのち」はどこから来たと考えていたかなども、ふれてもらいました。以前、地獄について連載したとき、多くの読者が母子でいっしょに読んで感想文を送ってくれて、驚いたことがあります。すでに親が地獄を知らない世代になっているのですが、あの壮大地獄は死を（ということは、生きることを）考えた先人たちの思想のひとつの集大成で、科学の名で切り捨ててはいけないものなのです。

また子どもたちには、死ぬことが「生」と地続きのようにとらえられているのではないか、へ生きること・死ぬことへの実感がうすくなっているのではないか、という気もしていました。しかし、「いのちを大切に」「いのちは貴い」といくら教えても、仕方のないことです。「へいのち」の大切さは、さまざまな直接の体験（他者への共感としても）の中で感じ取り気付くことで、わかっていくものなのです。

子どもの死亡した事件に際して学校はよく、「いのちは大切」と訓示しながら、授業は正常におこなうよう努力します。これは、ひとりの子どもの死よりも「学校の正常な運営」のほうが重い、と教え込む反面教師だと思うのです。一人の子が死んだら、つまらぬ授業など放り出して、皆で悲しみ悼み、その子を想い、「へいのち」や死について考えればいいのです。

いっしょに悲しむ、ともに泣く、そしてひとりのことをみんなで想う。そこに、死についての手触りでの受け止め、「へいのち」の大切さの感受があるのではないでしょう。

しかし、こうした体験や共感の機会は、子どもたちにはとても少なくなっています。わたしはたとえば、祖父母（身近な人）の葬儀には最優先で子どもを参加させよう、と言います。教師も、それを積極的にすすめるべきです。死とは、祖父母が孫に残す最後の壮大な教育でし、それをしのぐような授業などありっこないよ、と考えるからです。

この三月に、首都圏の小学校二・六年生各二クラスずつ、計三百二十五人に「へいのち」や『死ぬ』ことについての質問に答えてもらいました。まだ、集計の途中ですが、約三人に一人が「死にたい」と思ったことがあります。約三人に二人が、だれか（自分や家族、友だちなど）が死ぬユメを見たことがあり、「死ぬことはこわい」と思ったことがある人は八〇％。また、「自分が死んだら……」と考えたことのある人が約三人に二人でした。「死」について、子どもたちもいろいろと考えたり感じたりしているのです。

この中で、質問への記述回答を読んでいて気付いたことが、いくつかあります。たとえば「（死ぬことはこわいと思ったのは）どんな時、どんなことですか？」という質問に対しては、子どもたちがずいぶん考えていることはわかるので

すが、その体験の内容を見ると、直接体験よりテレビなどによる間接的な体験が多いことが気になりました。時期的に湾岸戦争とぶつかったこともあり、戦争のニュースで人が死ぬ場面や死体を見たのははじめ、事件や事故とかドラマでの殺人場面などを見て、「死ぬのはこわい」と思ったと多くの人が書いていました。映像による体験は、死についての意識を観念的なものにし、実生活の中で生かされない恐れがあります。認識が逆立ちするので、実体験に引き寄せて気付き直す機会を設けてやるのが、とても必要なのではないでしょうか。映像からの知識を、感性的な了解に変えて、身に付けることが大事だと思うからです。

もうひとつ、同じ問いへの記述の中で気になったことは、祖父母など身近な人の死に接して「死ぬのはこわい」と思ったという答に、クラスによって差があるように思えたことです。こういう体験は、特定のクラスに多いとは考えられませんが、クラスの担任の言動の影響がありそうな気がするのです。一人の子が祖父母の葬儀で休んだら、そのことを教室で取り上げ、その子の気持ちを聞いて心にとめさせ、クラスみんなの共通体験にしていくような、教師の対応があってもいいと、わたしは思います。

生活経験をおして生と死や「いのち」について感じ考える機会を、もっと学校でも家庭でもつくってやる必要がある

のです。日常の中で体験するささいな「事件」も、子どもたちの深い議論をさそいます。たとえば、ひろさんが取り上げてくださった「クモの巣にチョウがかかって、もがいています。あなたなら、どうしますか？」という問いかけも、そうでした。クモの巣にチョウがかかっているのを見て、多くの子に「先生、チョウを助けて」と言われて助けようすると、「そんなことをしたら、クモがかわいそうだ」と抗議する少数の子もいて、どうしたらいいか困ることがあると、幼稚園の先生からよく質問されるのだそうです。話し合っていると、食物連鎖のこと、自分たちの食べ物のこと、「いのち」のつながりや生と死の弁証法的な関係のこと、そして神仏のことや生命科学のことまで、テーマは広がっていきます（この資料は、必要な方にはできるだけ送ります）。

生と死や「いのち」を考えることは、自分が自分らしく生きることへの感受性や主体性を育てることにつながる大事なことです。内山さんは近代の意味を支える精神として、個人主義・合理主義・科学主義・発達主義の四つを挙げていますが、学校とは競争と効率によってこの四つの精神を子どもたちに押し込む近代の装置となっています。だから学校は、生と死や「いのち」を考えることを、むしろ妨げてきたのだと思います。授業で生と死に取り組み意義は、大きいのです。

（はせがわ たかし・ジャーナリスト）

生と死を授業で

死は隠されている

平山正実



の証である。

それでは、日本人は昔から死についてどのように考えてきたのだろうか。日本では古来、原始宗教であるアニミズムの影響を受け死を忌み嫌う傾向が強かった。現代でもお葬式に行ったとき、「お浄め」と称して塩が配られることが多い。そのような体験をもたれた読者も多いはずである。このようなことが行われる背後には、死体は穢れたものであるから清めなければならないとする思想があるのだろう。

あらゆる生き物には、始めがあり終わりがあある。生命をもつものには、かならず死がある。このことは千古不滅の真理である。しかし、そのことを自覚化できるのは人間しかない。動物は死が訪れることがわかっていても別に不安や恐れ感情をもつことはない。ただ人間のみが、迫りくる死を予期し考え、悩み、その到来を気づかうのである。その意味で、あらゆる生物のうちで人間のみが哲学する存在でありうる。「汝自身を知れ」と喝破した哲学者のソクラテスは、哲学の基本は、「死の修行」であると言った。このように、死と生について、深く考えることができることは、人間として

日本人の深層心理の中には、このように不吉なこと、嫌なことを見たり、触れたりしたくないという考え方がああるように思われる。このように死を隠し、死について思惟すること avoidance としてきた日本人は、生を謳歌する楽道家が多い。快なる生に対して最高の価値を置く生き方は、冒頭で述べた動物的生に近い。死を考えず、その日その日を楽しく暮らすことのみにエネルギーを集中していれば、未来への感覚はマヒし安心を買うことができるかもしれない。しかし、そ

れは、偽りの悦楽であらう。そこには、人間が本来もつべき、真実をみつめるまなざしが欠落しているように思われる。

それでは、われわれの先輩は、日常生活の中で全く死について触れなかったかというのではなく「大死一番」とか、「死んだ気になってがんばる」といったことばが日本人は好きだ。しかし、このような行動様式の背後にあるのは、我意であり、名譽であり、功名心である。そのためには「死ぬほどがんばる」ことが要請される。このような態度は、瘦我慢であるといってよい。死をこのようにとらえることは、決して精神的に健康であるとはいえないし、かえって死を隠すことにはしないか。

日本人は、病の床に伏していても模範的な患者であらうとする傾向が強いようだ。とくに病勢が進み末期になると、痛みや吐き気、だるさ、不安、焦りなどが出てくる。しかし、かれらは、努めて平静を装おうとする。死ぬほど苦しくても、あたかも健康時と同じように振舞う。医療者の方も患者が痛みを訴えても「もう少しがんばりましょう」「大丈夫よ」「心配しないで」などといって相手を慰めた気持になっている。どうして、余命いくばくもないのにがんばる必要があるのか。

死が真近に迫っているのに、なぜ「大丈夫」で「心配する

必要がない」のか。このような日常繰り返し返される医療者と患者の間の会話をみていても、日本人が死を避け、忌み嫌っていることがよくわかる。かれらは、死を直視するよりも、体面や世間体の方が大切なのだ。医療者の方も、自ら死を受容できないが故に、心にもない嘘をつくことになる。

このような瘦我慢をしてまでも苦しみに耐えるという考え方は、死に際をきれいにし、いさぎよく死のうとする特攻隊や切腹の美学に通ずるところがある。こんな死に方は止めて、もっと死を隠さず、虚勢を張らず、自分の弱さを出しても良いのではないだろうか。死に対する恐怖心や不安などホソネの部分の正直に表現した方が人間的で好感が持てるし、周囲の者も介護し甲斐があるというものである。

ところで、現代社会において死が隠されているということ、を、医療者の立場からもう少し敷衍して考えてみることにしよう。

現代医学は病氣や死を敵とみなしてきた。科学は、病氣や死に挑戦し、それを克服しようと努力してきたのである。したがって、科学や技術を利用して治療することを目的とする医学は、病やその背後にある死を否定することになった。近代から現代に至る医療の歴史の中で、死が隠されてきたのは、このような理由によるところが大きい。その結果、病氣

を友とし、死を受容するという視点は、徐々に失われていった。そして、病人、とくに臨死患者は、『異邦人』として差別され隔離され、排除され始めたのである。このように、近代医学は、医者や患者、さらにはその家族に病氣や死と親しむ術を教えなかった。今やそのつけがわれわれのところに回ってきたのである。このことと関連して、最近盛んに問題にされている病名告知論議について若干触れておきたい。

病名告知が問題になるのは大抵がんの場合である。がんよりも予後がわるい疾患は沢山あるのに、不思議とがんだけが祖上に上げられる。それは、人々の間にすでにがんイコール死という思考パターンが、出来上がってしまったからであろう。その意味で、一世代前の結核や癩と同じく、がんという烙印を押されたものは、自らの内に死をかえ込んだ存在とみなされ、忌み嫌われる傾向がある。先端医療を施す大学病院で、今もなお、がんの患者に病名が告知されることはめったにないという現状が、そのことをよく物語っている。日本有数のがん専門病院ですら、がんの告知をして、きちんとその患者をフォローできるだけの資質をもった医師は、わずかに一〇％前後にすぎないという報告もある。

しかし、最近では、患者自身が知りたくなくても、真実を知ってしまう機会が増えた。たとえば、がんに関する情報は、テレビ、ラジオ、書物などを通して絶えず一般の人びとのと

ころに流されてくるし、入院すれば同室の患者同士の話し合いや投与される薬の名前や副作用の現れ方によって、ある程度自分の病氣の種類は見当がつく。その結果、患者やその家族は刻々と近づく死を思い、不安と恐怖と絶望の中で最後の日々を過ごすことになる。

ここで、病名告知をテーマとして精神科外来を訪れた事例を紹介しよう。

A子さんは、二十六歳の女性である。主訴は、うつ状態で縄を鴨居に巻きつけ首をつろうとしているところを家人に見され、精神科医のところに連れてこられた。問診しているうちに、六カ月前、父親がたまたまみてもらった若い医者からがんであることを告知されパニック状態に陥ってしまったこと、母親は夫の精神的危機にどう対処してよいかわからず戸惑っている内に、看病疲れも重なって次第に抑うつ的なり、二カ月前に自殺したことがわかった。

父の病氣による重圧と母の自殺によって、A子さんもついに精神的に破綻してしまい、自殺を企図したのである。悲しみは心理的に伝染するものである。このケースの場合、若い医者が自分で患者や家族の精神的ケアを引き受ける能力や覚悟がないのに、安易に真実を伝えたために悲劇が生じた。

ギリシャ語の真理ないし真実を意味するアレティア(αληθεια、

「*being*」という言葉は、「隠されていないこと」「覆いを取り去ること」といった意味をもつ。ギリシヤ的な真理の理解の中には、「事実関係について正しく認識すること」といった意味もあるが、キリスト教の正典である聖書の中で使われているアレティアは、「負荷に耐えるもの」「信頼に値するもの」「誠実」といった意味をもつという（聖書大辞典）。つまり、ものごとが隠されず、明らかにされるためには、ただ単に事実関係を適切に認識する悟性の働きのだけでなく、信頼、誠実などといった態度や意志的行動も必要なのである。

このことを、病名告知に関連して説明するならば、医療者はがんであるという情報を正しく伝えるだけでは不十分であって、患者に対して、最後まで誠実に付き合い、信頼関係を維持してゆくことが求められていることがわかる。もし、前述した事例の中で登場する若い医師が、A子さんの父親に対して、病名を隠さず告知するにあたって、「真実を明らかにする」ということの意味をもう少し深く考える人であったならば、A子さんのうつ病に伴う自殺企図や母親の自殺は防げたかもしれない。

日本人はこれまで、死を隠し通してきた。現代医学も努めて死を隠そうとする。しかし、こうしたあり方は真理や真実に反していることは明らかだ。そこには虚偽が介在するがゆ

えに、深く人の心を傷つけることがある。しかし、診察や検査によって得られた事実のみをそのまま伝えることが本当の意味で「真実」であり「真理」であり「隠していることを明らかにする」ことではない。それが本当の意味で真実や真理となるためには、医療者と患者および家族の間に信頼関係が成立していなければならず、しかも、医療者は常に患者や家族に対して誠実でなければならない。

このように、本当のことを包み隠さず言うということは、極めて責任の伴う行為なのである。日本人の場合、このような責任の観念はきわめて希薄である。「そこまで面倒は見えない」というのが大部分の医療者のホンネであるように思われる。

ほとんどの医師や看護婦は、診断や検査、そして治療や処置に追われ多忙である。したがって、精神的な援助までとて手が回らないと述べる。それは事実であろう。それならば、なぞもつと聖職者やソーシャルワーカー、カウンセラー、ボランティアなどといったコ・メディカルスタッフの参加を促し、役割分担してサポート・システムを作れないのだろうか。病いや死を隠さないためには、それだけの代価を支払う必要がある。隠されていることを明らかにすることは、主治医や看護婦の決意や覚悟、さらには責任感を必要とするだけでなく、それなりのコストやそれにかかわる人びとの資質と

いったものがそろっていなければならない。

最後に病名告知に関連して、医療者の教育について言及しておきたい。これまで医師の代表的な職業倫理として、「ヒポクラテスの誓い」が人口に膾炙されてきた。それは、この誓いが医学を魔術や呪術から解放しただけでなく、医師としてなすべき責任倫理に触れているからである。しかし、二〇〇〇年の長きにわたって真理であると信じられてきたこの誓いに対しても、最近批判の声が上り始めている。

その理由として、まず第一に医師たるものは、「私の能力と私の力の限りを尽くして患者のために尽くします」と一人称で書かれているが、現代の医療は医師一人だけではやってゆけなくなっていること、第二に「患者の利益を第一」として、患者に害を与えない」と記されているが、なにが患者の利益になるのかということを一方向的に医師が決めてよいのかという疑問が提出されていることなどが挙げられる。このような「ヒポクラテスの誓い」批判は、そのまま病名告知問題を検討する際にも考慮されるべきであろう。

今後医療の現場において、死が隠されず、真実が明らかにされてゆくためには、「ヒポクラテスの誓い」に象徴されるような医学教育の改革をすすめることと、国民の間に「死の準備教育」を普及させることが急務であると考ええる。

(ひらやま まさみ・自治医科大学)

'91年フォーラム申込み受付中!!

一定員(150名)になり次第締切ります。お早めにノー

| 8/2 (金) | | 8/3 (土) | 8/4 (日) | |
|---------------|--|---|--|--------------------------------------|
| 8:00 ~ 9:00 | | 朝食 | 朝食 | |
| 9:00 ~ 12:00 | | 分科会 1 女の解放・男の解放パートⅡ 2 親と子が水平に向き合うには —母子関係からの通定— 3 シングルのメリット・デメリット 4 どうする。どうすめさせる —家庭科男女共学— 5 こんな家庭科をやってみよう 6 みんなにやさしい事後追進 7 郷土の自由から女性・環境を考える | フォーラムから 明日へ サラダトーク 「私はいま フォーラム に参加して」 | フィールド ワーク (高山山 の自然と 防災道) |
| 12:00 ~ 13:00 | | 昼食 | 昼食 | |
| 13:00 ~ 14:00 | | 全体会 「出会いの歴史をつくる —違いとつきあう—」 山下政一さん (アジア保健研究所長) 李 順堂さん (アフリカ・女性運動史) 藤田 肇さん (外語大・アラビア語) | | |
| 14:00 ~ 14:30 | | 全体会 フォーラムへようこそ | | |
| 14:30 ~ 17:00 | | 「育つことと育てること」 中村弘幸さん (南南学館理事長) | | |
| 17:00 ~ 18:00 | | 夕食 (立食パーティ) この指とまれ交流会 (21:00 ~ 22:00 映画「母たち」) | | |
| 18:00 ~ 19:00 | | 夕食 (立食パーティ) この指とまれ交流会 (21:00 ~ 22:00 映画「母たち」) | | |
| 19:00 ~ 20:30 | | 交流会 1 南米戦争をかんがえる 2 CMMの中の性別と メディア教育の可能性 3 アジアと私たち 4 家庭科スクランブルトーク その他自由につくります | | |
| 20:30 ~ 23:00 | | 交流会 この指とまれ交流会 (21:00 ~ 22:00 映画「母たち」) | | |
| 23:00 ~ 24:00 | | 交流会 この指とまれ交流会 (21:00 ~ 22:00 映画「母たち」) | | |

91年フォーラムは、東京でも自然が豊かに息づいている、八王子の大学セミナー・ハウスが会場です。「We」の出会いと交流の場に参加して、自然の中で、身も心も解き放つてみませんか。今年のテーマは「**出会いは歴史をつくる**」—違いとつきあう—。個の確立にかかわる関係性の問題を、「**違い**」に焦点をあてて、話し合い、深め合うことを、フォーラムのテーマとしました。

生と死を授業で

生と死、そして超越

ト
部
文
磨



のっけからいきなり水をかけるように申し訳ないのだが、私は近年の死に対する風潮、取り上げ方などの騒ぎすぎに対して、当初から一貫して鎮静化を目指そうとしている立場であることを、断わっておきたい。

なぜ死ぬことが、これ程までに騒がれるようになったか。その要因については種々の観点からすでに読者諸氏は、そのよって来たる社会現象について、よく承知しておられると考えるので、改めての重複は避けておく。

死は生物にとっての当然の帰結であり、人間にとっては人生の完結である。死は忌むべきものとして考えられていた時

代の方が、事は静かであった。それが正面から取り上げられるようになったのは、良いことには違いないのだが、しかし逆に現象面としては死を忌むことが正当化されるような風潮へ流れていったのである。

その忌むべき内容は二つに分けてみることができる。一つは死に対する恐怖、いわゆる死ぬのが怖いというアレルギー的な感情で、これは宗教の説得力が

弱まるにつれて、死後の世界が信じられなくなり、気持ちのやりどころを失って、死後の世界が暗闇であったり、あるいは死後は全て無であったりということが許容できず、死んでも尚まだ何かがあつてほしいと望む、もう一つの命への未練や執着からくるものである。最近、臨死体験のレポートなどが盛んに取り上げられているが、蘇生を体験していないほとんどの一般の人たちにとって、この臨死体験談が根源的な死の恐怖を消すほど強力な説得力を発揮するとは思えない。ただ末期から臨終間近い患者にとっては、いくらか心休まる永遠

の眠りに導く効果とはなるだろう。

もう一つの死の拒絶は、現状ではまだ死ぬに死にきれないほど心残りや、あるいは欲望に対する執着がいつぱいあって、いわゆる「まだ死ぬのはいやだ」という表現で、これこそが本質的な人間の業である。かつてはこの業は非道德的なものとして、口にしたくてもできなかったのが、現代は率直にありのままに表現することが当然のこととして許される風潮であるため、この問題の解決がもっともむずかしい。

昔の人は「運」というものを大きく認めていて、自分の運が悪かったことをあきらめる習慣の中で暮らしていたものだが、現代、これだけ医学が発達すればいかなる死病も免れうるという盲信のもとに運を認めなくなってきたのだ。これはまさに医学、医療の功罪というしかない。

医療はどんなに発達しても、終局の不老不死は絶対にありえないのだから、治せない病気がなくなることともう少し認めた方がよいし、一方、文明発達と環境悪化で次々新しい疾病が発生してきて、医療が追いつかないこともある。だが、それをたとえ知っていても、やはり自分個人としてはそれに該当しないと思いたがる傾向は、今さらどうにも変えることはできない。

そこで免れぬ死を知った人は、計画的な将来に対する未練

や欲望がはつきりとあるとかないかいということとは直接かわりなく、自分だけがなぜ今死ななければならないのかという矛盾、そしてその時、周囲の人々が健康そうに生きていることに対する強烈なジェラシーなどが渾然一体となるが、さりとてその矛盾を誰のせいにもしようがない。このやり場のない葛藤はいいようのない怒りに変化するしかないのである。従ってその対象は神であったり運命であったり、甚だ曖昧なものでしかない。よく言う「神も仏もないものか」という表現は万人、万国共通のものである。だから多くの場合、不機嫌になったり、反抗的になったり、拒絶的・自閉的態度をとったり、また逆に誰かれなしに、遂には物にまであたりちらす、いわゆる「荒れる」現象となって現れる。

現在アメリカではサナトロジストと称する専門の精神科医が生まれつつあり、この人たちがターミナルケアにかかわるメンタルサポートを受け持っているが、この作業の中で一番主として用いられる技法は、聞くに徹するということで、これは体験的に生まれた技法ではあるが、ロジャリングカウソンの影響を受けていないとはいえない。この点では専門のワーカーも同じ技法をとっている。しかし、サナトロジストの独自性は、制ガン剤の有効性と副作用とのバランス関係及び、患者家族の希望などによって具体的な治療にまで

積極的に関与できるという点にある。どんなにくどいグチでも忍耐強く聴く。この時の原則はなぐさめたり、激励したりあるいは分かっていたような発言を絶対につしむということが最重要で、その他患者から具体的な要望事項があれば、これはワーカーなどとチームを組んで、その要望をできる限りかなえてあげる。それがたとえ相当困難な、あるいは勝手な希望であっても、患者さんの最後のわがままとして受け容れ、最大の努力をほらう。これも重要な原則になっている。

これらの精神的ケアで患者の心理のある程度はなぐさめられ、コミュニケーションのよりどころも生まれるが、それだけではまだすまない感情を残すケースが多い。それが先程述べた「怒り」の解消という問題である。サナトロジストまで加わって、チームが誠心誠意を尽くせば尽くすほど、そのことについて患者は感謝をしなければならないと思う。だがそれでも尚、なぜ自分だけが死ななければならないのかという怒りは別のものである。かといってこのケアチームや家族に怒りをぶつけるわけにも行かず、やはりうつうつとしたままにいる。これに対してどのような手立てがあるのか。誰も考え出すことはできなかった。

この怒りの感情というのはグチの中に含まれてしまうケースが多く、表在化しにくいものであるために、現在でも現場のケアではとりおとしたままになっているのだが……。

よくあるこんなシーンを想像することは、誰にでも容易なはずだ。悲しみの極に達しどうにもならない感情に陥った時、それは怒りに変化してゆく。そういった状況下で、ある男が森の中で一人、誰も見ていないことを確かめて、棒きれをふり回し、狂ったように泣き叫びながら木立ちをめったやたらにぶったたき、走り回る。また、誰もいない砂浜で砂の中でもがき、あるいはびしょぬれで渚を走り回る……。

実際には少ないケースだろうが、ここまでの衝動的感情を秘めている人は、死に直面すればもちろんのこと、そうでなくとも相当数実存する。これはLDTワークショップ(Life, Death and Transition Workshops)の略。We'88年十一月号参照)を開始して初めて知った、おどろくべき実数なのだ。

もう一度整理すると、不安・恐怖をやらげること、と怒りをできるだけ解消させること。この両者を取り上げなければ片手落ちということになる。しかし実際には、不安・恐怖は、語り尽くされているように、夜中にでも病者のそばにすわり、手を握り肩をなでる等の行為によって軽減することができるが、怒りの解消策となるとそうはいかないし、その方策はなかなか考えつかなかった。この問題に真正面から取り組んだ人は、エリザベス・キューブラー・ロスである。

彼女はその手段を模索するために、実験の場を作りそれを「ジャンティ・ニラヤ」(サンسكريット語で「平和の家」の

意」と名付けた。告知された人の自由宿泊施設にしたのである。死に直面した人々が一堂に集まってグループコミュニケーションの生活をもつ形態など、どこにもなかったことだから、そこでは、同病者同士としての、想像を絶する情景が展開された。それは、誰はばかりことなく怒りをぶつつけ合える場所となったのである。時にののしり合い、時に荒れ狂い、器物はこわされ、そしてまた、互いに抱き合って号泣するなど、世にもすさまじい光景でありながら、それはまた、自然なありのままの姿でもあった。彼女はこの情景の中で、この人たちのすべての行為を無条件に受け容れたのである。そこから生まれた思想が今でも中核となる「アンコンディショナル・ラブ」である。

こうして文章で書けば「なるほど」とは感じられるだろうが、実は一たん「荒れ」が始まると鬼気迫るほどの状態も生まれる。この「荒れ」は日本では実感が無いが、アメリカではエイズに対する迫害、被害感などから、患者による放火、電話ボックスの破壊、衝動殺人等が現実起こっている。怒りをケアすることでこのようなことを事前に防止できるとエリザベスは、はっきりと私に語った。荒れ狂う人を恐れず、動じず、見ていられる目をもっていることは、精神科医としての必要条件である。これは私自身が精神科医であればこそ、断言できるのである。

怒りを解消するには、思いきり怒りを発散させる。この手段しかないという結論をもつ。だが、この作業は一对一の臨床の場では対応が困難なので、グループでなければならぬという条件もある。そこでこの形が次第にワークショップに移行して行ったのである。

現在のワークショップにおいて中核をなす解放作業内容は二つで、絶対のプライバシーを守るという条件付きのもとに、恥部も何もかもさらけ出して、存分に語り、訴え……それを無条件受容で全員が聴くことで自然に成り立つ。なぜなら自分もまた、聴いてもらうという互関性が存在するからである。

次に怒りの発散法として、かつて「ジャンティ・ニラヤ」を通り、旅立って行った人たちが工夫を重ねたあげく、もっとも安全で、もっとも効果的な方法を、思いもつかない見事な遺産として残してくれた。

ガラスをぶちこわし、器物をたたきこわす。そこから始まって長い紆余曲折を経て、彼らが定着させた方法は、古電話帳を一本の硬いゴムホースでズタズタになるまでたたきこわす、という非常に安全で、すばらしくシンプルで、もっとも効果的なものとして完成されている。これがこのワークショップの作業であり、語ることと、たたくことが一体化の流れとして構築されている。このワークショップのユニークさと

絶大な効果はこの点にある。

この怒りを見すえ、その解消法を模索し、見出し、実践にまで作り上げた唯一の人が、エリザベス・キューブラ・ロスである。

今年の夏は彼女がやってくる。去年の夏は私が行って居候したから……。

(うらべ ふみまろ・精神神経科医)

53年、大阪に生まれる。在日二世、兄弟姉妹は八人。一ツ橋大学で週一回「朝鮮語」の講座を持つておられる。

二、三年前から、女性問題研究者としての発言を求められる機会が増えたが、女性問題の専門家と見られるのは面はゆいとおっしゃる。「それだけまだ女性問題を自分の中で深めきれてはいないし、また、女性としての問題だけでは自分の問題は解決しないから」と。李さんの根本的な関心の一つはあくまでも在日朝鮮人としてどう生きるかというところにある。

子ども時代、特にご自身が差別されたり、いじめられたりした経験はないが、弟さんたちが

泣いて帰ってきたり、辛い思いをしていたことは知っていた。身上調査書を提出する時などは、友だちに見られるのが嫌で、内心ビクビクしていたという。「隠さなくちゃいけない



フォーラムの
シンポジスト

愛 順 李 さん

いんだ、自分は違うんだという思いがいつもどこかにありましたね」と、当時を振り返る。今でも弟さんたちは本名では商売ができないという現実がある。在日朝鮮人が日本の

中で生きづらいという現実をそのままにしておいて、国交だのと言ったって浅いものではないと、抑えた語り口からかえって怒りが伝わってくる。

ご家族の中で本名を名乗っておられるのは李さんおひとり。「でもすべて本名で通しているわけではないですよ。適当に使い分けていますけど」ともおっしゃる。

お連れあいを男というより、日本人だと感じてしまわれる方が多いという李さん。私などには到底理解しきれない在日朝鮮人としての李さんのありようを思い知らされたインタビューでした。訳書に『分断時代の韓国女性運動』『分断克服と韓国女性解放運動』(お茶の水書房)

(河村)

生と死を授業で

非暴力といのちの尊重

——湾岸戦争とフェミニズム——



奥田 暁子

湾岸戦争はアメリカ（と多国籍軍）の圧倒的勝利に終わった。戦争は終わったが、私たちはヴェトナム戦争が終わった時のような解放感・安堵感を持つことができない。戦後に残ったのは底知れぬ深い喪失感とむなしさである。破壊された環境が元どおりに修復されるには数十年という長い年月が必要だと言われている。そして、毎日のように報道される百万人とも言われるクルド人難民の惨状は、あの戦争への疑問を一層大きくする。クルド人の惨状はおそらく他のイラク民衆やクウェート民衆の惨状でもあろう。四月十八日付の新聞は、難民の状況よりもはるかに深刻な事態がイラクの全土で

ムが浸透しているといわれていたアメリカで、フェミニズムは戦争阻止の力とはならなかった。むしろ、ブッシュ大統領の政策に対する80パーセントもの支持率が物語るように、女性たちもまた、戦争を積極的に肯定したのであった。政治というのは現実的で、思想が政治に直接的な影響を及ぼすなどと考えるのはナンセンスだと言う人もあるだろうが、フェミニズムは単なる思想に留まらず、家長制社会のシステムの変革をもその射程に入れてきたはずである。にもかかわらず、戦争を阻止できなかったのはなぜなのか。私たちはフェミニズムが無力であったことを率直に認めた上で、

進行していると伝えている。そして、パレスチナ民衆の独立への期待も一層遠のいた。いつものことながら、戦争では幼い子ども、老人、女たちなど、弱者と言われる人びとが真っ先に犠牲になる。いったいあの戦争は何だったのか。

湾岸戦争はフェミニズムにも大きな問題を提起した。あの戦争に関してフェミニズムはまったく無力であった。フェミニズ

その原因を考えなければならないと思う。

今回の戦争の特徴の一つに女性兵士の戦闘行為への参加があった。ヴェトナム戦争では1.5パーセントに過ぎなかった女性兵士が今回は11パーセントにも増えた。また、黒人の比率が増えたことで(31パーセント)、黒人女性兵士は全女性兵士の49パーセントとなり、主力となった(白人は44パーセント)。既婚兵士も全女性兵士のうち53パーセントを占めた。そのうちの16パーセントは母子家庭であった。テレビや新聞では、戦場に赴く母親と泣いて別れを惜しむ幼い子どもたちの姿が報道された。

現在のアメリカは志願制なので、軍隊に入るのは大学に行くほど豊かではなかったり、よい仕事につけない人びとだといわれている(黒人が多いのはそのためだろう)。その意味では、女性兵士についても社会的弱者という視点から見なければならぬが、ダブル・インカムの一つの形として、夫婦揃って兵役に志願し、軍隊で職業訓練を受けて、数年後に退役して他のビジネスを始める例も多いというから、女性兵士の存在は保護よりも平等を目指してきたアメリカ・フェミニズムの一つの帰結であるとも言えるだろう。軍国主義を否定するのであれば、女性兵士の存在そのものが容認できなくなるはずであるが、マルクス主義フェミニズムはその辺をあいまいにしてきた。というよりも、その問題を避けてきた。ア

メリカのフェミニストの合言葉が「メインストリームへの参入」であったように、彼女たちは先ず何よりも、性差別の解消と経済行為への平等の参加を最優先させてきたのである。それは男の価値基準に女を合わせることで、「男なみ平等」を重視することであった。このような視点だけからは軍国主義批判は出てこないだろう。

もちろん、アメリカやヨーロッパのフェミニズムにも軍国主義批判の視点が全くなかったわけではない。軍国主義と家長制の関係を明らかにし、軍国主義が貧しい人びとの福祉を削減し、都市を荒廃させ、失業者を増やし、生命を危機に陥れていると批判したのはエコロジカル・フェミニズムである。すでに80年代の初めに、アメリカではエコロジカル・フェミニストたちがミサイルの生産に反対し、軍国主義を拒絶するために国防省の建物であるペンタゴンを人間の鎖で包囲する「女性のペンタゴン行動」を行っている。イギリスのグリーンナム・コモンの女性たちの行動も、軍国主義批判の非暴力直接行動である。彼女たちの声は今回の戦争ではかき消されてしまったけれども、私はこの少数者の動きに期待をかけた。

しかし、アメリカのフェミニズムをそのまま踏襲してきた日本のフェミニズムは、エコロジカル・フェミニズムについては母性主義と結びつくとして、多くのフェミニストは批判

的であった。そのため、エコロジカル・フェミニズムはほとんど手つかずのまま放置されてきた。確かに日本では、加納実紀代氏も指摘するように、「母性」は天皇制家族国家を維持するための民衆支配の原理として使われてきた（『自我の彼方へ』）。十五年戦争時には国防婦人会だけでなく、女権拡張論者もまた、政府の「母性」尊重の戦略に率先して協力したことはよく知られている。したがって、過去の歴史を考えれば、このような手垢にまみれた言葉に対して女性たちのアレルギーが強いのも、致しかたのないことかもしれない。

しかし、「母性」そのものがマイナスの記号なのではない。たとえば、今日、アメリカの黒人女性たちは母性の働きを重視する立場に立って、「ウーマニスト神学」という新しい女性解放の神学を創造しようとしている。奴隷解放運動の中でめざましい働きをしてきた黒人女性たちは、現在もまだ人種差別と貧困に苦しむ中で、自己の尊厳を取りもどし、傷ついた女や男を癒す力として、また、共同体の連帯感を高めるために、「母性」を肯定的に評価している。また、先住民族のインディアンの女性たちも、人間を含めたあらゆる地球上のいのちを育み、ケアする力として、「母性」を尊重している。もちろん、個人主義志向の強いアメリカの社会に生きる黒人女性と、個の確立が未成熟で、共同体がすぐさま「和」の論理に支配されてしまう日本の社会に生きる私たちを、同じ

ように論じることができないかも知れない。黒人女性が男性との共生や母性を重視するのも、男女共に人種差別や貧困に苦しんで来た長い歴史を持つからであろう。しかし、たとえばそのような違いを考慮したとしても、今日のようにいのちが脅かされている時代には、用語の問題にこだわって手をこまねいているわけにはいかない。あの油まみれの鳥の姿や油井の炎上によってまっ暗になった空が象徴するように、戦争は地球の生態系を暴力的に破壊することが誰の目にも明らかにあった今、私たちが未来になんらかの希望を持ち続けるためには、いのちを育み、養う思想、戦争を肯定するのではなく、否定する思想を生み出していくしかないと思う。いのちを否定するとき、私たちの行き着く先はニヒリズムである。

私は日本の場合、母性が問題というより、国家を越える思想がない点が問題なのだと思う。本来は普遍的な価値であるはずの母性までもが、国家に取り込まれてしまうことが問題なのだ。かつて母性が国家に利用されたのも、女性たちが女性の解放という普遍的な価値よりも、国家に評価されることを重視したからではないだろうか。いずれにせよ、母性と天皇制国家との関わりについては、もう少し別の視点から見えていく必要があるだろう。

さて、湾岸戦争はフェミニズムに大きなダメージを与えた

が、そこから立ち直るためにも、私たちは戦争がフェミニズムとは相反する「男の論理」であることを明らかにしていかなければならない。戦争は古代から家父長制社会を維持・強化するための暴力的な手段であった。ハイテク戦争になっても、戦争が暴力であることに変わりはない。そもそも家父長制社会を発生させたのは暴力であったと言われているように、他者を服従させるためには暴力が必要である。レイプもセクシュアルハラスメントも、妻や子どもに対する殴打も、家父長制にひそむ暴力が原因である。したがって、フェミニズムが平和の思想となるためには、今回のことを教訓にして、これまでとは違う視点に立たなければならない。それは暴力を容認する男の論理に対して、非暴力の論理に立つことである。ウーマンリブがフェミニズムに変わったのは、単なる呼称の変化というだけではなく、フェミニズムがそれまでの女権論を超える思想となったからではないだろうか。

非暴力については、現実的ではない、理想論に過ぎないという批判が多く聞かれる。そして、非暴力が現実的ではない証拠として、非暴力を実践したキング牧師やガンジーが暴力によって命を奪われた事例がよく持ち出される。しかし、暴力によって平和を維持できると考えるのも幻想である。それは人類が過去に犯してきたさまざまな暴力行為を思い出せば、すぐに分かることであるし、何よりも、今回の湾岸戦争

がそれを実証したのではないだろうか。キングやガンジーが暴力に倒れたのは事実だが、しかし、彼らの死は決して無意味ではなかった。キングは今もアメリカの黒人たちだけでなく、第三世界の人びとの解放の戦いの中にメッセージを与え続けているし、ガンジーの思想の重要性も消えることはない。キング自身が二千年前、十字架上で非暴力を守って死んだイエスの生き方に倣ったのである。したがって、たとえば今には効果は現れなくとも、長期的にみれば、非暴力は大きな影響力を持つといえるだろう。少なくとも、暴力は憎悪や復讐など新たな暴力を生むが、非暴力は暴力を生まないからである。

これまで人類は何度も大量殺りくやさまざまな暴力行為を繰り返してきたが、その度に、暴力によっては平和は訪れないこと、非暴力は暴力に優ることを学んできた。今やっと、一人の人間のいのちは人種にも性にも関係なく、全く同じ重さを持つという合意にまで辿りついたというのに、歴史をまた逆もどりさせようとするのであろうか。そのような愚を繰り返さないためにも、フェミニズムは単なる男女平等の思想を超えて、非暴力といのち（人間のいのちだけでなく、地球上のあらゆる生物のいのち）の尊重をその思想の中心に据えていかなければならないと思う。

（おくだ あきこ・短大講師）

発言

「クオリティ・オブ・ライフ」の確立を

飯塚 眞 之

クオリティ・オブ・ライフ（Q・O・L）いのちの質）、とりわけ末期医療でのQ・O・Lについて考える時、まず思い出すのは、伝統的な米国のホスピスの一つ、ニューヨークのセントローズ・ホームでの光景である。一八九六年、米国の作家ナサニエル・ホーソンの娘、ローズ・ホーソンによって創設された米国最古のホスピスだ。厚い信頼に基づき、施設の運営は全額寄付で賄われ、入所者は無料である。

同ホスピスには昨年冬、A・デーケン上智大学教授を団長に医師や看護婦のグループで組織された米国ホスピス視察団に参加して、訪問した。イーストリバーに面した建物で、病棟に入ると冬の長い日差しがきれいな病室に深くさしこんでいた。窓辺からは、冬の陽光をはじいて青く広がる川面が見下ろせる。その明るい室内で、患者たちはちょうど昼食をとっているところだった。シスターの案内で病室を回ったが、第一の驚きはまず、そのフランクな開放性にあった。

施設側は私たちの訪問について患者たちに話をし、面会についても各自の希望を聞いている。患者たちは気持ちよく会うことを認めてくれた。もちろんその開放性は、われわれに對する信頼に基づくものだが、それにしても病室でわれわれが患者たちと言葉を交わし、患者の了解を得て写真を撮らせてもらったりしている間、シスター初め職員は一切の制限を加えなかった。仕事で側を通るシスターや男子の看護人も、邪魔にならないように気を使いながら、つつましく静かにすり抜けていく。この開かれたおらかな姿勢はどこからくるのだろう、と私たちは話し合ったものだ。

第二の驚きは、ベッドでわれわれを迎えた患者たちの笑顔の明るさやおおらかさであった。そしてこの雰囲気や決定しているのが、職員たちの身についた自然な明るさや優しさ、一人一人の人格性のよさであることもわかった。

この施設の患者たちは全員が末期がんである。自身の病名

も承知している。平均余命は六週間。実は私たちが訪問したその朝にも、われわれの訪問を楽しみにしていた患者のひとりが亡くなった、との話を聞いた。その説明を聞いた時、この人たちは今まさに、この世の最期の時を過ごしているのだ、と改めて知らされたのである。その貴重な時間をわれわれに割き、笑顔で話し、冗談も言い、またあるムーンフェイスの黒人患者は、日本人ナースの手をしっかりと握って涙を流しながら自身の病状を話してくれていたが、そうした全員が身辺に、何とも言いようのない清潔で暖かな空気を広げていた。病人を思わせる憔悴や寝たきりの感じ、痛みに堪える苦痛のおもかげ、といったものが不思議なほどない。彼らは口々に、「私は今、本当に幸せだ。いつもシスターがいてくれてさびしくない」と語っている。

宗教は自由だが、朝六時半と午後にミサがあって、動けない患者はベッドサイドにある移動自由のテレビで、その光景をみることもできる。三度の食事の他、コーヒーやアイスクリームはいつでも食べられる。ビンゴゲームやワイン・チーズパーティーもよく開かれると聞いた。パースデーパーティーも大切にしている。一緒に同行した若い外科医が、「あの笑顔を見ると、あの人たちが末期がん患者であることを、つい忘れてしまう。ただの老人ホームの一風景のような気さえしてしまうのです」と語っていたのを思い出す。

ここで私たちが学んだことは、米国ホスピス運動が理念として挙げている思想のすべてがここにある、という実感であった。ホスピスとは単に建物だけを意味するのではなく、まさに末期医療でのケアの思想である、とは米国ホスピス関係者が繰り返し強調したことだが、その根本を貫くものは、いかに人間が最期までよく生きるかというQ・O・Lの模索と実践と言っていいだろう。その根本思想をやや強引に箇条書きにすると次のようになる。

①あなたを独りぼっちで死なせない②あなたを痛みや苦痛の中で死なせない③（人生の最期の場における）主役はあなただ。そして④愛する人たちにセイ・グッバイ（さようならをいうこと）のできる環境を作る。

そしてこの理念を実行するのが学際的なホスピスチームの総合力である。こうした本人に対する援護に加え、家族の悲しみに対処する「グリーンワーク」悲嘆対策」も深く追及されており、これもQ・O・L思想の側面といつてよい。

以上の諸要素こそ米国ホスピス運動が理想的と描いている末期医療でのケア思想の核心であり、言い換えればQ・O・Lの核心である。末期医療におけるQ・O・Lとは、最低限これだけの要素を満たさなければならぬと、米国ホスピス運動は考えている（実際の運動では、困難な問題が多々あ

発言

配偶者を失った人をたずねて

竹内希衣子

り、理想と現実の難しさをかいま見せているが、ここでは触れない。基本理念の正しさに変更はないからだ。そしてこの思想を貫く核は、徹底した「人権の思想」だと言ってよいように思える。

たとえば患者に対して『主役はあなただ』と言いきれる思想ひとつとっても、まだ日本の医療の現場には確立されてい

ないのではないか。あらためてその思想で、セントローズ・ホームの目にしみる冬の日の光景を思う時、そこには確かに末期患者に対するQ・O・Lが、とくに意気込むこともなく、自然な形であったのだと、参加した医師やナースとともに認めあったものである。さてこの光を、日本の医療の現場に投じたらどうなるのであろうか。（朝日新聞編集委員）

配偶者を失うということはどういうことなのか。

日常的にはまさかそんなことが起こるはずはない、と思っ
ていることが、ある日我が身にふりかかる。がんなど不治の
病に侵されて快復の見込みがないと知りつつ、現実死に直
面するまで、そのことを考えない。まして、突然の死など、
とうてい受容できるものではない。死はいつも理不尽なのだ。
私は二年前から、雑誌『ハイミセス』に夫を失った女性た
ちへのインタビューを不定期連載している。

自分の死についてよりも、つれあいの死のほうが現実には

大きなダメージになる、その経験をほとんど女性がしている
という状況のなかで、「死の受容と立ち直りのプロセス」に
ついて話してもらう。まだ経験していない者になにかしらの役
にたつことがありはしないか、という趣旨の企画である。

極めて個人的な体験であり、あまり立ち入った話にはなら
ないのだが、私が最もショックを受けたのは、それぞれに一
種の後悔、罪悪感に近い感情をもち、そのことから、体調を
崩したり、悩んだりして、時間の経過とともに立ち直ったと
いう人が多いことだった。「あの時にああすればよかった、

こうすればよかった」という思いが頭から離れないで、際限もなく考え込んで落ち込んでしまうのだという。

とくにがんで夫を失った妻は精神的なダメージが大きく、アメリカではそうした妻たちに一年間カウンセリングがおこなわれる。日本では、子どもたち、友人、地域のひとたちが、カウンセラーにかわる役割をつとめている例が多いようだ。

「とにかく夫のことを誰かと話したいんです。聞いて欲しいものなんです。夫のことを知っていてくれる人が近くにいてくれると安心して話しました」というKさんの経験に近い感情を多くの人に聞いた。そうして慰められたり、罪悪感をほぐしてもらったり、という過程が大切なのだろう。

大切な人を亡くした方に会うといつも、悲しい話をしてもよいのか、さけたほうがよいのか迷うことが多かったのだが、私の聞いた人たちはみんな話したかったと言っていた。

伴侶を失った人々の聞き取り調査をして『伴侶を喪う時』という本にまとめた河合千恵子さんの話では、「夫婦の関係が一方の死後に案外大きな影響を及ぼしている、死別で終わりののではないんです」ということなのだった。

夫の死後、いつまでも罪悪感から立ち直れないのは、あまり仲がよくなかった妻。むしろ仲がよかった人の方が思いきりよい。ただ、非常に仲が良くて、何でも二人で一緒という人で、そのために友達や地域との結びつきが弱い場合に

は、喪失感が強く、立ち直りがむずかしい。

夫婦仲がよくない間柄のほうが、解放感があつてよいのかと思っていたのが、どうやら反対だった。人間の罪悪感というのは、相対に御しがいのあるものがあるのかもしれない。

多くの残された妻たちは、死別のあとしばらくは浮遊感のなかで、事務的にしなければならぬことに追われて過ごす。

そしてある日我にかえって、木の芽が吹き出しているのに気づいたり、花が咲いているのを認識する。それから、夫はどういう人だったのだろうかとあらためて考え出す。夫を知る人々をたずね歩くことをはじめた人がいる。残された絵や文章を本にまとめることをはじめた人がいる。夫が楽しみにしていた畑に、夫が植えていた大根やいんげんを植えた人もいる。何か夫につながることをはじめた人が多い。夫が経営していた書店の主となり、四店に大発展させた妻もいる。

欧米では夫の死後再婚する女性が多いが、社会がカッパルで成り立っているので、一人ではなにかと不自由、そのかわりがないだけ日本のほうが生きやすい。それに夫につくし型が多い日本の妻は「もうたくさん」ということもあって、再婚率が非常に低い。子どもともある距離をもって、できるだけ一人で生きる。仲のよい友達と親しくつきあって、自分の時間を存分に思うように使う楽しみを発見する。

こうした立ち直りのプロセスを上手にたどるためには、あ

る程度の経済力と健康にめぐまれることが大きな要素になる。そしてもうひとつ非常に大切なのは、知的であるということ。自分がどう生きたいのか、よくわかっていて、それを実現するために意欲をもっていることが大事なのだ。こうしたことを目頃から折々に考えておくことは、大きな備えになるし、むしろ必要なことなのに……、とかく遺産相続のほうを熱心に考えがちのようだ。

身内といえども、情にかられないで対処できるだけの判断力と自分の生き方についての主張を持ち合わせたい。悪徳商法に引っかかって大切な老後資金をなくしたりしない判断力も持っていたい。

もう一つは、一人ということを学習する、といえはよいだろうか。一人でどこかにいく、一人で食事をする、つまり人を誘わなくても、自分のしたいことができるようになっていると、楽しいことがずっと増える。日本の妻たちは企業人間の夫をあてにしないで、友達と楽しむ訓練ができていて、ずいぶん一人には慣れている。それでも、齢をとれば会いたくなくともあり、人をあてにはしにくくなる。

伴侶の死はいつも突然、理不尽であるとしても、心構えとして備えておくことはできる。夫婦の間でも死をタブー視しないで話し合っておくことも必要だと思ふようになった。

(フリーランス・ライター)

「We」創刊十年！ この歳月に、著者が
出合い、思い、考えてきたことの集大成
ウィ書房が贈る最新刊！

半田たつ子

木犀の 白う朝

目次

- I くらしの中で
- II 人とのかわりの中で
- III 女と男
- IV 教育をめぐって
- V 私、そして家族
- VI いのちを考える

医師も驚く生命力で病魔と闘ってきた夫が、遂に力尽きたのが九月三十日。お通夜、お葬式をすませ、家に帰ろうとした時、木犀の香を聴いたのです。

夫を見送り、「We」が創刊十年を迎えるという区切りの時、まとめる本には「木犀」を名乗らせたいと思ひました。こうして、いまに区切りをつけ、次の一步を踏み出したと願ったのです。

定価一八〇〇円(税込)

(「はじめに」より)

ご注文は最寄りの書店に。(地方小出版流通センター版)
ウィ書房に直接お申し込みの場合、単行本は、送料をお
考えの上、直接で。(匿名明記)

182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14 TEL 03(326)1380

ウィ書房

振替口座 東京6-59867

発言

健やかに生きる権利、

安らかに死ぬ権利

松根敦子

我が国では十年ほど前まで、「生きる権利」のみをがむしやらの主張するに止まっていたが、今や命の質が重要視される時代となり、単なる「生きる権利」だけでなく、「健やかに生きる権利、安らかに死ぬ権利」の主張が注目されつつある。今までは「死」を負としてのみ捕えて忌み嫌い、「生きる権利」のみを声高に叫んできたが、人生を真に明るく健やかに生きるための心のありように気付くためにも、死を、命に限りがあることを、識ってほしいと願っている。私自身そこから多くを学ぶことができたから。

人間は老若男女、病める者、障害を負う者、健康な者等々、顔が異なるごとく一人として同じ状態の者はいない。しかし各々の身にあった「健やかな生」は、その人の心のありようによって見事に平等に具現化する。それをより高めるためには、助け合い支え合いが必要なことと言うまでもないが、「健やかな生」を支える根本であるところの各人の「望

む場で、望む医療」を実現するためにも、正に権利として、行政にも医療側にも声を大にして訴えていきたい。

地球上に約百五万種いる動物の頂点に立つと言われる人間。脳の働きによって文化的生活を営み、より豊かになると思ふ欲望ゆえに人類という種族が減るのではないかと憂えるほどの現在の進歩。医学医療しかり。人間の永遠の願望であった「不老長寿」も、「寿」とばかり言えぬようになり、一番自然な姿の自然死さえも出来にくい状況になった。その最たるものは人工心臓で動かされ続ける「脳死」であり、長年月意識のないまま横たわる「植物状態」ではなからうか。また「延命第一」を標榜してきたあまり、苦痛の除去も十分になされていない。これは私の「健やかに生きる」意味からは遠い。自分自身の安らかな死を得るためには、と考えはじめようになったのは、今年が十七回忌にあたる義父の死からだった。

義父は入院後なす術もないまま一週間で逝き、残された義母は生活の全てを父に依存していたため、義父の死後極度の幼児返りが始まり、一年二カ月後に亡くなる頃には、息子のこすらわからなくなった。この二人の末期から死に至る過程や、二人が入院していた病院で、文明の粹を結集させた医療のあり方を目にするうち、考えるようになった。その人らしい死を迎えるための自衛策はないかと「死」に対する私のアテンナが延びはじめたその時、新聞紙上で「日本安楽死協会」(現「日本尊厳死協会」)と出合った(安楽死という語は、ドイツでの忌しい過去を想起させたり、慈悲殺をも含むかとの誤解もされやすいとの考えから、一九八三年に会名変更)。自分の死に対して自分自身の意思を表しておくとは何と合理的なこと、「これだ!」と、一九七八年、私・夫・私の両親の四人がほとんど同時に「生者の意志」(現「リビング・ウィル」(以下、L・Wとする))を認め、会員となった。その時の心の落着きを今も忘れることはできない。(その八年後に父の死を迎えた。この際、自然死を迎えるのが明白だったが、本人の意思が表されていたお陰で本人の望みどおりに退院させることができた)。父の死が、さらに多くを教えてくれた。

安楽死の考え方が最初に著述されたのはトーマス・モアの『ユートピア』(一五一六年)である。安楽死は、人間が皆行

きつく死の際に苦痛がなく安らかにという素朴な願望に^二対し、延命第一主義がとられ、臨終の「死苦」を徒らに長引かせるという現象に対して生まれたものである。それが運動となり、英国で一九三五年初めて安楽死協会が誕生、後、米国に渡り有名な「カレン裁判」により一気に関心が高まり、一九七六年にカリフォルニア州で「自然死法」と称する安楽死法が初めて成立した。世界十九カ国、三十二団体が「死の権利協会世界連合」を組織し、我が協会も加盟している。来秋京都での国際会議が決定し、今、準備に忙しい。「自然死」も権利として要求する時代になった。「日本尊厳死協会」は、一九七六年、故太田典礼^{てんれい}医博を中心として結成され、十年間ぐらいいは三千名ほどの登録者だった。それが、医学の止まることなき進歩、高齢化社会、昭和天皇の末期の日々を見て人々が考えはじめ、マスコミの報道とともにこの三年間で五倍の約一万五千名の登録(米国では三百万名余)となった。女性が六割強、介護する体験の中で「私の最期は?」と考えるのは当然のことだろう。会員は社会のリーダー的な人々から市井の民まで、年齢は七十歳前後が最も多く、職業は様々、会員の中に多くの医療従事者がいるのが目を引く。

ここで何より大切な「L・W」について記したい。リビングは「生きている」、ウィルは法律用語では「遺言」だが、一般的遺言と異なり、生きていううち(死に臨む時)の遺言

である。「尊厳死の宣言書」は、自分の精神が健全な状態の時に宣言することが絶対の条件であり、その内容(要約)は、①自分の病気が不治かつ死が迫っている時、徒らに死期を引き延ばす延命措置は一切断る。②苦痛は最大限に和らげて。そのため死期が早まってもかまわない。③数カ月以上に渉る植物状態に陥った時は、一切の生命維持措置はとりやめてほしい。この宣言による要望を忠実に果たして下さった方に感謝し、一切の責任は私自身にあります、となっている。

以上の項目の中には「脳死」の語は見当らない。脳死が死であるか否かは素人の私が軽々に論じられるものではないしこの本が出版される頃には、「脳死臨調」からの中間発表も出ているはずだ。協会としては「脳死と判断された場合は、速やかにレスピレーターなどの撤去を要求する」としている。

一般の関心事は、日本だけで未だ法制化されていないL・Wを医療側に提示した時の態度であろう。昨年一月に発表された日本医師会のアンケート調査で八七%の医師が尊厳死に肯定的な回答をし、現にL・Wのコピーをカルテやベッドに貼る病院もある。会員からの報告などからも、日本の医療者の考え方の変化が手応えとして感じられるようになってきた。私は十七年間点訳奉仕を続けているが、常に視覚障害者への情報不足を痛感しているので、協会の資料を点字にしたところ、実際に四名の点字登録者があったのは、うれしいこ

とだ。

こうして「死」に対する準備を先どりしてきたが、私は自分のL・Wに「病状説明は私自身にお願いします」と付記している。協会の条項から逸脱してはいるが、私の意思は理解してもらえると期待している。各々が「望む場で、望む医療」を実現させるためにも、本人の意思が尊重されるべきと思うし、昨秋のライシャワー元駐日大使の尊厳死の報道からもそれは明瞭だ。

私は神奈川県厚木にある「よりよい生と死を考える市民の会」にも参加している。玉地任子^{タキ}医師を中心とし、遺族、患者人、その家族、心身ともに健やかに生き、安らかな終末を願う市民百余名が、厚木にホスピスを、の目的に向かって努力している。Weの誌面からも、他団体のこのような活動を知り心強い。患者側も大いに賢くなるよう努めよう。

「健やかに生きる」ために欠かせぬ教育、それは各々の年齢に合わせた「死の準備教育」である。命に限りがあることを知ることによって、全てのものの命の尊さ、他者への思いやりも育ち、それが日々を充実させる源となるから。「死」を識れば識るほど「生」は輝きを増すことは間違いない。

日本でもこの基盤となる「心」の教育が重視されることを願っている。

(日本尊厳死協会理事)

発言

在宅ケアの今とこれから

季羽倭文子

鈴木京子さんが亡くなって二ヵ月たった。四十歳の若い人生を閉じたのは、もうすぐ桜が咲く頃だった。今は若葉も濃い緑に変わってしまった。家族だけに見守られ、主婦としての多くの時間を過ごしてきたダイニング・ルームのすぐ横の部屋で短い人生を閉じた。

病名や、残された命が短いことを知り、家族に迷惑をかけたくないからホスピスで最期を迎えたいと京子さんは望んでいた。大学受験勉強中の長男と、中学一年の思春期の長女、それに夜遅くまで仕事に追われている夫との家庭で、家族の看病を受けながら過ごすことなど考えられなかった。またそうして家族に負担をかけたくなかった。しかし、その望めないうちで死んでしまったことが実現した。

がん終末期の患者が在宅生活を継続することは、日本の現状ではかなり困難である。それには色々な原因があり、そのための対策が求められる。

●入院しないと、十分に手を尽くせないから、命を縮めることになるのではないかという思いを変える

健康保険の発達により、入院治療が容易になり、薬剤や手術、その他の濃厚な治療が、経済的負担も少なく行われるようになった。したがって、自宅で自然な生き方をし、点滴や経管栄養を受けないで過ごすことは、何か十分な医療の手を尽くさないまま命を縮めてしまうような罪悪感を、家族に感じさせるようになっていく。

京子さんの場合は、点滴などの医療を拒否するという強い意志が本人にあったが、嘔気や嘔吐は時々あったものの、実際にはほとんど最後まで、ずっと口から食事をとることができた。もし入院して点滴をしていけば、必ずもっと長生きしていたという訳ではない。現段階で科学的に証明できないの

で説得力に欠けるが、訪問看護の体験を通してそれを実感している。罪悪感を感じるのは家族の方であるから、京子さんのように本人自身の意志がはっきりしていれば、家族はその気持ちに添いたいと思うので、在宅を続けやすい。一般の人々の気持ちの中にある入院信仰を変えるには、医療関係者の努力が必要であると思われる。

● 往診が行われる在宅医療と訪問看護体制の充実

がん終末期には、各種の苦痛な症状が現れやすい。それも予測外の症状が現れたり、症状が変動し、適切な対応が行われないと、家族はその苦しみを見るに耐えなくなってしまう。そのためには、適宜対応できる往診と、訪問看護が必要である。特に、発生頻度が多い疼痛に対しては、モルヒネなどの麻薬を安全に、また有効に使用する必要がある。それが可能な在宅医療と、その知識のある訪問看護が関わらなければならない。

京子さんの場合も、全身衰弱が進み、骨転移が進行したとき、本人の意志がどんなに強くても歩行は不可能になった。排泄のためにベッドに密着させた木製の椅子型腰掛便器に、家族の手を借りて、かろうじて身体をずらせて腰掛けるという状態になった。清拭、更衣、洗髪、シーツ交換と、日常的なことも、京子さんを疲労させないで手早く行うために、訪

問看護の関わりが必要だった。体制の不備と情報の不足により、そのような援助を受けられるのは、現状ではごく限られた人々だけである。

● 若い人にも、各種の在宅福祉の適応が必要

がん患者には、年齢が若い人が多い。体力がなくなった時に、布団よりベッドの方が楽になる。また共働きや小さい子供を抱えての生活で、看病の負担が多くなった時、家事援助のための公的ホームヘルパーが活用できたら、どんなに助かるであろう。若いがん末期患者の在宅生活には、在宅福祉の援助が乏しいため、非常に多額の出費がかさむことになる。

● おわりに

五月二十六日の各社新聞のトップ記事は、厚生省のがん告知に関する調査についてだった。告知を希望する人が増えているという報告と共に、自宅で最期を送ることができるような体制整備を求める人が、七〇%にも及んでいたと報じていた。統計的には、がん患者の在宅での死亡は、脳卒中や新疾患の五分の一に過ぎない。人々の願いがかなうよう、皆で力を合わせていきたい。

(ホスピスケア研究会)

発言

「生と死を考える会」に関わって

大関ミヨ子

●忘れられない出来ごと

「お父さん、お父さんの大好きな彼女が来ましたよ。」

付添っていらした奥さまが、眉間に立てじわを寄せて、終日臥床している夫にむかって、つとめて明るい声で呼びかけました。その患者さんは、胃がんの転移のため、全身が衰弱し、痛みの中で日々を過ごしておられました。残された日も、そう長くはないと思える状態でした。

二十年も前のある県立のガンセンターの病室でのこと。そして、私は、看護婦として仕事についたばかりの時でした。精一杯の明るさで、患者である夫の気持ちを引きだしたせよとする妻の声に、まぶたをあげ、かすかにほえまれました。しかし、私は笑顔どころか、一言も発することができませんでした。気まずい沈黙のまま、体温計を渡すとその場を去ってしまったのです。その後どうなったか、どう関わることはできたか、今は全く覚えていません。この一コマだけが、鮮

明によみがえり、あの時の妻の声が私の耳に響きます。

約二十年前、看護学校を卒業し、がん患者の看護をこころざした私でしたが、自分自身の生や死を考える暇もなく、不慣れた仕事に、精一杯の毎日でした。「なぜあの時、笑顔を向けることができなかったのか」。あの病室での一コマが浮ぶたびに、心にトゲがささっているように、胸が痛みます。

患者さんの手記や、死刑囚の手記などを読み始めました。

人間として、自分自身の死や生を考えなければ、自分自身が逃げてばかりいては、死に直面している人に、真向うことはできない。慣れでもなく、にぶくなるのでもなく、逃げずにいることができて初めて、本当に死と直面している人と真向うことができるのだと思います。さまざまな思いに胸が一杯になりながらも、静かにそこにいることができるようになるまでには、長い長い時間を要しました。

もう十年前になりますが、父の死もまた、私にとって、人

生観が変わるほど、さまざまな気づきを与えてくれました。沢山の人の死に立ちあつて来たにもかかわらず、本当に人は死ぬのだということを実感した出来ごとでした。

人はその生涯において、体験できることなど、実にわずかです。想像力でカバーすることで、多くの人々と共感していくことができる訳ですが、想像力を働かせるにしても、自身自身の枠をこえることはできません。通ってみて、初めて見えてくるものが沢山あります。とすれば、通ってきた人から学ぶことが大切なのではないかと考えました。

●「生と死を考える会」との出会い

体験者との語り合いの記事を、新聞で見たことが私と「会」との出会いでした。

上智大学のアルフォンス・デーケン先生の提唱により、'83年に、「生と死を考えるセミナー」が開催されました。セミナー終了後、一方的に聞くだけではなく、話しあう場が欲しいという、参加者の希望によって「生と死を考える会」が誕生しました。毎月第二月曜日(二月八月を除く)午後六時半、上智大学の図書館や、教室をお借りして、定例会が開かれています。最初のうちは、グループに分かれて話し合いをしておりましたが、さまざまなニーズによって、テーマ毎にグループができ、話し合いや講演などが行なわれています。

●「会」との関わりを通して

自然発生的に誕生した「会」が、会員数九百人ほどの「会」になってゆく過程に、運営委員として関わって、大変なこともありました。沢山のことを学ばせていただきました。

職場では、白衣の私とパジャマの患者さん、しかしここでは、一人の人間として、一切の利害関係や役割をぬきにして、私服と私服との関係、今まで聞えなかったこと、見えなかったことがいかに多かったか、痛感しました。良かれと思っていたことが、相手によって必ずしも、良くはないということ、ほとんどの方は、じっと我慢していらっしやるということ。「回診の時、どうして家族は廊下に出されてしまうのですか」「なぜ亡くなった時、そっとまるで悪いことでもしたように、うしろめたい気持ちにさせられて、裏口から出てゆかなければならないのですか」「地獄の底をはいずりまわるとはこういうことなのでしょうね」。

どの言葉も、病院では聞くことのなかった言葉でした。これらの言葉が、病院の中でも交わせること、そして、交わす必要が少しでもなくなることが、「会」で学ばせていただいたことを活かすことになると思います。「生と死を考える会」が沢山の方々とのお会ひの場であり、心おきなく話せる場でもありますように、関わり続けてゆきたいと思っております。

ターミナルケア教育の試み

庄 司 進 一

(信州大学医学部)

ターミナルケアは死に臨んだ患者をケアすることである。死に臨んだ人間をケアするには、肉体的苦痛を軽減することはもちろん重要であるが、それ以上に精神的支援が大切である。この精神的支援を行う人間には、自分も必ず死を迎えるという自覚が必須である。二十歳代前半の青年が主体である医学生にこの自覚を持たせることは至難の技と言わねばならないと思っていた。

神経難病の一つに筋萎縮性側索硬化症という病気がある。この病気は身体の一部の筋が痩せて力が出ないことにある日気づく。次第に全身にこの痩せと脱力が広がり、多くは二、三年で呼吸筋が動かないために死亡する病である。現在は病

気の進行を止めたり遅らせるのに有効な治療法が開発されていない。この病気を神経学の授業で取り上げる際に、ターミナルケアの重要さの気づきと、自分を含め人間は全て死ぬこととの自覚を目指した教育を試みている。

医学部五年生に対して、問題解決型学習・態度教育を目指したシミュレーションを加えたロールプレイ型臨床授業——〇分の実際を報告する。

順番で決まっている学生四人が講堂の正面にマイクを持ち、教官と対面し座る。

「皆さんはある市中の総合病院の内科病棟の医師です。入院患者さんは五十一歳の女性です。この病院の内科外来に一年

三か月前から通院していて、両手の筋萎縮と筋力低下があり、次第に上肢全体・下肢に筋萎縮・筋力低下が広がり、上肢・下肢の筋肉のあちこちがピクピク動くことに気が付いている。最近呼吸が苦しくなってきたということで急拠入院になりました。では始めて下さい」と状況の説明をして問診を促す。学生らが一人の受持ち医師を、教官が患者・その家族・他の医療従事者の役を演ずる。

「いつごろから症状が始まりましたか」

（患者は息が苦しくご主人が代わりに答えています）「一年半ほど前から右手で箸を持つのが大変になりました。二か月ほど経つと左手も力が無くなってきました」

「足のほうは」

「半年ほど前から車椅子になりました」

「患者の様子はどんなですか」

横になっていて呼吸が浅く速く、小鼻なども動く努力呼吸をしているシミュレーション患者を演じる。

更に主訴・現病歴・既往歴・家族歴を聴取して問診所見をまとめ、学生が黒板に書く。診療・検査と進めて、医師役の学生が診断を考える。診断は外来の主治医と同じであると告げる。

夜の病室で患者と医師との一对一の会話が始まる。

「呼吸が苦しいので、人工呼吸器を付けようと思いますが」
「私には、人工呼吸器は付けられないでほしい。身動きが出来ないで呼吸器をつけてただ生きているのはいやなんです。友の会の人たちの話を聞くと、呼吸困難がくるとそんなにもたないということですが」

「――」

「先生、死ぬときには苦しむのでしょうか」

「――、人工呼吸器を付けば苦しまないで――」

「呼吸器はいやです。家族にも経済的負担がかかりますし」

「生きる望みがあるかぎり――」

「どんな望みがあるんですか。私に」

「話もできませんし、眼も動きませんし――そういう意味では今死ぬのを勧めできないですね」（講堂が笑いに包まれる）

「でも眼が動くといっても、呼吸が苦しいので、このまま死ぬのではないんですか」

「貴方は今何を一番したいですか」

「この苦しさをとって欲しいし、――死んだあとはどうなるのですか」

「――」

「先生も経験してないから分からないかもしれないけれど、

死ぬ時は特に苦しいんですか」

「——死ぬことなど考えないで、もう一度元気になることを考えたら——」

「でも先生、私が死ぬのは確実なんではないですか」

「確実ではないです」

「死ぬ前に私、ひとり会ってみたい息子がいるんですけど」

「死ぬわけではないけれど、よろしいです」

「結婚を反対してからずっと会っていないんです」

「なんとか捜して呼んで来ます」

「ありがとうございます」

この難病についての解説をして、ターミナルケアについて話す。

この患者さんに人工呼吸器をつけるかどうかについては、問題がある。患者さんの希望で呼吸器はつけない。

この患者さんは、死ぬ時には今ある症状に何かが加わるのかどうかと、死んだ後どうなるのかということを知りたがっていましたね。さらに死ぬまでにやりたいことを言っていましたね。主治医がしなければいけないことは、この人に幸せな死を迎えさせてあげることです。今からこの人の死ぬまでの時間は限られています。死ぬという瞬間には特別に苦痛があるわけでないことを、専門家として伝えなければいけない。

ターミナルは死んでいく人が主人公なんですから、医療関係者が全力をあげてこの人がしたいことを実現させるようにすることはもちろんです。時間が限られているので、すぐにも、御主人や御本人にその会いたい人を捜す手掛りを聞いて、捜し始めなければいけません。患者さんが死について聞いてきた時、そんなことはない、元気になることを考えてなど、否定や励ましをしましたね、これは会話を阻止してしまいます。信ずることのできないことを言った人との会話は続かない。今日は特別に会話を続けたのですが、普通は「そんなことはない」と言った瞬間から会話が途絶してしまったと思います。

患者さんは、人生の夕暮れに一人夜を迎えるという心境なんです。経験のないことを一人ですという非常な不安、愛していた人や生活に別れなければいけない寂しさ、死んだ後というふうになるのか未知のことへの不安、自分の人生の意義は何だったのかさういったことを話したかったですね。それに対して何も答えていなかったのは、主治医として片手落ちです。臨床家は科学者であり、人生の先生であり、死や死後の世界に関しての宗教家でもなければならぬ。

ターミナルケアの重要性とその特徴を説明し、最後に自分も死ぬということを自覚することの重要性を述べた。

「皆さんに手紙を書いてもらいます」と切り出す。貴方はちよつとした症状があつて、診察を受けた結果、生検が必要だと言うので、検査を受け、悪性の病気で、しかもいろんな所へ転移していることも分かった。病気の性格や広がり、貴方の年齢などから考えて、慎重な複数の信頼できる医師による検討の結果、貴方は三か月前後の命であると告知をされました。今から十分間考えて、十分後に紙を配ります。これに無記名で自分の一番親しい人、家族でも友人でもどんな人でもいいですが、自分がどの様に残された三か月を過ごしたいかを十五分位で手紙で書いてください。現在は普通に動ける状態、最後は恐らく入院しなければならない状態となるでしょう。との説明で手紙を書いてもらった。

患者の自己決定権、インフォームド・コンセント、リビング・ウィル、尊厳死、医療従事者の死生観、グリーフ・ケア、死の準備教育について今日の患者の具体例から話を始め、解説して授業を終わった。

毎回しているが、学生の質問・感想を記名で書いてもらい授業後に集めた。質問は筋萎縮性側索硬化症の根本的治療法開発の見通し、人工呼吸器の購入・借入について、「何もしないで」と患者が言えれば何もしないでよいのか、患者の意向とは別に医師の意志で治療は行わないのか、家族と患者で意見が分れた場合はどちらに従うのか、患者の自己決定権が法

的に問題になることはないか、尊厳死を認めることは安楽死への道を開くことにならないか、「死にたくない」と叫びつづけている場合どう対応するか、「自分は死ぬんですか」と聞かれたらどう答えたいか、ターミナルケアに関して医師がとるべき対応にコンセンサスはできているのか、死の告知は自殺の原因にならないか、宗教のない人にどう死や死後の世界を説明したらよいか、脳死の患者を人工呼吸器で長く治療するのはグリーフケアですか、などであった。質問とそれに対する私の返事を紙に書いて、授業の日に講堂の揭示板に掲示した。これは次の週の私の授業まで掲示している。

学生の書いた手紙の宛先は両親(22%)、恋人(20%)、両親以外の家族・親族(17%)、友人(13%)などの順で、主治医・医学部長・誰にも知らせないなどもあった。

残された時間の過ごし方は、旅に出たい(30%)、今まで通りに(26%)、趣味に使う(20%)、親と過ごす(11%)、話をしたい(9%)などの順で、神の理解を深める、恋をする、治療に専念するなどがあった。

医学部長宛ての手紙は次のようなものであった。

「医学における最前線の教育を受けながら、早期発見の機会をのがし、治療不能の疾患で死ぬことを残念に思う。今更ながら今日まで医学というものについての不勉強振りを恥じ、

惜赦の念で一杯です。病氣についての勉強もさることながら、死と直面した患者の心理、それに対する医師の在り方というものについて深く考えることなく、ただ漫然と生活していたことが悔まれてなりません。しかし、今こうして自ら死に直面することによって、その混乱を体験し、失意・絶望を体験することで、医師というものがいかに重大、かつ神聖な責務を担っているかを知りました。が、しかし遅すぎました。――」

この手紙には授業での素直な感想が述べられていて、ターミナルケアの重要さに気づいている。

他の学生の一人は次のように書いている。

「後三か月しか生きられません。当分は途方に暮れ、ただ忍び寄る死の恐怖に怯え何もする気力も湧かないでしょう。

しかし、生きる者全ていつかは死ぬことに当然気づいていたはず。ただそれは遠い遠い未来の話、十萬光年の銀河の旅をするのと少しも変わらないような話のように思っていました。今日から一日は今までの一年。死を自覚し初めて生の意味がわかるような気がします。生の意味がわかりはじめて人に対する思いやり、感謝の気持ちに真に理解できるのでしょう。人の運命は変えられません。その運命を自分自身で認めるか認めないかで、これからの三か月の人生の意義が決まるように思える。――」

この手紙は、若者がいかに死を遠い存在として考えていたか、死を考えることが生をより良く知ることになることが現されている。

授業の感想に、

「知識ばかりを追っていた自分が見直された。一人の人として立派にならなくて思った。自分はまだ未熟です」

「こんな手紙を書かせるなんて、なんか悲劇の主人公にでもなったようで悲しくなりました。逆にこういう立場の人たちに会おうことを考えるとつらいものがある」

などと、自身の医学に対する態度への反省や、医療者になることへの重大さの自覚が読みとれるものが多かった。

この授業の後に行われた学生コンパの席やカンティンで、多くの学生から生の声を聴いた。別れの手紙を泣きながら書いたと言った学生が数人いた。一週間は思い出してはひとり泣いていたと言った一家の主人がいた。ちょうど失恋したところだったが、授業を契機に立ち直れたと言った男子学生がいた。臨床家になることの難しさとその素晴らしさに気づいたと言う学生が数人いた。改めて医学を勉強する強い動機になったという学生がいた。先端技術の医療の華々しさが目立つ現在、かえって医療の心を若い医学生が多くが強く求めている。一一〇分の授業で、医学生にターミナルケアの重要性を認識するに十分なインパクトを与え得ると考えられる。

看護学生と共に

生と死を考える

平田 文子

(三育学院短期大学)

長い間、死はタブーとされてきた。今日でさえも一般に日本においては、「死」とか、不治を意味する「癌」という言葉は避ける傾向があるのを否むことができない。生きとし生ける全てのものは早晚死を迎える。この現実を前に終末期患者を看とる看護学生たちが、いたずらに死を恐れることなく、生命の限界を自然の摂理として受けとめ、死と向かい合っている人を温く見守ることができるようにと願っている。

看護学生の大半は十八〜二十歳の青春の真ただ中にある。彼らの日常の関心事と言えば、友情や異性への思いであり、自己実現への夢など、未来への希望であろう。彼らにとって死はほとんど無縁のことのように思える。しかし看護の道を志す学生にとっては、否応なしに病いと闘っている人や、自

ら死と向かい合っている人との出会いが待ちかまえている。それは臨床における実習という授業である。彼らの感性を豊かに育むよい機会でもある。聖書の言葉に「死ぬる日は、生きる日にまさる。悲しみの家にはいるのは宴会の家にはいるのにまさる」とある。人間の感性(内面)は宴会の席よりは、むしろ死にふれることにより、もっと豊かに養われるからである。今回、学生たちがどのような学習を経て臨床での学びに入るのかを簡単に紹介し、死と向かい合っている患者との関りを通して、学生と共に生と死について学び合っている中から述べてみたいと思う。

入学後「看護学概論」という授業がある。このクラスは看護の基礎となる概念を構築することをねらいとしている。学

生たちはこのクラスで看護とは何かを考えるにあたり、看護の対象である人間について、色々な角度から考えることになる。学生たちは、人間が生物体として単に生理的な営みのみで存在しているのではなく、生活体として心理・社会的側面をもった個としての存在であること、また各々の発達段階において、いろいろな健康上の課題をもつものであり、社会の中で社会化されていく存在であることなどについて学んでいく。続いて健康についての広い概念を考えることにより、看護の役割の広がりや深さを学んでいく。同時に解剖や生理学、病理学など人体について、また病いによる変化などについて学ぶ。

そして一年の後半には、人間が病むとはどういうことなのか、老いとはどういうことなのか、そして死とは何かについて学んでいく。二年時では、人間の誕生から始まり小児の成長発達を経て成人、老人に至る各期毎に、健康の保持、増進、病いの予防、さらに平和な死への援助について学習する。その後二年も終わりに近い頃、真新しいキャップをつけて、病棟での実習が開始されるのである。

本校の主たる実習病院は東京都杉並区にあるセブンスデー・アドベニスト教団の経営する東京衛生病院である。約三千坪余りの敷地内には、今年も桜の老樹が枝一杯に花を咲かせ、病床の患者さん方や外来に通う人々の心を潤してくれ

た。思えばどれほど多くの人々が、この中庭の緑に安らぎを覚え、四季の花々をめぐる心と呼び覚まされ、生きている喜びをかみしめられたことであろう。

数年前より膀胱軟部肉腫という悪性の病いに倒れた四十三歳のAさんは、最後に看とられる場所を求めて、この病院に昨年、救急車で転院して来られた。八歳の一人娘を残して退院の希望のもない病床生活は、頭、腰、肺、左大腿骨などへの転移による痛みに加えて、Aさんの心を暗く固く閉ざしていた。Aさんを受け持ち看護することになった三年生のKは、余りにも悲惨なAさんの苦悩に心をいため、こぼれおちる涙を押えることができず、ナースステーションで暫く茫然と立ちつくしてしまった。学生たちは、看護学校へ入学しなければこの年代では体験できそうもない人の病いや死と対面していくのである。私自身もAさんの余りの生の厳しさに、心が重かった。Aさんは他院ですでに病名を告知されていたのである。Aさんが、残された生の日々を、妻として母として立派に生き抜くことができるように、心身両面にわたって支援する必要がある。そこで私はKの感情を受けとめながら、Kと共に身体的苦痛の緩和に努めると同時に、宗教を越えた祈りをもって支えることを確認し合った。

Kの実習記録に、「初めはどうしていいか分からず、Aさんの胸中を思い涙していた私も、最近ではAさんとお話ができ

るようになった」と書いてきた。そしてAさんの心の変化を次のように記している。「初めの頃より、Aさんは娘や夫のことが話題になっても涙を流さなくなったこと、表情がさわやかになってきたことに気づく。ある一つの時期の中に山が幾つかあって、今は一つ峠を越して安定されているように思える」。「来週はできたら、車椅子で中庭へ散歩にお連れしたい。……今のこの時期、Aさんにとって一日一日が貴重で、色々なことを思いめぐらしていることと思う。一人で考えて悩んだ時に、Aさんがふっと話してくれるような聞きやすい雰囲気をつくりたいと思う。その時に受けとめることのできる広い心と強さを求めていきたい」。それからKはAさんにより添いながら、その苦悩を包容するほどの強さをもち、Aさんの支えとなっていた。

終末期患者を看護する学生の多くは、不安、恐怖、戸惑い、逃避的傾向を示すと報告されている。学生たちは患者さんの激しい苦痛を目のあたりにすると、自己の無力さを痛感し、ベッドサイドへ向う足が遠のくことがある。このような時、指導に当たる者は、学生の気持を十分に受けとめた上で、学生がどういうことで動揺したり、重荷を負ったり、自己嫌悪に陥っているかを明らかにし、患者さんが今何を望んでいるのか、どういう状態なのかを共に考えた上で、心身両面からの援助を促すことが必要である。すると学生は、自分

が無価値に思っていた事柄に、看護としての大きな視点を得ることができ、患者さんの傍に居続けることができるようになっていく。Kのように、何とかお役に立ちたいと願う気持が強ければ強いほど、指導者の助言は、初めの僅かで終末期患者の援助が見えてくる。

Aさんの癒しと支えを願う気持は祈りとなり、月日の経過の中で、Aさんの病状は徐々に安定し、左大腿部骨折の奇蹟的な回復をみることでできた。再起不能と思われていた状態から四カ月後には松葉杖で歩行が可能となったのである。Aさんの生活空間が拡大し、公衆電話のところまで一人で出かけ、家族との交わりが得られるようになった。癌性の痛みは絶えることがないが、Aさんは痛みとの闘いのなかで、手先の器用さを活かし、美しいフランス刺しゅうの額や、小物を作りつつづけている。Aさんのいつも変わらぬ静かな笑顔には、母としての強さと、信仰による力を感じさせられる。

本校では看護実習の意義を次のように掲げている。「看護の対象と直接かわるることにより、人間の根源的価値、生命および苦難の意味を追求し、不安の中にも平安と生きる力を願望する人々の支持者となることの意義を発見する」。重症患者を預る第一内科病棟における看護実習は四週間継続される(今年からは三週)。その半ば頃、学生グループメンバー六名と共に、「終末期患者の生を支える」というテーマで、カ

ンファレンスを行う。学生の一人が教師の指導のもとに、予め出しておいた課題に沿って、一時間半にわたって司会を努める。ここでは学生たちが死をどのように受けとめているか、また一般では死をどのように受けとめているのかを語り合うことから始めることが多い。彼らは正直に、「どんな人でも必ず死ぬ存在であるが、私自身の死の意識は100%ない」という。「死と向かい合っている人は、不安と恐れと孤独である」。それは何故だろうか、ルターは「死はこの世とこの世のすべての営みからの別れである」と語った。まさに死は生の中止であり、生の完結感としての死としては捉えにくい。死が、別れ即ち、関係の喪失であるが故に、不安と恐れと孤独に陥るのではないだろうか。したがって死に行く人々は不安を聞いてくれる交わりを、恐れを理解しようと努めてくれる交わりを、孤独の中にもその日の命の中で、希望を見出すことのできるアプローチを求めている。

今日までの医療は、疾病中心であり、病気の治癒のみを目ざし、延命効果を図るのを第一としてきた。そこでは医療の中の死は敗北感を残し、治癒の望みがなく日毎に衰弱していく患者さんに接するのは重荷となってしまう。そしてその苦悩の重さ故に逃げ出したくなるのである。終末期の患者さんは、死を迎えるまでの日々において、人生の総決算をする。すなわち、過ぎし年月の歩みを振りかえり、残された日

々に思いを馳せ、死後のことを思いめぐらすのである。この大切な終末期におけるナースに寄せる役割の大きさと、その価値はQOL（クオリティ・オブ・ライフ）を左右するものである。交わりが深ければ深いほど、最後の別れは辛いものである。しかし死を否定せず、命あるものは必ず死すことを自然の摂理として受けとめることが大切である。その上で、自分の死生観をもつことは、有限な存在である自分自身のためにも、また看とりの看護をする者にとっても必要である。

秋風が心地よく感じられる頃、Nさん（八十三歳）は闘病の身となり実習病院へ転院してきた。十六歳で母親を亡くし、八人兄弟の長女として母親役を務め、四十代で夫と長男と死別した自立心の強いNさんは、脳塞栓を患い、心不全、腎不全も合併し、その上入院中に発見された膀胱癌で苦しい日々を送っていた。Nさんを受け持ち看護することになった学生Hは、不安な気持を抑えながらも、Nさんにはほえみかけながら挨拶をした。終末期にあるNさんはすでに酸素吸入をしていて、かすかにうなずくのみであった。それまでNさんは看護婦に対して不満をぶつけるなど、攻撃的な態度で落ち着きがなかったという。

Nさんが労苦の多い人生であったが、穏やかで常に感謝することを忘れないカトリック信者であることを、家族や見舞

に訪れる知人から知ることができた。そこで頻回に訪室し、笑顔で接近し、共感的態度で交り続けることをHと共に確認した。Hはベッドサイドを離れようとしなかった。Hには擬視するNさんの目がやさしく映った。その時以来Hには訪室の不安は消えたと言う。食事の好みを知り、一口でもと工夫して勧めるHの努力は、やがて報われ、攻撃的な反応は一度もなく、「ありがとう」と感謝の言葉が返ってくるようになった。

死期が近いことを感じるとき、人はどのような反応を示すか。実習中のカンファレンスで、Hは他のグループメンバーと共に学び合った。キュープラ・ロスは、事実の否認、怒り、取り引き、抑うつ、受容の反応がみられると述べている。怒りは対象への個人的な怒りではないことが多い。Nさんが気丈夫に生きて来た人だけに、自らの死を受け入れることが困難だったのだろうか。周囲の者への攻撃的なNさんの言動は、死への拒絶反応として、怒りの発散として受けとめるとしたら、どのように対応したらよいのか語り合った。しばしば怒りは甘えられる立場にある家族や学生、看護婦に向けられる。病状の悪化に伴い拘束される身は、怒りをつのらせるものである。そこでHはNさんが自分の気持を素直に表出できるよう訪室を多くし、常に受容的態度で接することにした。その後、看護婦に対してもNさんの怒りの反応はみられなくなった。静かな死の受容のときを迎えることができた。

HはNさんの信仰を支えたいと、ロザリオを手に持たせ、両手でNさんの片手をとって祈った。するとNさんはもう一方の手を上にしっかりと重ね、祈りに参加された。またNさんは廊下で歌う学生の賛美歌に対し、目を細めて「きれいな賛美歌が聞えていました。ありがとう」と感謝された。病状が悪化し、一日中発語がなく傾眠状態であった日、再びNさんは「いい歌を頂戴しました。ありがとう」と言われた。

人は生きてきたようにしか死ねないと言われている。Hの実習記録に、「一瞬一瞬の生を支えることが、その人自身の死を迎える準備となるのだと思う。Nさんの生きてきた人生は神様が中心であった。病床においてNさんの信仰を支えること、それがNさんの生を全うすることになるのではないか」と書かれている。

私たちは死と向かい合っている人との出会いを通して、何と多くのことを学ばせていただいていることだろう。終末期にある人は、あたかも永遠に生存するかのように思える私たちに、生命の重みと死の意味を考えさせてくれる。そして看とりの看護の何たるかを、命をかけて、無言のうちに教えて下さっているのである。何十年もかかって到達するであろう生と死の意味について、看護学生の多くはその若さで、一回限りの生をいとおしむ気持で、看とりの大切さを体験的に学び、自らの生をみつめ直している。

新しい・家庭科を・創るために

義父の死から考える

磯部 幸江

(大宮市立大砂土中学校)

今年二月、義父は、最愛の妻や実の娘が見守る中、静かに息を引き取った。入院生活は四十日余り、日々病状が悪化し、痛みと闘う義父の姿とそれを励まし共に闘う義母や夫、死と直面する者と過ぐす緊張した日々の中で、私は、人生観も変わるぐらい様なことを感じた。六人家族が五人になり、毎日の生活が今までと違ったりリズムで動いていく。そんな中で、今月号のテーマ「生と死を授業で」に取り組んだのだが、いまだに、中学生にはどのようなことを取り上げたらよいのか、明確な提案ができていない。

断片的には、家庭生活の中で、家族の歴史を取り上げ、生命の誕生と家族の死を扱うとか、保育の中で、保育の問題と

老人問題を取り上げ、死の問題にふれようかと思うだけである。新年度のスタートでもあり、今回はまず、自分のことのでありのままに生徒たちに投げかけることから始めてみようと思った。

○ 死を語る

三年五組三十七人。四月、進級して、いよいよ義務教育最後の年、進路を決める年だと緊張した顔がそろそろ。担任として、みんな仲良く来年の三月には笑って卒業しようと語りかける。クラス換えがあり、気の合う仲間はいるか、担任はどんな先生かとお互いの様子を見合う生徒たち。これから彼ら

とできるだけよい関係を作って、いろいろなことを学んでいくように、私も初心に返る時である。

彼らとの最初の家庭科の授業の日。前線の通過で窓の外を強いうねりで風が吹き抜けていく。病気による死亡率の表を提示して問いかけた。

「今、どんな病気で死ぬ人が多いのだろうか」「がん」とか「心臓病」とかボソボソと声が返る。

「そう、悪性新生物、つまりがんで死亡する人が一番多い。年間三十万人以上が亡くなり、大人の四人に一人ががんによって死ぬのだそう。突然こんな表を見せて変に思ったかもしれないが、家庭科の学習をするにあたって、みんなにまずこのテーマを考えてほしかったから……」。

黒板に「生と死」と書く。「みんなは、今まで一人で生きてきたのではなく、家族の中で生活しているね。その家族というものは、たえず動きがあつて、例えば、親たちが結婚してあなた方が生まれて、そしていつかは独立して家から出ていくというように。生命の誕生があれば、齢をとってやがては死ぬという現実もあるね。実はこんな話をしようと思うのは、私は最近、一緒に暮らしていた父の死に出合つて、家族のあり方とか、人間の死についていろいろ考えたからです」。このような前置きで、私は義父の話を始めた。教科書のグラビアなどをながめ、氣の入ってなかった生徒も私の方に顔

を向けてくる。

二月に父はがんで亡くなったこと。入院中、家族はどのように着病したか。生徒たちと同年代の私の娘は、どのようにしていたか。そして葬式の話。それらを通して私の感じたこと。「病気になる、日に日に衰えていくのね。食べることもできなくてやせてしまふし、歩くこともできなくて、私は、家族の死に出合つたのは初めてだったので、とてもつらかったです。生まれるのも一人だけど、死ぬのも一人。孤独だけど、いつも側には家族がいる。妻も子どもも孫も、みんなが側にいるんだと励ましてあげました。父は痛みと闘いながらも安らかな死でした」。

葬式などあわただしく過ぎてしまったけど、もう父がいなかったと思うと、人間の生はなんてあつけないのだろうかと感じている。だったら、生きていううちにやっておきたいことがたくさんあるなと思う。それから、私たちは、家族の中で生活していきながら、いろいろな出会いと別れを繰り返していくのだと思いました」。

しんと静まる教室。いつもは声をはり上げる私も、生徒たちのじつと見つめる表情やうつむいてしまっている姿に、しみじみと、しかし思うことの半分しか話すことができなかった。

「なんか、暗い話をしてしまったね。ここでみんなに意見を

述べてもらいたいけど、むずかしいテーマだから、まず、ノートに次のような点でまとめてみよう。

一、私と家族。いっしょにいてよかったこと。いやだと思ったこと。

二、生と死。子どもの誕生や家族の死について思うこと。

「これからの保育の学習では、人間の成長の様子や、みんなの将来の生き方を考えていくのだけど、今日の話の家族や生と死のテーマは、いつも根底においてほしい」と、最初の授業を結ぶ。

○生徒のノート「生と死を考える」から

「私は、身の周りの人は、ひいおじいちゃんといひおばあちゃん死んでしまったくらいで、あとはありません。でも、人間ではないけれど猫・犬の死ぬ瞬間を見ました。特に、猫は病気でずっとそばにいて、私が世話をし、私が埋めました。その猫は最後の最後まで私を見て、ミャーミャーないていて、もっと生きたいと思っていたと思います。生きたいという気持ちは動物でも人間でも同じだと思います。でも、いつかは死んでしまうのだから、その死ぬす前まで周りの人がどうするかで、その人が最後に生きていて良かったと思うかどうか決まると思います」。(女子)

「ほくも、十一月頃、おばあちゃんが亡くなった。先生の行

動がお母さんによく似ていた。おばあちゃんがなくなって少し暗くなった。家族がへると食事の時など、ぜんぜん話もへるし、暗くなり楽しくない。しかし、人間だれでも死んでしまうのでしかたがないと思う」。(男子)

「親戚で赤ちゃんが生まれた時はすごくうれしい。そのお母さんにお産の時の話を聞くのもまたおもしろい。今生きている自分に『死』というものが来るのが信じられない、こんなに元気なのにいつか死んでしまうのだと考えると少しさびしくなる。また、いつも一緒にいる父母弟にも友達にも先生にも『死』がやって来てしまうのだと思うと、人間は何のため

に生きているのか不思議になってくる」。(女子)

「私はまだ身内で亡くなった方はいないのでよくわかりませんが、でもテレビを見ているだけで、涙がでてくる時があるの

で、実際もっと悲しいのだと思います」。(女子)

「家族が死んだってそんなに悲しまないと思う。わけは、生きている時は生きている。死ぬ時は死ぬ。これが人間の人生。さだめというものだから」。(男子)

これらの話は、担任をしたクラスにしかしていない。自分の話をして教材としてまとめていくには時間が必要だと思

「婦人問題企画推進有識者会議意見

―変革と行動のための五年―

四月十日、「婦人問題企画推進有識者会議（縫田暉子座長）」は、「西暦二〇〇〇年に向けての新国内行動計画」（'87年策定）の見直しにあたって、今後五年間に取り組むべき重点課題をまとめた意見書を、婦人問題企画推進本部長（海部首相）に提出した。政府はこの意見書を踏まえ、「新国内行動計画」の見直しを行う。

「意見書」がとらえている「わが国の女性の現状と展望」を次に抜粋して紹介する。

I わが国の女性の現状と展望

4 新国内行動計画策定以降の主要施策の進展

(1) 教育の分野においては、平成元年三月、小・中・高等学校の学習指導要領が改訂された。家庭科及び技術・家庭科については、男女が協力して家庭生活を築いていく上で必要な知識、技術を習得する観点から、履修内容、方法を改善し、従来の男女間での異なる取扱いを改めて、男女とも同一の取扱いとした。

文部省では、昭和六十三年七月に社会教育局を拡充、改組して生涯学習局が新設された。平成二年七月には「生涯学習の振興のための施策の推進体制等の整備に関する

法律」が施行され、生涯学習振興のための体制整備が進められている。また、昭和六十二年十月には国立婦人教育会館婦人教育情報センターが開所し、婦人教育情報ネットワーク形成のための体制の整備が進められ、同センターによる全国的な女性に関する情報のオンラインサービスの実現に向け準備が進められている。

(2) 雇用の分野においては、昭和六十三年十一月に雇用管理面での更なる男女平等を確保するため、男女雇用機会均等法施行規則及び女子労働基準規則の一部が改正された。また、パートタイム労働については、平成元年六月に（中略）「パートタイム労働指針」を制定、同指針の定着及びパートタイム労働市場の円滑な需給調整を促進するため「総合的パートタイム労働対策」を定め、労使に対してパートタイム労働者の雇用管理の指導や啓発を行っている。さらに、育児休業制度の確立に向けて、平成三年三月「育児休業等に関する法律案」が国会に提出され、介護休業制度も、その普及が進められている。

昭和六十三年に労働基準法が改正され、週四十時間労働制に向けて法定労働時間を

表1 西暦2000年に向けての総合目標

—男女共同参画型社会システムの形成をめざす—

今後5年間の基本目標及び重点課題

〔基本目標〕

I 男女平等をめぐる意識変革

II 平等を基礎とした男女の共同参画

III 多様な選択を可能にする条件整備

IV 老後生活などをめぐる女性の福祉の充実

V 国際協力と平和への貢献

〔重点課題〕

1. 男女の固定的な役割分担意識の是正
2. 学校教育の充実と社会教育の推進
3. 母性の重要性和性の尊厳についての認識の浸透
4. 政策・方針決定への参画の促進と女性の登用
5. 雇用の分野における男女の均等な機会と待遇との確保
6. 農山漁村婦人対策の推進
7. 地域活動における男女共同参画の実現
8. 男女共同責任型家族の形成
9. 生涯学習の条件整備と生涯にわたる職業能力の開発・向上のための施策の推進
10. 育児期などにおける条件整備の充実
11. 多様な就業形態における条件整備
12. 所得保障の充実
13. 福祉サービスの整備
14. 健康の保持と自立
15. 母子家庭など特別の配慮を必要とする女性の自立と生活の安定
16. 国際化の進展に対応する女性の国際協力力の推進
17. 女性の平和への貢献

(3) 農林水産政策の分野では、農山漁村の女性に短縮することとされ、平成三年四月一日からは週四十四時間とされた。また昭和六十三年労働時間短縮推進計画が策定され、同計画に基づいて労働時間短縮などが推進されている。

性に関する施策を明確に位置付け、女性の能力と役割を積極的・具体的に評価し、その能力の活用を促進を図っていく施策の推進体制を整備した。

(4) 福祉の分野においては、乳がん検診や思春期クリニックが新たに実施されるとともに

に保育サービスの充実が行われ、多様な保育ニーズへの対応が図られた。また、高齢化社会に向けて、平成元年十二月に「高齢者保健福祉推進十か年戦略」(ゴールドプラン)が策定され、(略)関連施策の一層の充実が行われている。

(5) 法制の整備として、男女平等などの見地から、婚姻の効力に関する準拠法を夫の本国法から夫婦の共通本国法にするなどの法例の改正が行われた。

(6) 政策・方針決定の場合の女性の参加の促進については、(略)国の審議会などの委員への女性の就任が徐々にではあるが進んでいる。その割合は、昭和六十二年三月末日現在6・3%から平成二年十一月一日現在8・2%へと上昇した。また、平成元年度から国家公務員の採用試験区分中「郵政事務B」について女子の受験制限が解除された。

(7) 国際分野においても、開発援助において、女性の参加と受益との確保に十分配慮することの重要性に対する政策認識が深まった。その具体的な現れとして海外経済協力基金に「開発と女性」担当者を設置したこと(昭和六十二年度)、経済協力評価のた

めの評価基準項目に「開発と女性」への配慮を追加したこと(平成元年度)、国際協力事業団に「開発と女性」援助研究会が設置され、報告書が出されたこと(平成元、二年度)などの進展が見られた。

(8) このような国の施策の進展は、地方公共団体にも大きく影響を及ぼし、婦人行政の推進体制の整備が図られた。さらに新たな構想に基づく婦人会館・女性センターなどの設置が各地で進められるとともに、婦人問題に関する職員の研修を始め独自の工夫を盛り込んだ施策を試みる例も少なくない。

その上で、西暦二〇〇〇年に向けての総合目標を「男女共同参画型社会システムの形成をめざす」として、今後五年間の基本目標及び重点課題を、前頁表1のように掲げた。

17の重点課題のうち、主なもの、目新しいものを抜粋して紹介しよう。

1: 男女の固定的な役割分担意識の是正

(1)(2)略

(3) 婦人問題に相対的に関心の薄かった層、特に男性や若い世代の女性への働きかけを強力に推進すべきである。この点において、女性団体の自主的活動が特に重要であり、行政と民間との協力、連携を図ることが望まれる。

(4) (略) マスメディアにおいては、その放送基準や倫理綱領などにおいて男女平等の理念を尊重することを一層明らかにすべきである。報道、制作、広告も含めて男女の固定的な役割分担意識を払拭し、女性が蔑視されることなく、その人権が尊重されるように、男女平等の視点に立ったイメージを紹介することを望みたい。

(5) 男女の固定的な役割分担意識を是正するためには、家庭、職場、地域など社会のあらゆる分野での制度や慣習・慣行の見直しを行うことが必要である。加えて、女性が自らの意識を問い直し、家庭、職場、地域などで周囲の男性に対して働きかけること及び男性自らも意識変革の重要性を認識し、理解することが必要である。

(6) 国は、男女の固定的な役割分担意識を是

正し、女性が自らの状況を客観的に把握することに役立つ情報の蓄積と提供に一層努力すべきである。特に、既存統計の項目、用語や枠組みの見直しを行うとともに、従来統計の中で量的に把握されていなかった女性の無償労働や様々な社会活動への貢献を新たに社会的に評価し、正當に位置付けることが望ましい。そのための独自の統計手法の開発や研究を進め、情報の内容が男女平等の推進に役立つように改善されるべきである。

(7) 略

2: 学校教育の充実と社会教育の推進

(1) 人権意識に基づく男女平等観は、幼少時から家庭、学校、地域社会の中で形成されることを認識して、「男の子のくせに、女の子なのに」、「男だから、女だから」というような親などのしつけや教育態度は改められなければならない。

(2) 学校教育全体を通しての平等、相互協力、理解についての指導の充実、教科書や教材に対する配慮、教員研修面での充実、施設や設備の整備などが一層推進されるように、都道府県・指定都市や市区町村の教

育委員会などでの更なる努力が望まれる。

(略)国は教育委員会などに対して一層の情報提供や指導、援助を行うべきである。

(3) 進路指導においては、生徒が主体的に進路を選択する能力を伸ばし、幅広い分野に進むことができるように配慮すべきである。特に、女子の進路選択に当たっては、男子向き、女子向きという固定的な考えにとらわれず、今まで専攻することの少なかつた分野への進出をも含む情報提供に留意するとともに、就業分野を固定的にとらえることのないように配慮すべきである。

(4) 男性も含め、成人期における男女平等の意識変革に役立つ学習機会の拡充と内容の充実を工夫すべきである。

(5) (前略)女性学に関する研究と教育とが、大学などで更に広く行われることが望ましい。そのような動きが継続されるとともに、成果が社会教育などの場におけるプログラム開発などへ幅広く活用されるように努力すべきである。

(6) 男女の固定的な役割分担意識は家庭生活の中で無意識に培われることが多いので、役割分担を助長するしつけや教育を改めるよう、親及び青年男女を対象とする学習機

会の拡充を図るべきである。

3：母性の重要性和性の尊厳についての認識の浸透

(1) (略)

(2) 日常生活圏の中で妊娠から出産までの一貫した医療サービスの提供などを一層押し進めるとともに、妊娠婦の死亡率の低下と健康な子の出産のための医療とそのための調査研究を推進する体制を整備すべきである。長期的には、妊娠、出産に係る疾病などの予防や治療を充実すべきである。さらに、生命科学の分野において新技術の開発が著しいが、その安易な導入によって人間の尊厳を損なわないように注意を怠ってはならない。

(3) 妊娠中、出産後も継続して働く女性が増加している。働く女性の母性保護の徹底を図るとともに、母性健康管理対策を一層推進する必要がある。

(4) 女性のライフステージに応じた指導、相談体制の整備など母子保健対策を一層充実すべきである。特に、妊娠婦や若い母親、思春期の青少年の心の健康を重視し、育児不安や思春期の悩みなどの問題について、

きめ細かな対策を推進する必要がある。

(5) 人間尊重の精神を基本として、幼児期から成人期に至るまで適時男女の性に関する教育や学習の機会を拡充し、性と生命と心の教育を重視する。科学的知識を付与するとともに、適切な行動の選択ができるような情報提供が必要である。

(6) 性の商品化や性的嫌がらせを社会全体として改めるため、性の尊厳に十分配慮するように特にマスメディアの自主的努力を期待したい。女性が被害者となるような性犯罪や売春事犯などに対して、人権尊重の立場に立つ適切な対処と被害者への適切な援助を行うべきである。また、自国と他国とを問わず、女性が売買春の被害者となることのないように売春防止法を厳正に適用し、売買春の防止に努めるべきである。さらに、関連諸法制の見直しも検討すべきである。

(7) エイズの感染予防という観点から、エイズについての正しい知識の普及啓発を行い、女性とエイズ問題の重要性について認識の浸透を図る必要がある。

(8) 略

4：政策・方針決定への参画の促進と女性の登用

(1) 国の審議会などの女性委員の目標値については、新国内行動計画は、西暦二〇〇〇年においては15%を目指し、平成二年度末までに10%の実現を見ることを目指していた。しかし、平年二年十一月一日現在8.2%という状況にある。(中略)今後およそ五年間に達成すべき目標としては、総体として15%を目指すべきである。この目標値さえも国及び関係者の格段の努力なくしては達成できないが、確実に実現することを要望する。

(2) 今後とも女性委員の登用については、(中略)なお一層努力することを切望する。特に、女性委員が皆無の審議会などを解消することを最重点の課題とすべきである。このために、行政側の努力はもろんのこと、労使団体など委員推薦を行う関係団体に対し、女性の適任者の推薦について協力を強く要請したい。さらに、推薦を依頼する団体についても、(中略)女性団体を含め枠を広げる必要がある。また、職務指定あるいは特定の資格要件については、女性委員を登用するという観点から柔軟な対応を

検討すべきである。

(3) 国の特別活動と併行してほとんどの都道府県・指定都市は、それらの審議会などへの女性委員の登用を図っているが、平成二年六月現在の女性委員の割合は8.8%である。都道府県・指定都市においても、(中略)今後五年間の新たな目標値について検討することが望まれる。さらに、このような努力が市区町村全般にも普及し強化されることを期待したい。

(4)(5)(6) 略

5：雇用の分野における男女の均等な機会と待遇との確保

(1) 採用から退職に至る企業の雇用管理のあらゆる段階で、均等な機会と待遇とが実際に確保されるように諸施策の一層の推進に努めるべきである。その際、経営者の意識を変えることにも配慮すべきである。

労働基準法に定められた男女同一賃金の原則の徹底と監督指導の徹底。

(2) 実際上も男女の均等な機会と待遇とが確保されるように、法の施行状況をも踏まえ、法令の見直しを含めた諸施策の検討を行う必要がある。

(3) (略)

(4) 職場における性的嫌がらせの問題について調査研究を行い、必要な対策を推進すべきである。

(5) 働く女性が職業生活と家庭生活との調和を図りつつ就業できるように、必要な相談・情報体制の整備を始め、育児休業法を制定し、実効性ある法律の運用を図る必要がある。また、労働時間の短縮を図ること。介護休業制度の普及を促進するとともに、制度そのものの在り方について検討を行うべきである。

6：農山漁村婦人対策の推進

(1) 家族経営において、女性は実質的には経営のパートナー、あるいは経営の中心的担い手としての役割を果たしている。その役割を正當に認識し、労働に見合った経済的評価が行われるように指導するとともに、妻の財産権の確保など経済的地位を更に強化すべきである。なお、年金を始め高齢化社会を見据えた老後生活の安定を図る施策の推進が必要である。

(2) 農業委員会、農・漁業協同組合、森林組合など、地域の関係機関や組織への女性の

参加を進めるために女性の正組合員の加入などを促進するとともに、女性を理事などの役員に登用するように女性や関係者を啓発すべきである。

(3) (略)

(4) あらゆる手段を通じて地域社会や農山漁家に残る男女の固定的な役割分担意識を是正するために啓発活動を行い、女性に不利な慣習・慣行の解消に努める。

(5) 女性自身が権利の行使や地域社会への参加に積極的に努力するとともに、男性も女性の参加について理解し、協力すること。

地域の関係諸機関もこのことについての認識を深める必要がある。

(6) 生産と生活との両面を担う農山漁村の女性の実態を配慮し、仕事と家庭生活や地域活動との両立のための支援を行う。山間地域の高齢化、都市近郊地域における農家と勤労者家庭などの非農家との混住化、自然環境保全の必要性など、農林水産業や農山漁村の変化に伴う新たな生活問題をも視野に入れて生産と生活全般にわたる指導を充実する。

(7) (略)

7：地域活動における男女共同参画の実現

(1) (前略) あらゆる社会的、政治的、経済的問題、とりわけ環境、消費者、福祉など、重要性、緊急性の高い問題への女性の積極的な取組みを促すべきである。このため、特に環境教育と消費者教育とを振興する必要がある。

(2) 女性が地域活動の実質的な担い手でありながら組織の長は男性という男性優位の組織運営の在り方を改善、女性自身が積極的な意欲を持つことができる環境づくりを行うこと。

(3) 在職中及び引退後の男女の地域活動への共同参画が実現するために、企業は労働時間の短縮や働く人の学習活動に配慮すること。

(4) (略)

8：男女共同責任型家族の形成

(1) 家庭責任、家庭教育や養育、老人介護は、男女の共同参画によって果たされるべきものであるという認識の浸透を図る。特に、父親の家庭教育や家庭生活への関わりを深めるための啓発活動を推進すべきである。また、実際に共同参画が実現できるよ

うに、育児や介護・看護のための休業制度の確立、労働時間短縮やフレックスタイム制の導入など条件整備を図るべきである。

(2) (前略) 完全週休二日制の普及により、経済運営五か年計画の目標である週四十時間労働制の実現に向けて更に一層の努力をする必要がある。併せて、年次有給休暇を完全取得することを促進し、連続休暇の普及、拡大や所定外労働時間の削減を図るべきである。

(3) 男女平等の見地から、夫婦の氏や待婚期間の在り方などを含めた婚姻及び離婚に関する法制の見直しを行う必要。

(4) ILO第156号「男女労働者特に家族的責任を有する労働者の機会均等及び均等待遇に関する条約」の批准の検討。

(5) 家庭生活の維持運営に対する貢献や家庭内における無報酬労働に対する評価について、調査研究の必要。

9：生涯学習の条件整備と生涯にわたる職業能力の開発・向上のための施策の推進

(1) 女性の学習に対する要求は高度化、多様化し、社会参加の増大に伴い能力開発の気運が高まっている。(中略)生涯学習の振興

を図り、育児期の女性や再就職を希望する女性に対する学習機会や情報の提供など、女性が自発的に生涯にわたって充実した学習ができるような施策を推進することが必要である。

さらに、生涯学習の場としての学校の機能を充実し、学校と社会との一層の連携を図り、リカレント教育（生涯にわたって職業などの社会活動と学校教育とを交互に受けられるような仕組みを構築すること）を一層振興する必要がある。また、学習活動の成果を踏まえたボランティア活動など生涯学習の成果の評価や活用の検討などが重要な課題。

(2) 働く女性が能力を十分に発揮して豊かに充実した職業生活を送るために、技術革新や情報化の進展などの変化に的確に対応するとともに、職業生活の全期間にわたって女性のニーズに応じた職業能力開発の機会が確保されることが必要。特に、育児による職業生活の中断についても十分に配慮し、長期継続就労型の女性や、再就職を希望する女性などの多様なニーズに応じた職業能力開発の機会が確保されることが重要。さらに、子育てが一段落してから再び

働くことを望む女性に対応するために、きめ細かな職業相談や情報提供を行い、円滑な再就職を可能にする条件整備の必要。

10：育児期などにおける条件整備の充実

(1) 乳児保育、パートタイム勤務や職業訓練のための一時的保育などを一層普及させる。また、新たに夜間に及ぶ保育ニーズに対応した長時間保育の実施や深夜、休日の保育ニーズへの対応を図るなど、保育需要の多様化に応じた保育サービスの提供とその質的な向上を図る。保育関係従事者の労働条件や処遇の改善を図る施策を推進しなければならぬ。

さらに、子どものいる女性が学習、地域活動、講習などに参加できるように、それらの活動の間子どもを世話をするための条件整備を行うべきである。

また、ベビーシッターなどの子育てを支援する新しい保育サービスの萌芽に対応して、サービス内容、職員の資格と研修方法、就業条件などについて実態把握をし、サービスの質の確保などの観点から指導方策について検討する必要がある。

(2) 共働き家庭などの小学校に入学した後の

子どもの放課後対策の充実。

(3) 育児休業法を制定し、実効性ある法律の運用を図る。幼い子どもがいる男女労働者が安心して育児のために一定の期間仕事を休め、円滑に元の職場に復帰できるように育児休業制度の運営を期待。

(4) 育児期に一時仕事を中断し、育児が一段落してから再び働くことを望む女性に対しては、元の職場に戻ることでできる女子再雇用制度の一層の普及と再就職に関する対策を充実する必要がある。

(5) (略)

11：多様な就業形態における条件整備

(1) 女性起業家がその能力を十分に発揮できるように、人材・能力開発への援助措置を充実する必要がある。(以下略)

(2) (前略)都市部を中心に専門的職業のパートタイム労働が増加。しかし、その労働条件などには依然問題も見られるので、「パートタイム労働指針」に基づき、パートタイム労働者の処遇や労働条件などの改善を図るとともに、労使に対する啓発指導を推進する必要がある。さらに、この指針の定着を図るとともに、パートタイム労働市場

の需給体制の整備などを図ることにより、総合的パートタイム労働対策の推進。

(3) 今後もし引き続き労働者派遣事業を適正に運営するとともに、派遣労働者の保護や雇用の安定を図る必要がある。

(4) 家内労働に従事する女性に対し家内労働法に基づき労働条件の向上に努める。

(5) 小売商業など女性の自営業従事者の就業実態を把握し、その改善策を講ずる。

(6) 女性の生活経験や技術を生かした新たな就業者の実態把握をし、情報提供など必要な援助を検討すべきである。また在宅勤務、サテライト・オフィス勤務など多様な働き方についての調査研究を行い、必要な対策を講ずるべきである。

12：所得保障の充実

(1) (前略) 昭和六十年の年金制度改正において、すべての女性の年金を受ける権利が確立したが、実際上個々の女性の年金権を確保するため、今後とも制度の周知徹底を図るとともに、長期的に公平で安定した年金制度の維持、運営に努める。

(2) 国民年金基金制度の円滑な運営

13：福祉サービスの整備

(1) 高齢者や介護に当たる家族が安心して過ごせるように、ホームヘルプサービス、デイサービス(日帰りの介護サービス)、ショートステイ(特別養護老人ホームなどの短期滞在による介護サービス)などの在宅福祉サービスを充実する。

(2) (前略) 特別養護老人ホームや老人保健施設をできるだけ速やかに整備し、サービスの充実を図るべきである。

(3) 住民に最も身近な行政主体である市町村が地域のニーズをきめ細かく把握し、在宅福祉サービスと施設福祉サービスを総合的に提供できる体制を整備する。

(4) 福祉関連マンパワーを確保するため、労働力需給システムの在り方の検討、労働力需給体制の一層の充実強化を図り、養成の充実強化、労働条件や処遇の改善など地位向上にかかわる総合的な施策を強力に推進すべきである。

14：健康の保持と自立 (略)

15：母子家庭など特別の配慮を必要とする女性の自立と生活の安定 (略)

16：国際化の進展に対応する女性の国際協力 の推進

(1) 開発途上国に対する協力について

① 「開発と女性」については、経済参加、教育、保健医療、環境保全を重視し、開発途上国の地域総合開発の視点に立ち、それぞれ地域社会における女性の実態に配慮したアプローチをすることが必要である。

また、「開発と女性」援助研究会の報告を活用しつつ、専門家の育成と確保、「開発と女性」ユニットの設置などの開発援助実施体制の整備を進める。さらに、国民に「開発と女性」問題に対する理解と支援を得、内外の諸機関と連携することを目指して、国は、開発教育の促進とネットワークの構築を進める。この分野での地方公共団体の取組みにも期待。

② 我が国は技術研修員の受入、専門家及び青年海外協力隊の派遣などにより、母子保健・家族計画、看護教育、婦人行政など女性対象の技術協力をも実施してきた。今後も「開発と女性」の視点を入り、女性の参加と受益との確保に留意

し、あらゆる段階における女性の参加に十分配慮しつつ、技術協力の一層の促進を図る必要がある。

(2) 国連の活動への協力について

① 国連諸機関を通して展開される世界の女性の地位向上のための活動に対しては、積極的に協力、貢献すべきである。

(中略) また、引き続き UNIFEM (国連婦人開発基金) など国連の婦人関係各種基金への拠出及び国際機関や地域レベルの諸活動に対する支援を重視すべきである。

② 未批准の国際条約の批准促進。

(3) 国際機関、国際会議への参加促進について

① (略)

② 我が国は、国連に対する拠出金の額が世界第二位でありながら国際機関の職員への参加が遅れている。女性職員数は比較的伸びが大きい(例、国連事務局日本人職員総数中の女性の割合は、昭和六十年 26.6% から平成二年 40.5%)、さらに国際機関における女性の活躍が望まれる。このため、国際機関の職員採用に関する情報提供及び適任者の推薦に努

め、各種国際会議への女性の参入が促進されるように、適任者の発掘とその登用とに努力する。

(4) 女性に関する情報と人の交流の促進について

① ② (略)

③ 在日外国人女性に対する「相談窓口」を設置する必要がある。

④ 環境問題について、民間団体との連携を図りつつ、国際的な協力を促進する。

特に、女性による環境問題への取組みについて、UNEP (国連環境計画) に対し積極的に協力することが必要である。

17: 女性の平和への貢献

(1) 国内及び地域・国際レベルにおいて平和問題への意思決定過程における女性の参画を促進すべきである。人権、軍縮、安全保障などの問題についても女性の参画が期待され、その貢献が望まれる。

(2) 他国や他人に対する理解と尊敬が政府、非政府機関、学校教育、マスメディアなどあらゆるチャネルを通じて広く普及し、徹底される必要がある。このような理解と尊敬は、国家、性、人種、民族の違いを超

えた平和の基礎である。女性はこのような活動を積極的に推進し、学習することが期待される。

(3) 女性に対するあらゆる形態の家庭、職場、社会における暴力の根絶について、引き続き努力が払われるべきである。暴力根絶のための十分な啓発活動を行うとともに、暴力を予防し、抑制し、減少するため同時に暴力の被害者となった女性に対する救済や援助活動が行われる必要がある。また、戦争を含むあらゆる女性に対する暴力行為を助長するような活動や傾向を容認してはならない。

(4) 世界に千四百〇五百万人と推定される難民の約八割は、女性と子どもである。(中略) 難民問題の恒久的解決に向けて我が国を含め国際社会が難民に援助するに当たっては、難民女性のニーズに対して適切な配慮をする必要がある。

荒野のバラ

田中裕一

小さな死の

大きな意味に学ぶ

1 小さな死に学ぶ

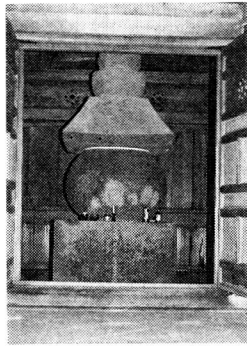
熊本市のある小学校でのこと。校庭の大きな榎の梢に、アオバズクが営巢して、「愛鳥・道徳教育の一環」と早速「サクトロウ」と名付け、その保護を呼びかけた。昼間はつくねんと冥想に耽っているこの鳥も、ミネルヴァの巢よろしく夕暮れから活気づく。飛翔中のカミキリムシを、猛然たるスピードでキャッチしたりして悪食の限りを尽くしては、よつびてホーホーと啼きあかす。

ある朝早く出勤した職員が目にしたのは、フクトロウのいつも留まる枝の下に落ちていたスズメのバラバラ屍体であっ

た。教師たちは慌てた。この惨劇の修羅場は、愛鳥や道徳にふさわしくないと、生徒の登校前には、殺しの証拠が跡形もなく隠滅された。

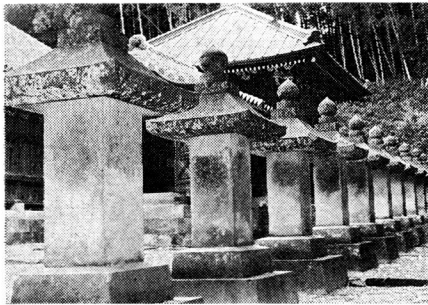
「道徳教育」の偽善はここに現れる。小さな者の死から学ぶ教育の決定的な機会は、失われたのである。猛禽類は他の小動物を襲わねば生きていけないという食物連鎖を学ぶ機会を失えば、単なるペット化に過ぎない。宗教論や悪玉コレステロール論において、人もまたビーフやチキンという草食―肉食の連鎖の中で生きてきた。人間は生きるために、卵を奪い、動物を殺さねばならない。だからこそ、その最低必要の限度を超えた無用な殺生をしないという認識に立って、初めて自然と人間を貫く道徳が成立するのであって、嘘っぱい「道徳教育」は真の道徳から離れた偽善にさえ陥る。いかに多くの小さな者たちの死が現実の生を支えているかを知るには、子供たちにタイノコの一定量を計量してその個数を分担計量させ、総量を推計させればよい。その上で、海水が魚だらけにならぬ訳を考えさせたい。実に多くの死が、他の動物を支えると同時に、自らの個体と種を辛くも存続させる死中に活を得る進化の跡であることがわかる。植物も、虫に食われても枯死しないだけの葉をつける。虫が死ねば花粉を媒介する手段を失うからである。鳥が赤い実を好むのは、童謡の赤い鳥になるためでなく、実の存在が認識できるからで

ある。未成熟の間は食われぬよう目立たないのが植物側の進化である。ヤドリギの実ヒレンジャクに食われ、その粘液をなすりつけられた他の枝で発芽するし、マグノリア属（モクレン等）は鳥に食われて、その排泄物の酸で発芽を促進する。熊本市のツブラジイは、豊作時に一平方米約五百個の椎の実を落とす。この年野ネズミは大繁殖する。餌が豊富だからだが、食い尽くされてはシイもたまらない。だから次から二年程不作を続けることで次年のネズミの個体数を調整するらしい。かくてネズミの巢に運ばれて残された実や種々の競合に残った椎の実が発芽し、暖帯照葉樹林が形成される。生



(右)細川ガラシャの墓(熊本市立田自然公園)

(下)細川忠利夫妻の廟を囲む殉死者の墓の異様な光景(熊本市北岡自然公園)



と死の絶妙のドラマというほかない。「死中に活」を学ぶこ
うした自然界のドラマは、戦時中の死中に天皇とか愛国とか
の虚構の美学を求める観念とは、基本的に異なるリアリズム
に立つものである。

2 時代に深く根ざした死

死から学ぶことは、生きる者にとって無限である。私たちは
いずこより来て、いずこへ去るか知らない。精子と卵子の
結合の確率で生命の尊厳を示されても、私がなぜにあの鳥で
なく、その虫でなく、この草々でなく、この私でしかないの
か。ただ限られた短い時間だけ、この地上に人として存在す
るだけ、それも唯一度だけでやり直しが許されないこの事実
を、哲学者は「有限な実存」とか「死への存在」とか分かつ
たようなことを言う。



阿部弥市右衛門の墓

森鷗外「阿部一族」のモデルとなった阿部弥市右衛門の墓(熊本市北岡自然公園)

その実そう言った彼自
身はヒトラーに協力す
る決定的誤ちを犯して
しまった。また「賭け」
と呼んだ別の哲学者
は、ヒトラーに抗する
レジスタンスに身を投
じた。

肥後熊本の細川忠利は、一六三二年（寛永9）に入国した。

その母、玉子は明智光秀の息女で、信長の媒酌で夫忠利に嫁いだ後のガラシャ夫人である。むろん丹波（明智）・丹後（細川）統一の政略結婚だが、この才能豊かなガラシャが、なぜ本能寺の変や関ヶ原前夜の苦悩の中で、三十八歳の非業の死を遂げねばならなかったか、生徒たちは私たちの校区にあるガラシャの墓でその封建社会の非情の社会構造を学ぶ。観光案内の烈女礼讃とは異質な、リアルで、人間的な歴史の学びである。

また、寛永十八年の忠利の死と共に殉死した十九人の武士の墓地を訪れた時には、忠利の廟を取り囲む十九基の墓石の異様な光景に、生徒たちが息を呑んだ。森鷗外の「阿部一族」を調べた後で、その殉死者の墓群に阿部弥市右衛門の墓碑を見付けて感動し、その墓石を撫で擦りしては人間の歴史に手で触れようとする。その殉死に端を発した阿部一族の反乱を辿りながら、鷗外がこの作品の一年前の大正元年十月に、先代の細川忠興の殉死者に取材した「興津弥五右衛門の遺書」を書き、そのひと月前の九月十三日、明治天皇「大葬」当日殉死した乃木大将夫妻の自殺に鷗外が衝撃を受けたことに辿りつく。

戦争だけが生と死の教材なのではない。八月六日だけが平和と教育デーではない。三百六十五日が、生と死・平和と教育で

なければならない。殉葬はすでに古代殷墟の発掘からその葬制に生徒は学んでいる。それが日本の明治や、江戸の熊本にあった事の驚きに、学びの原点がある。

江戸期の「明良洪範」に、武士の殉死に「義腹・論腹・商腹」の三種が紹介されている。忠義一徹（義）、同輩に準じて（論）、子孫の石高加増を念じ（商）という訳である。上記十九人の殉死者中九人は扶持米取の低所得者で、中の一人（野田喜兵衛）など、殉死後、養子が三人扶持十石から二百五十石御番方に出世した。だが阿部のみは主君の許可なく殉死したので加増がなく、当時の千百石を五人の子で分ける小身者となり、反乱の導火線となっている。生死とは、一般論で割り切れぬ時代や社会に根ざした深い根源を垣間見せるものである。

3 詩人の言葉すら色褪せる死の重さ

安保闘争時、デモ中に殺された大学生樺美智子の死の記憶が遠ざかるほどに、憲法九条なくずしの空洞化は野党もろとも加速していく。

韓国国会は、五月十日、国家保安法修正案を四十秒で抜き打ち採決、北朝鮮・在日朝鮮総連を反国家団体とし、処罰の対象とする規定を存続させた。抗議デモに参加中の明和大学生が、私服警察に鉄パイプで殴殺されたのは四月二十六日であった。学生たちの抗議は五月十日まですでに五人の焼身自殺

を出した。かつて李承晩を追放し、八七年の民主化闘争で軍事独裁を終結させた実績をもつ学生たちが、今、変革の先頭に立っている。「個人の生命は政權より重い」と学生の自殺に警告した反体制詩人金芝河は作家會議を除名された。政權より、重い学生の命を虐殺した体制を、内相辞任で承認するか、大統領責任にまでさかのぼるほど重いと見るかの現実認識ぬきで、「自殺」一般は論じられない。

自ら死に直面する弾圧の修羅場から解放された経歴をもつ金芝河もすでに老いたりとするか、日本的退廃後追いへの予兆と案じるか、詩人の言葉すらもはや学生たちに現実的説得力を持たないのだ。

4 小さな死の、大きく深い構造

私たちは一つの小さな死が、限りなく大きな生に警告している構造を知らねばならない。

一九四三年、「かわいそうな象」は上野で殺された。初代都長官大達茂雄の処分命令であった。仙台からの疎開申し出も拒否し、戦意高揚の先例とされた。熊本^{クマモト}の象エリーも翌年電殺され、その肉は軍隊と市職員に、また養豚場の餌にされた。昨年その遺骨が発見され、私たちはそれを教材に構成した。大達氏は、「象がほしけりや勝って南方から幾らでも連れてこい、一匹二匹がなんだ」と豪語したらしい。彼は都長

官以前、日本占領下のシンガポール市長であった。当時の現地で、五万人の華僑虐殺が起こるのである。象の一匹位軽い訳である。

彼は戦後文相となり、教育二法を実現させた。この法規が、今日の湾岸戦争授業への牽制法規となっている。大達シンガポール市政で警察部長を勤めた緒方信一氏は、大達文政下の文部高官として熊本大学学長選挙に干渉した。ソ連法学の権威山之内一郎教授を候補に擁した法文学部教授会が、学長選をボイコットする。大学管理統制のはしりだった。緒方氏は、戦後シンガポール市民から厳しく華僑虐殺の責任を糾弾されたことを、当時現地の星州日報がトップの写真入りで報じている。知らぬは日本ばかりなりである。

湾岸の頻死のペルシャ鵜に心動かぬ人はなかったろう。その足下で、ミルク工場や病院機能も麻痺させられた子供たちの死をも正当化できる、いかなる「正義」がこの地上に存在しえようか。「国際貢献」を謳いながら、子供の権利条約はじめ、幾多の国際人權規約に批准せず、腰の重いアメリカと日本に、「正義」や「新秩序」を弄ぶいかなる権利があるのか。過去の余りにも多くの、奪われた非業^{ひがふ}の死に学ぶことなき「正義」や「貢献」や「秩序」などは、歴史的な死者たちや世界千七百万の難民たちにとって、吹けば飛ぶようなまやかしに過ぎない。

男性学への契機

魔男の宅急便

■ 諸 橋 泰 樹

あえて

父親殺しの汚名を着て

友人の編集者が、「1・5・7ショック」及びその背後の社会意識、たとえば未婚女性に対する「齢をとるとみじめよ」とか「子どもを持てばあなたも成長するわよ」、子どもにない既婚女性に対する「お子さんは？」とか「まだなの？」などという「慣用句」にも申すべく、女性たちが子どもを産まない理由についての本を編集・刊行した。独身男性も三十代半ばともなると、女性に対してほどではないが、プレッシャーや「善意」の押しつけを度々感じるようになる。世の中には本当に子ども嫌いの人もいて、埴谷雄高などは、子どもの存在や子どもが泣くことについて超深淵的で哲学的な考察を行い、子を持たぬことを理論化したものが、どちらかというとぼくは子ども好きで、しかも自分が「子煩悩なパパ」になるであろうこともよく自覚している。しかし、ぼ

くの個人生活上には種々制限された条件があり、子を持たぬ理由が勝ってきた。また、これから先も、産まない思想を選びとってゆくであろうと思っている。

ぼくの父母が、離婚して20年近くなる。その間一度も音信もなく、しかし生きているらしい男—今はおそらく大学生か高校生になろうとしている二人ぐらゐの子どもがいるのではないかと思われる。ぼくのもと、父親が、ぼくの父親となった年齢を、ぼくはどうに過ぎてしまった。もと、父親がいまのぼくの年齢の時、ぼくは既に十歳近くになっていたのである。

ぼくは、インテリの仮面を被った、それでいて反動的な考えと性格を持った父親に対して、徹底してぬりくりとかかわして期待を裏切った。時には鈍感なふりをして怒らせ、反抗した。ついに先方が、「一流学校」にぼくが入れなかったことを主理由に女性をつくって出たので、幸いにして消極的な父親殺しをすることができた。

消極的、というのは、ぼくが父親の許をおん出たり、腕力や恫喝のことで父親に勝つような、劇的にカッコイイ方法で父親殺しをやれたわけではないからだ。あのままだったら、ぼくは父親殺しのできぬフヌケのまま、ついにはこちらが精神的に殺されていたに違いない。そして大学受験に三浪のあげく、働けとか出ていけとか言われ、ある夜半、酒の力を借り、自分を生かすために先方を殺していただろう。

ぼくの代わりに一柳展也君はそれを実行してくれた。

こちらが手を下すことなく父親殺しができたおかげで、生活費と大学・大学院の授業料を得るため、10代後半から20代前半を労働にあけくれることにもなったが、マイペースを通すことができ、いまや、当時の漠とした目論見であった自己実現の領域に近づきつつある。

しかし一方で、いまも一緒に暮らす母親から、お前にはもと父親そっくりのいやなところがある、と言われたことが一、二度あった。また、恋人との関係や対人スキームなどで、ひょっとしても、父親と同じようなことを俺は言ったりやりたりしているのではないかと自覚し、愕然とすることがある。おそらくぼくが父親になれば、もと父と同じく子煩悩ふうでありながら、子に期待し監視し、世間体を気にし、子に精神的抑圧を与えるいやな（もと、父親が10とすると6ぐらいのレベルの）父親になり、今度こそ殺すか殺されるかするのではという予感があったりする。ぼくが子を産まないことの理由に、血のつながる自分の分身のおぞましさにゆえに血を絶やしたいということと、環境破壊や核戦争で地球がダメになる時、子への責任がとれないという、二つの理由のほかに、それ以上に、いま述べたことが大きく作用している。

これはぼくのエゴかもしれない。しかし、ぼくに言わせれば、多くの男性は、「父親殺し」について、自身が父親にな

ることに對して、無自覚すぎる。家族関係における父親と息子、そして自分もまた父親として抑圧者になることについて、その連環を断ち切る何か、あるいはその連環を超える何か、九〇年代から二〇〇〇年代にかけての重要課題として模索されなければならないのではないか。

「社交辞令」や「善意の心配」のつもりの「次は結婚だね」とか「早くお孫さんを作ってお母さんを安心させてあげ」などのぼくに対する言葉に對して、「次」がどうして「結婚」でなくてはならないのか、「孫」がどうして親を「安心」させることになるのか——死期が近づいたことに不安になるだけではないのか——とつぶやく。

よっぽど、「ぼくは、『魔男』なもんで、人類の幸福のために魔男の子を作らないようにしているんですよ」と言おうかとも考えるのだが、箒ほうきを使い始めた魔男が窓から箒にまたがってサバトに飛びたつシーンではなく、窓からこそそそ逃げる間男を想像させることは必定なので、なかなか有効な受け応えがでずにいる。ぼくは、「1・57ショック」が、男による女への「何故産まないのか」というバッシングばかりで、「産まない男」の意見がまるきり無視され、責任を問われないことにひそかに怒る者だが、父親にならないこと、裏返せば父親になる責任の重要性について語ることも、この道を選んだ男性の大きな課題だと思うのである。

続・「暴力的」ということについて

武田 秀夫

教室の子ともたちと「太平記」を読んで辟易した。いつもなら「平家物語」を読むのだが、NHKの大河ドラマでも採り上げることだし、古典の苦手な自分は「太平記」なんて読んだことがないし、このさい目先を変えて子どもたちと一緒に読んでみるのも一興か。そんな軽い気持ちで口語抄訳を読んだのだが、いやはや、これがなんともすさまじいしろものだった。

武士たちが腹を切って自刃する。やいばを口にくわえ、まっさかさまに馬から身を投げける。「自害の手本だ。見ておけ！」などとはわりながら。それはそれでよい。「平家物語」でそうした場面はずいぶん読んできた。が、「太平記」の武士たちは、切った腹から己が腸をつかみ出し、それを皆の樽の板に投げつけたりする。もはや最期と集まった者

たちが、酒をなみなとついだ大杯をまわしながら、戦場のこととて何もない、ちと酒の酒菜などと冗談言いながら腹を切り、腸をつかみ出して一座の者に供し、莞爾と果てていく。特殊なエピソードではない。抄訳本の中にすら、一再ならずそうした場面が出てくる。「太平記」の世界、その時代において、そうした死にざまは一種の定型となっているかのようにさえ思われた。読んだ子どもたちはもちろん青ざめたが、私もまた、そのすさまじいニヒリズムに呆然となった。

己が身体に対するこの無関心。自分の身体を自分自身とは無縁の、単なるものとして扱うその態度。平然と、おもちゃのように、自分の身体をもてあそぶその心性。それを何と名づけたらいいのか、私は知らない。しかたがないから、ニヒリズムというありあわせの

ことばで間に合わせたのだが、はたしてこういうことばでいいのかどうか、難しい横文字、学問的術語に弱い私にはわからない。

同じ戦記物でも、「平家物語」の武士たちの場合は、「疾く疾く首をとれ」と言う敦盛の首を直実が泣く泣く掻く「一の谷」をあげるまでもなく、彼らの自他の身体に対する感覚は、今の時代の私にも了解が可能だ。己れ自身と己れの身体との間に健康なつながりが保たれている。他者の身体に対する生きた関心がまともに働いている。そんな感じがして、おびやかされるような気持ちにはならない。

それに対して、「太平記」の世界では、その両者の間に深い疎隔・亀裂が生じていて、その暗く深い裂け目から猛烈に暴力的なものが噴き上げてくる。自分の腸をつかみ出し、酒の酒菜にどうぞと笑うなど、今なら、完全に精神病理学の範疇に属すだろう。

「平家」から「太平記」へ。歴史上、その間に、何か猛烈な人性上の変化が起きた。そういうことがあるのだろうか。

その一方、こうも思うのだ。

古来、このクニの土俗には、そうしたニヒリズムが伏流として生きつづけてきた。無明の闇に棲む民は、そのニヒリズムをあたりま

えのこととして生きてきた。それが、支配秩序のガタガタに緩んだ「太平記」の時代に、たまたま歴史の表面に浮上したにすぎない。あの猛烈に明るく暴力的な「太平記」の武士たちは、そうした土俗的世界に出自を持つ、そうした世界に深く根をもった者たちだったのだ。

彼らは哄笑しながら、自らの身体・生命を惜しげもなく捨てていく。痛み？ 私は信じるが、彼らは痛みを雄々しく我慢しているのではなく、ほんとうに痛くないのだと思う。ある種の心的状態において、人は痛みを感じないことがあるのだと思う。痛みというものに滅法弱い私は固くそう信じている。そうではなくて、腹を切つて腸をつかみ出すなどということができるだろうか。

深沢七郎の「檜山節考」を映画化した今村昌平の作品において、坂本スミ子扮する老婆が自ら歯を欠く場面に私はすさまじく暴力的なものを感じ、おびやかされたような気になったことがあるが、このクニの土俗に潜むニヒリズム、そこから発するアモラルな暴力は、このように現在にいたるまで地下の伏流のように流れつづけ、時に、例えば、深沢七郎、今村昌平といった表現者によって汲ま

れ、時に、三島由紀夫の自害といった形で自らを表わす。それは、たとえば、井上靖のよな作家の作品にも生々しい息を吹き込み、「しろばんば」における洪作の暴力、「あすなる物語」における鮎太の暴力、「風林火山」の軍師山本勘兵衛による斬殺の場等を見よ、今、ビートたけしという天才的表現者を通じて自らを表わそうとしている。もしかしたら、煙草の火を自分の手に押しつけて遊ぶ現代の少年少女も、「指をつめる」ことによつてあかしを立てるやくざも、同じ流れを汲む親族氏族なのかもしれない。

では、血を厭い、暴力的なるものの対極に位置するとされている「女性」なるものは、こうした伏流から無縁のものであろうか。

一昨年の末に引越しをした。そのさい処分した本の中にまぎれたのか、どうしても見つからないのだが、井上光晴の印象的な短篇があった。団地に住む若い主婦の一日を淡々とつづった作品だった。

ひとり娘を朝、幼稚園に送っていく。娘のおしゃべり。それが、現実よりわずかながら遠くに聞こえる。エレベーターで一気に降りたときのあの耳の状態。わが家に戻り、家事をしながら時をすごし、また娘を迎えに行く。

「ママちゃんねえ」とまた娘のおしゃべり。二人だけの夕食。夜おそく、酔った夫が同僚を連れて帰ってきて、また飲みはじめ。肴の用意。少し酒も付き合う。そんな、単調な、無名の主婦の一日。それが、その女性のモノローグによつてたどられるのだが、読んでいるうちに、徐々にこわくなってくる。

生に対する感觸の全く失せたその女性の心的状態、そのアバシーの状態にある女性の歩行につれて触れてくる外界が、何か薄い膜によつて隔てられているようにしか感じられない、その感じが、読む者に伝染してくる。

最後は、その主婦が手を切つて血を流す。割れたコップの破片が傷つけたのだったか、猫が引っ掻いたのだったか。主婦は、深夜のペランダにひとり出る。手の血を拭くことをしない。無感覚な目で、他人のそれを見るように、自分の手を、流れる血を、見ている。酔った夫の、友人といつまでも談笑している姿、声が、わずかに現実はなれして、隔てのガラス戸の向こうにある――。

この女性が、何かのきっかけで、自らの無意識の底から噴き上げる暴力的なるものの嵐に、打ち倒されることがないと、だれが言えるか。



え・加藤由美子

ぶん・福田 緑

一教室中に鳴りひびく悲鳴一

妙にニヤニヤしている修平君。ふと見ると私の椅子の上に気味の悪いヒキガエルのミニチュアがのっています。

「あら、これ、誰が置いたのかな? エイッ」と修平君に投げてやると、

「ギャーッ、ワッワッ、先生こわくないの?」

「ゼーんぜん。こんなの慣れちゃった」

「チェッ。せっかく気持ち悪いのガマンして持ってきたのにな」

「相手をまちがえたわね。そうだ、山田先生なら絶対叫ぶわよ」

「じゃ、先生、何か用事作って入ってきてもらってよ」

修平君は五年生ですが、発音の歪み^{ひずみ}があり、「つ」が「ちゅ」に、「す」が「しゅ」になってしまいます。ラ行も何となく舌足らずな発音なので、「あいつのことば、幼稚だぜ」とからかわれるようになり、「ことばの教室」

に通い始めました。調べてみると、舌足らずどころか長いペロンとした舌が、口の中でじつとしていられずにビクビクけいれんしています。この舌の動きをなめらかにすることです、ずい分発音がきれいになるので、まずは舌をフンワリ安定させる練習から入りました。

ところが学級ではいじめられて緊張しているせいか、「ことばの教室」にくるとほほがゆるみっ放しで、ちょっとしたきっかけでケラケラ笑い出してしまい、練習に熱が入りません。のどが乾いたと言っては水を飲みに行きます。一学期間そんな状態が続いたあと、ようやく落ちついて舌の練習にも応じ、絵をかいたり、ゲームを楽しんだりするようになりました。

そして、このいたずらです。

私は、待合室に向かってドアを開け、「山田先生、修平君が見てもらいたいものがあるんだって。お話が終わったらいいい?」

と声をかけて、修平君に目配せ。彼は手で持てないので、くだんのヒキガエル、ネズミ、イモ虫、ヘビ、モグラなどをチリ取りに乗せて待ちかまえました。

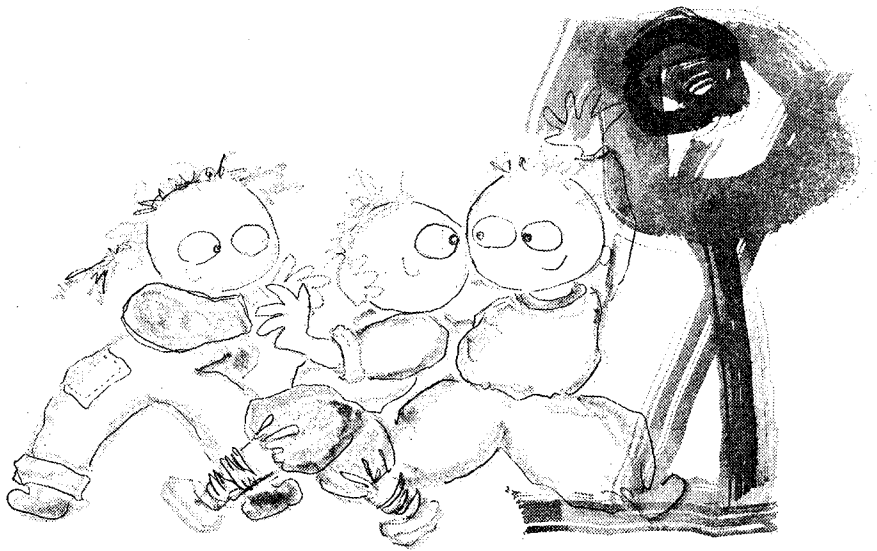
ドアをサッと開けて入ってきたのは、ゲテモノごときは何のそのという若き佐藤先生、仁王立ちになり、ギロリと修平君をにらみつけます。一瞬、どうなることかと思いましたが、佐藤先生はたくらみを察すると、さりげなく用を済ませて退室しました。

修平君、気を取り直して、再度スタンバイ。「今度こそ」と緊張した顔付で、しっかりチリ取りをにぎりしめています。連絡帳を書く私もワクワク、ドキドキ。

ドアをそつと開けて「なあに？」と入ってきた山田先生の胸元に……。ヤッター!!」ネズミが、ヘビがとびかいました。

「キャ

山田先生の悲鳴が、長く鋭く、教室中にひびき渡ったのでありました……。



葬送の自由をすすめる会

〈人見 達雄〉

このままでは日本は墓ばかりになってしまっています。

これまであたりまえのことと思われてきた「○○家の墓」というのは、実は明治の後半になってから旧民法による家制度の政策に伴って普及されるようになったもので、歴史の浅い慣習だったのです。それまでの日本では、庶民が墓をつくるということは一般的ではありませんでした。

暮らしたマンションのコンクリートの箱の中、働くのはオフィスの壁の中、そして組織という人間の壁に囲まれて生きてきた多くの人々。せめて死んだら自然に帰りたいと願う現代人を待ち受けているのは、何百万円もする、山をブルドーザーでゴルフ場のように削って造った○○霊園の一角。瀬戸物の骨壺に入れられてコンクリートのカロートという小さな箱の中に閉じ込められ、おまけに世界の各地から自然を破壊して取り出してきた墓石で、重しまでされてしまう。ああこんなはずではなかった、死んでからまで環境破壊をしたくはなかったという死者の声が聞こえてくるようです。

ジャンギャバンも遺灰を海に撒いていた。死んだときくらい、夢のある生き方があってもいいじゃないかという願いを込めて、葬送の自由をすすめる会が結成されました。

連絡先 〒279

千葉県浦安市美浜 3 の 29 の 19

安田睦彦方 葬送の自由をすすめる会

自己紹介ぶるうきイキイキ

ちいさな風の会

〈若林 一美〉

「ちいさな風の会」は、子どもを亡くした親の会です。

たとえようのない「悲しみ」ということだけを共通の核にして、逆縁の悲しみを背負った親たちが呼びかけ、自然発生的にうまれたグループです。亡くなった子どもの年齢も、死因も、親たち自身の年齢も皆ばらばらで、死別直後の人から三十三回忌を終えたという人まで、様々です。発会当時、十人足らずだった会員も、百人を越えました。はじめのうちは、同じ悲しみを持つ者同士が集えば、忘れかけた悲しみが再燃し、つらさが増すのではないかと心配する声もありましたが、会を重ねるなかで、自分があるがままに表現し、お互いが認め合い、信頼し合うことを通し、悲しみそのものが消え去ることはなくても、悲しみと共に生きる自分のみつめ方が変わることを、体験的に実感してきました。

東京では二カ月に一度、定期集会を持っていますが、全国にいたる会員をつなぐお便りを、年八回位、文集を二回発行しています。特別な専門家がいるわけではなく、悲しみを持つ者同士が寄り添う自助グループです。会員は体験者に限りませんが、ここは、「泣いても、怒っても、そして笑っても良い場」なのです。会発行の文集は実費でおわけしています。

連絡先 〒160

東京都新宿区西新宿 4 の 14 の 3 の 4B

☎03-3374-9486 (若林方) ちいさな風の会

買つて来て使う

■山本謙吉

草履

ポカポカと気持ちいい日曜日、近鉄生駒駅で二両連結の生駒線に乗り換え、信貴山下という駅で降りた。

ちょうど駅前にあった三郷町コミュニティセンターの事務所の窓口で、「草履の工場へ行きたいのですが……」とたずねてみたところ、幸運にも、数軒の家でつくっている履物の協同組合の、理事長さんの弟さんが、車で道案内してくださることになった。

奈良県生駒郡三郷町。家や建物がそここに立ちつつも緑もいっぱいこの町を、五分も走ったかどうか、「この村でつくっているんですよ」と言われたそのあたりは、道路も広広としていて、新興住宅地のように思えた。団地があり、家が建ち並ぶ中の、ある一軒の家と軒を並べる、倉庫風の建物の前で車をおりた。入口の戸が開いており、奥の掃き出し窓も全開だ。「どうぞあがってください」という仕事中の南浦さん夫妻の声に「お邪魔します」と草履を脱いで、家内工業の仕事場へ上がった。

「今作ってはる草履は?」「旅館履きの子ども用ですよ」「日曜日なのにあたへんですね」「納期が迫っているから……」鼻緒が挿げられた合成皮革の草履表の裏側に接着剤を塗って、しばらく置き、ゴム裏を貼りつ

けて乾かし、ゴムの厚さを揃えて箱詰めする。目を上にとやると、高級な草履に使う色とりどりの反物が積み上げてある。草履の産地としての歴史は四十年くらいで、元来鼻緒の産地であったが、今では旅館履き（スリッパ代わりのゴム草履）から、僕の履いている畳表の草履、そして高級な草履まで、あらゆる草履がつくられている。どれも仕上げまでに七、八軒の家をまわる。鼻緒をつくる家、その鼻緒を挿げる家というぐあいに、各家ごとに仕事の内容が決まっていて、忙しい時期になると、全世帯総動員で草履といっしょに各家をまわるといふことだ。

畳表の草履は、他の種類より鼻緒が一センチほど前寄りについている。これは歩くときにいっそうよく足の指が動くようにと考えてつくられているからだそうである。僕などは薬指と小指が草履からはみ出して、ときどき地面につきながら歩いているので、うん、うん、とうなずいてしまった。

「こんどは平日に來ます」と言って、僕は草履を履いた。久しぶりに生まれ故郷を懐かしがったこの草履は、地面とスタツ、かかととペタツ、スタツペタツスタツペタツと、とても御機嫌でリズムカルに、すぐ近くの国鉄関西本線三郷駅へと歩きだした。

緑の中の学園



半田たつ子



「主治医の彼に対する関心は、治療が無効であることがはっきりしてからは急速に遠のいていったのだ。回診にくる主治医は彼の目をまともに見ようとはせず、声だけをいつもより大きくして励ますと、そそくさとして部屋を出て行くようになっていた。

主治医の関心は彼の存在そのものではなく、彼の持っていたガンにのみあったのだ。主治医はその力が発揮できるうちは、ガンの持ち主である彼に対しても誠実であったが、

ガンがその力の及ばぬところとなったときから、主治医にとっては彼は痛みだけを訴える、ただのめんどろな患者にすぎなくなってしまうのだ。いまでは、彼はこの病院では、その存在が消滅するまで適当に鎮痛剤を使用しておけばよいだけの存在でしかなかった。」(山崎章郎『病院で死ぬということ』より)

夫が最初に入院したK大学病院の主治医はガンの原発がどこであるかをつきとめるまで真剣だった。検査のデータの分厚いファイルをバラバラとめくりながら、誠実に説明された。しかし「原発は意外なことに肺でした」と、やや興奮して報告したあと「大学病院とは、患者が終末期を過ごすべき場所ではないから、転院を」とつけ加えた。

父はK大学病院で亡くなっている。私はここに夫を入院させていたくなかった。第一に縁起が悪い。父が危篤になってから家族はICUの外に放り出された。医療関係者と機械だけがバタバタと出入りし、一切が終わってから初めて入室させる、そんなやり方が許せなかった。だから、直る見込みがないと分かった時、「その日」まで、気持ちよく明るく、心穏やかに送ることができる病院を求め、大

勢の方にお尋ねした。何人もの方が勧められた東京衛生病院を訪ね、外来初診で話を聞いていただいた。

内科医の本郷和彦氏は、「本当にお気の毒ですが、治療は見込めないでしょう。問題は痛みに対する対応ですね」「放射線の治療だけは、今の病院で受け、それから転院されたほうがいいでしょう」と言われた。若林一美さんから「転院は、とてもエネルギーを必要とする行為」とうかがっていたが、K大学病院から突き放されたことをむしろ幸いとして、東京衛生病院に必死でアタックした。

2

いよいよ六月二十四日転院。きゃしゃな看護婦さんが、一人で夫をストレッチャーからベッドに移されるのに驚く。一度も診察したことがない、顔も知らない患者の主治医となつた本郷氏が、明るい声で「さあ、半田さんいかがですか」と部屋に入ってこられる。早速必要なものを、下の売店に買いに行っているあいだに、機械と技師が病室に来てレントゲン撮影が済んでいる。父は肺炎を併発して亡くなったのだが、「もういいよ」と言っているのにもかかわらず、十二月の寒い日、地下のレントゲン室まで連れていかれたことが

風邪を引いた原因、と私は疑っていた。だから、この病院では病人を動かさず、技師が機械と共に来て下さる……と、うれしかった。

K 大学病院の食事は、まるで機内食のように、凹んだトレーにプラスチックの食器が収まって運ばれた。特に食べ物の好みに気難しかった夫は「この病院の味付けは、何とも言われぬ独特のものがある」とこぼしていた。しかし、衛生病院では、家庭の食事と同じような瀬戸物の食器に、美しい配色で食欲をそよめる盛りつけの食事が出た。夫は、病院の暮らして一番うれしいことは、私が来てくれること、その次が食事、と言った。また、この味噌汁は、うちとおなじ味、とも。食事が出来なくなる日が二週間後に来たのだけれど、この夫の言葉は、おいしく食べられる日があつてよかつた、今も私を慰めてくれている。

3

看護婦さんの素敵なことには、目を見張った。七月の終わり、夫が危篤になった夜中、当直の若い看護婦さんの適確な処置。あけ方に福井から車で駆けつけた夫の身内に対する、臨機応変の対応。専門職としてのゆるぎない自信と、場を重ねて訓練された判断力に圧倒

された。

危機を奇跡的に乗り越え、ふっと意識がもどった時、夫が「食事はどうなっている？」と聞いた。夢心地で本郷氏に話すと「軽いお食事をお出ししてみしよう」と言つて下さった。おもゆとか、ヨーグルトとか、ほんの一品。とりわけ優しい看護婦の塩田さんが、れいれいしく捧げ持つて、ちょびり首を傾け「これが半田さんのお食事です」と悲しげな顔をしたこと、忘れられない。

バスに乗る前から降り始めた雨がみるみる激しくなり、降りる時は篠つく大雨、ずぶ濡れになって病院に着くと、千葉さんが「まあまあ」と迎えてくれ「半田さんと、奥さんびしょ濡れになっちゃいますねえ、って話していたんですよ」と言いながら、バスタオルとヘヤードライヤーを差し出した。その頃夫は、全く意識がなかったのに、千葉さんは彼と言葉を交わして下さつたのだ。

平山正実氏によると、治癒の見込みがある患者群と、全く見込みのない患者群で、看護婦の訪室回数を比較したところ、前者が圧倒的に多かったという実験がある、と。臨終になると家族を追い出し、人工蘇生器や点滴セツトを持ち込み、必死になって心臓マッサージ

する医師は、死を恐れる気持ちを防衛するためにこのような行動をとるのだ、と分析する心理学者もいる、と平山正実、A・デーケン編『身近な死の経験に学ぶ』。医療従事者にとつても死を受入れるのは難しいようだ。ところが、この病院にはそんな気配もなかった。看護実習で夫に付いて下さつた三年生の岡田さんの献身的なケアは、夫も「今どきの若い人に、こんなに行き届いた看護が出来るとは」と、ただただ感心していた。その上に、高校卒業後わずか三月で初めて病院に出た一年生の人たちが薬玉を作つて、病篤い夫のために祈りたいと、申し出てくれた。

東京衛生病院の「入院のご案内」には「職員のか多くは神と人々とに奉仕する決心をしたキリスト教徒です。神に対しては日ごとに献身を新たにし、みなさまに最善の奉仕ができますように心がけ、毎朝礼拝の後、仕事をはじめております。また患者さんがたが真の心の安らぎを得、肉体の苦痛から解放され一日も早くお元気になられますよう各職員は祈りつつ働いております」とある。本当にこの言葉のとおりだと感謝してきたけれど、まだ「職員」になつていない学生さんに、どうしてこんなに美しい行為ができるのだろうか？



図1 夫の枕辺で祈ってくれた看護学生さんたちと平田文子先生（中列左端）

4

夫を亡くしてから、私の中で価値観が転換した。人間にとって一番大事なこと、それを追求する営みに、これからの私の時間を使わなければ、と心が逸った。「子供たちが生と死を考えるチャンスで、どのようにして作ったらいいのか」ということは、その一つだった。東京衛生病院の看護婦さんは、どのような教育を受けられたのか、それを知りたいという願いがどんどんふくらんでいった。本号には、同病院で看護学生の実習を指導された平田文子先生にも書いていただいたが、その平田先生のお骨折りで、彼女たちを育てた三

育学院短期大学訪問が実現した。五月九日、そぼ降る雨が緑をしたたらせる日だった。

三育学院は、九十年余りの歴史を持つミッシェンスクール。小中高校は、北海道、茨城、広島、鹿児島、沖縄などに散らばるが、短大のキャンパスは、千葉県大多喜町の高台にある。外房線茂原駅からタクシーで四十分、夷隅川の清流を見下す十万坪の広大なキャンパスに南欧風のエレガントな校舎が、私を待っていた。

いつも、何かしら花が咲いているという庭園、塵一つない校舎。それは教育の一つの柱に労作があり、週六時間を当てているからとのこと。今、言いならわしている知育・徳育・体育は、実は三育学院がその元祖ということだ。労作は体育に相当する。この学院では、体育とはスポーツの記録を競うことではなくて、汗を流し、労することによって体を鍛えることを意味しているようだ。

学院の創設者の名を冠したグレンジャー記念講堂では、東京衛生病院の林院長が、全学生に特別講義の最中。ネオ・パロックのバイبولガンが目を引く。看護学科だけでなく、英語学科の学生も全員が林氏の煙草の害と肝臓の関係を学んでいた。

御夫婦共にほぼ一世紀を生き、学院発展に多大の貢献をされた深沢氏夫妻の大きな写真を飾り、その名を冠した深沢記念図書館、情報処理室、コンピュータ室、ラーニングセンター、セクレタリーコースの実習室、ホテルの一角のような学生ホール、そして興味深い看護学科実習室、調理実習室……。なんと美しい校舎だろう。

食堂で、夫に薬玉を作って下さった学生さんたちと再会する。また夫をストレッチャーに乗せたまま、緑の中庭を一巡して下さった看護助手の上野さんが、看護学科に入学して、**「あらあ！」**と懐かしがる。

午後は授業をそつと参観し、看護学科の主任教授江本先生のお話を聞く。私の感動に対して、平田先生をはじめ、どなたもが**「当たり前のこと」**と言われるだけ。机の上の学習では分からなくても、学生は看護実習によって際立って成長する、患者さんを通して現実に触れ、育てていただいているのだと、誠に謙虚な言葉だ。以前は、クリスマスチャンホームの学生がほとんどだったが、現在は、クリスマスも知らない人のほうが多くなった。入学当初はカルチャーショックを受けて、がたがたと揺さぶられるけれど、二年生、三年生と進

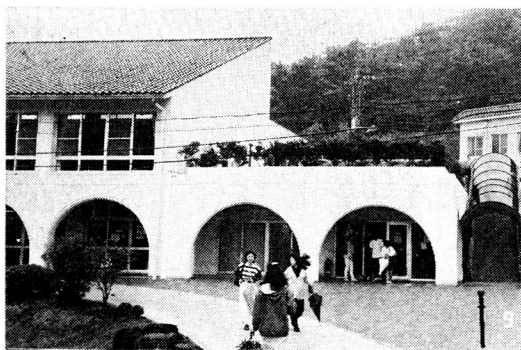


図2 学生さんの憩いの場、購売部と食堂。緑の丘に
瀟洒な建物が点在する。

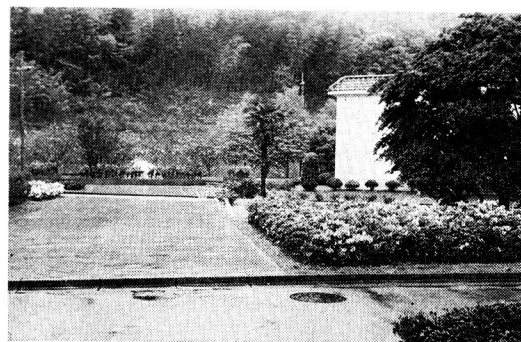


図3 労作教育が根付いて、季節の花が絶えることなく
咲き薫るキャンパス。

むにつれ、目覚ましく変わっていく、と。
交通不便なこともあって、自宅通学以外の
学生は、スミルナ寮、ミルテ寮に女子、カレ
ッジ・ホールに男子が寮生活を送る。スミル
ナ寮をくまなく見せていただいた。四人部屋
だが、聖書を読み礼拝する部屋、団らんのお
茶、テレビを楽しむ部屋、お花やお茶のお稽
古の部屋、おやつなどを作るキッチン……、
若い人の夢や楽しみに応える配慮が感じられ
る。クッキーなど、皆さんとても上手に作る

ということだ。「僕たちがつくった無農薬の
キウイ」を勧められて買う。五コで二百円。
これも労作教育の成果。言葉を交わす全ての
方が「晴れていたらよかったのに、空がびっ
くりするほど青いんですよ」と言われた。晴
天の日にまた来たい。
5
一日じゅう案内して下さった平田先生と別
れ、学生さんたちと一緒にスクールバスに乗
る。どんな教育によって、あの素敵な看護婦

さんが育つのか、という私の疑問はすっかり
解けたわけではない。ただ一日、緑の大自然
のなかに解き放たれて、善意の人達と言葉を
交わしていたことで、私の心身が洗われてい
ることを実感した。学ぶ内容と方法は、教時
間の見学で分かるはずもない。しかし、環境
の素晴らしさは、一目で分かり、一足踏み入
れただけで分かる。
長窪専三学長は言われた。「知・徳・体の
調和ある発達—全人教育を行うためには、広
々としたキャンパスやきちんと整った学寮が
絶対に必要です。全人教育は、教室・図書館
・運動場だけでは不十分なのです。衣食住—
毎日の生活の諸領域を含む生活教育・人生教
育のためには、学寮における生活を教育の柱
とし、広々とした自然に触れ、自然のなかで
生活することによって人間性を涵養すること
が大切なのです。三育学院は、学問の場であ
るばかりでなく、同時に青年男女の人間形成
の場でもあります」と。その言葉通りの学園
であった。「生と死を授業でどう教えるか」
という問いへのストレートな答えを求めた私
に、緑の大自然は「本物の教育を、教育とい
う名に値する教育を考えることだよ」と語っ
てくれたのかも知れない。

わたくしから あなたに



◆90年秋、自衛隊の海外派兵をめぐる意見のべる機会があったので、母親としての立場から絶対反対だと発言した。そして、その秋の末娘の就学時健診は、教育の場での振り分けであり富国強兵政策に連がるものだと言うことができた。すると言いたかったことが言えて胸のつかえがとれたはずなのに、より複雑な心境になってしまった。

母親として、産む性として、子供を死ねとは、他者を殺せとは育てていないと発言したのは、立派な兵となれと割烹着に白ダスキで日の丸を振っていた愛国婦人と表裏一体の形をとっているものではないのだろうか。こと海外派兵という問題であったから、時々世情に踊らされる親のエゴのようで醜く感じたのかもしれないが……。

私は個人として戦争に反対であり、子供にもそのように伝え、育ててきた。そのことが大事であったのに、母親として反対だと言ってしまったのはよくなかった、と思う。

四月五日夜、フジテレビで「実録犯罪シリーズ・金の戦争」が放映された。樹木希林が演じていた金嬢老の母親が印象的であった。

(東京・大仏レア)

◆北方領土について、私はこんな意見を持っています。今の根室と歯舞諸島との間の国際線を択捉島とウルップ島との間に書き換え、日の丸を立て、役所では日本語と元号を使い義務教育では日本語を教え、卒業式には君が代を歌わせるといった形での返還なら、ソ連人もアイヌ人同様、実質的追い出しとなり、他民族を追い出してきた歴史の繰り返しに似かなりません。日本人やアイヌ人が住んで、日本語やアイヌ語の学校を作ってもよい、ということにして、協力して開発や環境保護にあたるという実績を何世紀も積み重ねていけば、自然に国境線などばやーっとしたものに変わってくるのではないのでしょうか。

北方領土、日本固有の歴史的正当性はあるでしょうが、イラク主張のクウェート固有領土説と似たような理屈になってくるのではな

いか、ということですよ。力づくで奪還などできつこないし、仮にできたとしても、問題は片づかないのでは？ サハリン州民も望んでいる北方領土からの軍隊撤退と一緒にやるべきでは？

アトビーや視力低下といった、ありふれた、命に関係ない現代病についても、私や子どもたちの問題であり、色々考えていこうと思っています。

(京都・安東尚美)

◆この四月から、西本和代さんの勤務する高校に、非常勤講師として、一週間に一日行くことになりました。長田高校を退いて四年間のブランク、さすがに緊張しました。

三年選択の男子家庭一般39名、女子保育48名なのです。どうして男女別々に？ おかしい、おかしいと言いつつ続けていますが、この数年の間に、すっかり定着してしまった「兵庫方式」でしょうか。

私が現職でいた頃は「食物」とか「保育」の三年選択に、いきなり男子を入れ、男子は「家庭一般」として認めることが通っていたのですが、今ではレディネスの問題から忠実に別クラスの授業となっています。

これからドッチボール式の授業展開を考えたいといった変なチエを働かせなくてはい

けないのです。ある授業に対する生徒の反応を男女別々に書かせ、プリントしたものをお互いに読んで話し合うといったもの……全くまどろこしい。これでは、表情、雰囲気はつかめませんよね。

男子は「食べもの」と人間のかかわり、女子は保育でまず「女と男のいい関係」……結婚をどう考える、という所から始めています。

将来下宿して学生生活を送るために、ひとり暮らしができるよう家庭一般を選択したという男子、二年生の家庭一般で保育所訪問をした時、子どもがかわいかったから、保育を選択したという女子。私は、どこかのおばさん風に、結構リラックスしてやっているのですから、生徒は何か静かない子ちゃん、よそゆき、ホンネをひき出すところまでいってありません。どのような教材でどう迫るか、一週間考え考えて選んでも不発？これから私自身もおおいに悩んでいこうと思っております。わが家から自転車で五分、月曜日の朝は、それでもワクワクしています。

(明石・入江一恵)

◆私の祖母が心不全でなくなりました。今年の二月中旬から具合が悪く、母が一人娘のため、私も福島と愛知を行ったり来たりしてお

りました。この間、狭心症で何回も緊急入院したり、慣れない病院のためボケ症状が出て母がとても大変でした。

私は初孫で、それも妹と二人きりの孫で、一番大切にしてもらい、最愛の人でした。無償の愛ってこんなものかなあと、幼な心によく思ったものです。夏の夜、寝つくまでいつまでもあおぎ続けてくれたウチワの涼しい風、浜辺で、私が泳ぐのを心配そうに見ていた妻やら帽子。子どもたちを連れていくと、乳母車をどこからか借りてきて、いつまでもいつまでも、揺らしていてくれました。

そうそう、こんなことがありました。お使いを頼まれてカレー粉を買いにお店まで行ったのですが、私は駄菓子にすっかり心を奪われて、自分のほしいものを買い、喜びいさんで帰ってしまいました。祖母は大笑いして「あれあれ、そんなにほしいものがあったの」と、もう一度買いものに連れて行ってくれました。ちょうど私の娘、しおんぐらいのころだったと思います。一か月ほど前に行った時に、病院でその話をすると「そんなことがあったっけ」と、また笑ってくれました。病院にも泊まることができたし、夜おばあちゃんの下の世話もさせてもらいました。

「もう、ここにいちやだめだよ。早く帰って子どもたちとご主人の世話をしなきゃだめ」と何回も、何回も言われて帰りました。

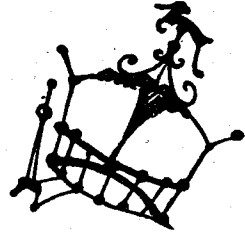
私に、ほんとうにたくさんのことを教えてくれた祖母でした。祖母が倒れた時、そして一昨夜、いつも祖母の夢を見ていました。一昨夜の祖母は、とてもとても幸せそうに、私や友人と遊んでいたのです。野山をかけめぐって……。遠く離れていて、本当に不幸者だなあと思いつつも、いつも私を応援してくれた祖母に応えられるような生き方をしたいと思います。

(福島・西内みなみ)

◆リサイクルショップがオープンして一か月になります。いろんな人との出会いの中で自分を見つけ、歩き始めるのだなと実感。リサイクルショップの実質的な責任者、林さんとは子ども会で知り合って、一年前に顔見知りになりましたが、この二、三か月いろいろな考え方をぶつけあう中で、私のもう一つの道を見つけつつあります。私は今まで、……あるべき、……すべきで生きてきてそのことを生徒に、あるいは地域社会に訴えようとしていたのではなかったか。授業もアンチ教科書ではあっても知識で家庭科を教えていたな、ということです。

(神戸・西本和代)

We
なんでも
言おう
なんでも
聞こう



◆五月号の特集、村瀬学氏の文章に、「セーラー服を脱がさないで」という歌が引用されていました。「いい歌が流行している」としみじみ感じた」とありましたが、私にはとてもそうは思えません。

「女学生の性への関心がアッケラカンと歌になっただけのおもしろい」とも書かれています。メロディやリズムや歌いっぷりは、あるいはそうなのかも知れません。

でも歌詞には、「(服を)脱がさないで」「(胸のリボンを) ほかかないで」などの受身なやりとり、「今は(いやよ)」や「こんな所じゃ」の思わせぶり、「(ガマン) なさって」の舌ったらずっぽい敬語など、成人男性の耳をくすぐるためとしか思えない言葉が盛られています。

主人公にわざわざセーラー服を着せ、リボ

ンを結ばせているのも、性的想像のための小道具のようです。少女が本当に主体として、自分の性的関心ぶりを歌うだけのためには、前述のような言葉遣いも要らず、わざわざセーラー服を着る必要ありません。

以上の点から、この歌は明らかに、外見はほんの少女が、まるまる性的存在として際どく歌うさまを、愉しむ歌だといえます。

この歌のなかでは、セーラー服のもつ清新さや幼さや少女の年若さと、歌詞の性的際どさという「落差」が演出されています。この落差は、性的効果のために供され、堪能もされ、性を凌辱的なものにしてはいないでしうか。この場合の落差は、村瀬さんが論じていられる「正規なものと恣意的なもの」の落差とは、質が違うと思います。

この歌ではまた、「全て」を、まるで男性への進物のように、「あげてしまうのは……」といい、品物のように、「もったいない」といっています。

女性の性を、「あげるか、どうか」というものとする価値観は、いま心ある人の憂えるところ です。両性の同等性のない「あげる価値観」に毒されて、少女が傷つくことは少ないのです。

「多くの人がおもしろい」といい、「茶の間で流行」しても、だから「いい歌である」とはいえないと思います。

もう一つ、古いWeを繰っていたら気になる個所があったので、お知らせします。

'88年七月号に「六年生のみそ作り」の話があります。その中で、昔の「みそをつく」という言葉を「もちをつくや、搗くようにしてつめることの意味であったのではないか」と思った」とありました。でも味噌は、昔から臼と杵で搗きましたし「搗く」は文字通りで他の何の意味もありません。豆はもちのように強く搗くと臼の中から飛び出すので、慎重に搗いてつぶすのです。

また味噌は「煮る」ともいわれてきました。家族が多人数で、洋風や油料理などが取り入れられていない食生活では、みそは家計の許す限り大量に作られたと思います。

不便で夜は暗い台所で、長時間豆を煮るのは苦労が多かったでしょう。火が少しでも強ければふきこぼれ、まきをくべるのを忘れたりにしていると、豆がなかなか煮えません。

熱効率のよい籠や羽釜のない時代はもっと大変だったと思います。火は危いので気の張りっぱなし。そんな中で女性たちは、大鍋に

何ばいも豆を煮たのでしょ。それで私は、「家」や男衆にとって、味噌は「搗くもの」でも、女衆には「煮るもの」であったかも、と思っています。私宅ではいまま毎年、臼と杵で味噌を作っています。でも煮るのは、一度沸騰させたあとは、大型炊飯器の保温用の小火やストーブなどを利用して、なんの苦勞もなく済んでいます。

なお味噌は、ひと夏を越させるだけでなく、二年味噌、三年味噌と、長期間経過すると、えもいわれぬ味が出てきます。できたら、一年で食べる分以上の量を作ってストックしたほうが良いと思います。味噌を作るときは、豆の煮汁（アメという）をたくさん混ぜると、ボール状にしてぶちつけるなど、すき間をなくすための作業が要りません。煮汁分もトロリとおいしくなりますから、味噌の出来上がり量が増えて、大変なことでもあります。

気になったことのもうひとつ、最後のところに「さつまいもでさつま汁を」という意のことが書いてありますが、さつま汁は、さつまいもの味噌汁のことではありません。さつまとは、旧の薩摩の国のこと。つまり、鹿児島のことです。さつま汁は、ごぼうや鶏肉な

どいろいろ入れて作ります。そういえば、「さつま揚げ」も、おいしいのでんぶらではなく、ごぼうなどの入った練りものでものね。

（武生・橋本チエ子）

◆アンケート「私たちの現在」を読んでいてにが笑いとドキッとする苦しみと、自分のあの頃、子どもたちの現在を重ねあわせてしました。中三で転勤のために環境が変わったわが家の子どもたちの毎日は、違うためにムリしているところと、何とか努力しているところと、いろんな気持ちがちやまぜに、少し不安定です。丸刈り強制の土地から来て「長髪はみんないい男に見える♡」と叫んだのもつかの間、別の悩みはあるようです。でも友達があちこちにできるし、さまざま人間がいることをわかっていくのは楽しいことです。

（仙台・長谷山郁子）

◆五月号連載の「家族と家庭科」を読んで「家族」と「家庭」の用語に含まれる意味の違いを明確に教えられました。教科書の用語が「家族」から「家庭」へとおきかえられることによって、教えていく中身が変わっていき、様子がよくわかり、考えさせられました。また四月号に続けて二度目の引用文「家庭生活の理想を『家族の人々みんながそれぞれ力

いっばいに自由に活動でき、しかもお互いどうしなごやかに生活を共にするところにある』は、はからずも私の家庭生活の理想と同じであり、うれしくなって、五月五日の結婚式に招かれている友人の娘さんへの結婚祝に、メッセージとしてこの一文を添えました。

ちなみに、私は一九四七年新制中学開設と同時に一年生として入学し、一九五三年高校を卒業、一九五九年に結婚しました。当時女にとつて結婚は墓場などと言われていましたが、私たちは、結婚することによって、二人がより自由になれるかどうかを、結婚への決断の要においたのです。

「戦後民主主義の家族制度が十年という時を重ねた成果」と記されていますが、その十年間を、多感な少女時代から青春時代へと実体験した私のなかでも、こうした家庭生活の理想像が結実していたこと、また、そうした実態を背景にしてこの一文が生まれたのであらうと思うとき、教育の恐ろしさをひしひしと感じます。

◆お送りいただいたWを読ませていただきました。小さくて、光っているようなすてきな雑誌だと感動いたしました。

（松本・庄司進一）



十字路



〈北海道〉家庭科に「オトコ先生」登場（北海道4/19）

道内の公立小、中、高校では初めてという男性の家庭科教諭が今月から、紋別南高校（真野満男校長）の教壇に立っている。この人は江口凡太郎さん（23）。道教大旭川分校を昨年卒業、熊本大教育学部で一年間、研修生を務め、この春、家庭科教師として道公立学校教員に採用された。江口教諭は「学ぶ側ばかりでなく、教えるほうも『男女共教』を目指すべき。早く機械科や電気科の男子生徒にも教えたい」と夢を膨らませている。

「自立塾」遺志継ぎ、美國に新活動拠点（北海道4/20）

昨年十月、代表の米村哲朗さん（33）の死去で一時、活動が停滞していた札幌の重度身体障害者の小規模授産所「自立塾」が手狭になった白石区の元の作業所から豊年区美園に移転して今月、再出発した。メンバーたちは「米村さんの遺志を継いで頑張りたい」と張り切っている。（高橋芳恵）

〈宮城〉ユニークな生活科教科書―宮城県内の教諭ら編集（河北新報4/19）

小学校一、二年生の社会と理科に代わって来年四月から「生活」科が始まる。今までの学校教育に欠けていたものを盛り込もう」と

東京の出版社、現代美術社が宮城県内の現場教諭らに呼びかけユニークな教科書を編集。

文部省から度々修正を強いられながらも、他の十一社と並んで三月末に検定に合格した。

編集会議では、生活科とは何かを徹底的に議論。知識を詰め込むのではなく、物事の本質を考える態度を育てることを目標に掲げた。

現代美術社は東京都港区東麻布1-26-6

TEL 3385-8591

初の木造校舎が完成（河北新報4/16）

鉄筋コンクリート造りの校舎が主流を占める中で、東和町錦織小（児童百三十一人）で

本格木造建築の校舎が新築された。新校舎は木造一部二階建て、床面積千八百五十六平方メートル、建築費は約三億六千万円。

県内では従来、校舎の新築は予算や建物の階数の関係から、すべて鉄筋コンクリート造りとなっていた。東和町では、木材の良さが見直される中、「山林の町」のイメージに合わせるとともに、地場産の木材を活用しよう」

と、県内で初めて本格的な木造建築を取り入れた。（小野七瀬）

〈千葉〉県議死亡に県費の弔慰金（朝日4/16）

県議会議員が死亡した場合、現職だと県費で約九百万円もの弔慰金が支払われる慣例があることが分かった問題で、県はこれまでになくとも四十三人に一億円以上を支払ってきたという調査結果をまとめた。共産党を除く全政党の議員が受け取っており、県議会の各会派はこの問題について県議会の代表者会議などの場で早急に話し合い、県民に分かりやすい形を整えたいとしている。（木田直子）

〈神奈川〉「湾岸」の街頭募金を再開―藤沢の鶴沼中（読売4/28）

藤沢市立鶴沼中生徒会（安藤慎哉会長）が二十七日からJR藤沢駅頭で、中東戦争で被災した子供たちを救済する街頭募金を始めた。同生徒会はさる二月にも九日間にわたって同様の募金活動を展開しているが、「湾岸戦争はまだ終わっていない。傷ついた子供たちがたくさん苦しんでいる」という声が在校生や卒業生から上がり、第二段の緊急募金活動が

決まったという。

同中学生徒会では、三年前からユニセフ（国連児童基金）活動を取り入れ、夏休み、冬休み、大みそかなどにボランティアの生徒が街頭募金を展開、毎年二百万円以上の募金を日本ユニセフ協会に届けている。（青木昭美）
〈和歌山〉喪服姿で抗議やハトを放つ（朝日4/27）

ソ連のチェルノブイリ原発事故が起こってちょうど五年目に当たる二十六日、原発に反対する和歌山市の主婦ら四人が「チェルノブイリ事故で命を落とした人たちに代わって」との意味を込めて、喪服姿で同市岡山丁の関西電力和歌山支店の玄関前に集まり、抗議行動をした。また、この日、県内の原発グループでつくる「チェルノブイリ五年目を考える会」がJR和歌山駅前でアンケートをした。京大原子炉実験所の小出裕章さんを講師に講演会を開くなど、原発を考える催しを繰り広げた。

一方、新宮市野田の関西新宮営業所前では、同市王子町、理容業小寺満さん（42）がハトを大空に放ち、事故の犠牲者のめい福

を祈った。

（雑賀寛子）
〈京都〉男女平等オンブズマン制度の新設も指摘―懇話会提言（朝日4/27）

京都市長の諮問を受けて、二十一世紀に向けた男女平等社会を実現させるための新たな指針を審議していた「京都市婦人問題懇和会」（会長・金井秀子京都教育大教授）は二十六日、来年度から始まる「第二次京都市女性行動計画」についての提言をまとめた。施策の是正や改善を行政に勧告できる「男女平等オンブズマン制度」の新設を指摘するなど他都市には例のない内容も盛り込まれている。

（塚崎美和子）

〈福井〉避難方法、場所詳しく―美浜町 原子力防災のしおり（読売5/2）

美浜町は、「原子力防災のしおり」（A4判、十八ページ）を作成、全戸配布している。'88年一月に作ったしおりの改訂版で、イラストをふんだんに使い、新たに事故発生時の避難方法、避難場所を詳しく解説している。

昨年度の広報安全等対策交付金事業で、美浜原発2号機事故には直接触れず、内容の変更はしていないが、「起こり得ないような事

態にも万全の備え」をテーマに、原発施設から半径十キロ以内の退避施設三十六か所を掲載している。

（上山悦子）

〈福岡〉反原発グループ全面敗訴―九電株主総会訴訟（毎日5/14）

九州電力（本社・福岡市）の一九八四年六月の定時株主総会をめぐる、反原発グループ「電源乱開発に反対する九電株主の会」が九電を相手取り、総会決議の取り消しと慰謝料計二百二十万円の支払いを求めた訴訟の判決が十四日、福岡地裁民事二部であった。

原告側は「九電が株主の会の質問に十分答えなかったのは商法違反にあたる。また入場の際も所持品検査など不当な扱いを受けた」と主張していたが、寒竹剛裁判長は「九電の説明は、株主の合理的判断で議案への賛否を決めるのに十分で、所持品検査などにも不当性はない」と原告側の主張を退けた。その上で原告団二十二人のうち八人については、その後株を売却するなど適格性がないとして訴えを却下、その他の原告については請求すべてを棄却した。原告側は控訴を決めた。

（安部宣人）

十字路

泉

この頁はあなたと
私の情報交換の場
小さなスペースで
すが、ご利用くだ
さい。

◆シンポジウムⅡ報道のなかの女の人權

「女子高生コンクリート詰め殺人事件」をめ
ぐって

。パネラー 池田恵理子／加城千波／八尾恵
／丸山友岐子

。司会 中山千夏

。日時 六月二十二日(出)P.M 一時半～五時

。場所 明治大学南講堂(JRお茶の水下車)

。主催 おんな通信社・死刑をなくす女の会

。問合先 おんな通信社 ☎03-3209-8639

◆講座かながわ女性学

～女と男の常識を社会学する～

自由に元気に生きていえるように見える女性
たち。でも本気で何かしようとするとなぜか
動きにくい。空気のように見えない常識に女
性もそして男性も知らないうちにとらわれて
いるのでは……。そんな「あたりまえ」を社

会学します。(チラシより)

。日時 六月十八日～七月二十三日 毎週火

曜日 全六回 六月十八日のみP.M 二時～四

時 その他P.M 一時三十分～三時三十分

。第一回 「あたりまえ」を考える／お茶の

水女子大学助教授 江原由美子

。第二回 女性は「働か」なかったか？

東京女子大学教授 鎌田とし子他。

。会場・問合先 神奈川県立かながわ女性セ
ンター 〒251 藤沢市江の島一ノ十一ノ一

☎0466-22-2111

◆人間と性・教育研究協議会

第十回記念全国夏期セミナーのお知らせ

。日時 八月一日(木)一時～四日(日)P.M 五時

。大会テーマ これまでの十年とこれからの

十年・性的自立と性文化の成熟をめざす二

十一世紀へー

。第一日目 基調講演「これまでの十年とこ

れからの十年」性教協代表幹事(一橋大学

講師) 村瀬幸浩 その他コンサート・パ

ネルディスカッションなど。

。問合先 〒151 渋谷区笹塚一ノ五十六ノ六

クレセントプラザ笹塚60C性教協事務局
☎03-3379-7556※月・水・金P.M 六時～九時

◆とりもどそう!! いつでも歩ける暗い道

女がつくる「防犯」フェスティバル91

。九月八日(日) 豊島区民センター

※フェスティバルに公開・展示する作品を募
集しています。

。テーマ 性暴力をなくそうというテーマに
もとづいて、社会に発言、提案する作品。

。ジャンル ポスター・標語・まんが・ビデ

オ・スライド・8ミリ・16ミリ映画その他

会場で展示・発表・表現できるもの。

。受付 七月一日～三十一日

。問合先 プロジェクトたたかう赤ずきん

福生町福生郵便局私書箱三十五号

☎03-3334-4096

◆本紹介

「誰にも言えなかった」子ども時代に性暴力

を受けた女性たちの体験記

アメリカで八年前出版されたとき、大きな

反響を巻き起こし、子どもに対する性暴力問

題の大きさを衝撃的に人々に認識させた、有

名、無名の女性たち二十名の体験集。

。エレン・バスナル・ソーントン共編

森田ゆり訳 定価千七百円

。築地書館 ☎03-3642-3731

★自衛隊初の海外派遣

政府は24日夜、安全保障会議、臨時閣議を首相官邸で相次いで開き、ベルシャ湾の機雷除去のため海上自衛隊の掃海艇を派遣することを正式に決めた。記者会見で海部首相は、同湾の航行安全の回復は①国際社会の要請②湾岸戦争の被災国復興にも寄与する③国民生活に不可欠な原油確保のため日本にも必要——として派遣に理解を求める「政府声明」を発表。憲法の禁止する海外派兵ではないと強調した。野党などには、派遣反対論の他、国会での論議不足批判や今後の「歯止め」を求める声などが依然強く、近隣アジア諸国の反応とあわせて波紋を広げそうだ。(4.25日付 朝日)

★受験競争をまづ緩和

第14期中央教育審議会(会長一清水司・元早大総長)は19日、2年間の審議結果を井上文相に答申したが、その中で「日本社会を覆う“人並み意識”や“学校歴”へのこだわりが高校教育をゆがめ、小学生まで巻き込んだ受験競争激化を招いた」と指摘。「子どもの心の抑圧の軽減」を審議の基本にすえ、中教審として初めて、大学に特定高校出身者の集中の是正など、企業には採用時の年齢制限の撤廃などを要請した。(4.20日付 朝日)

★リカレント教育を推進

文部省は、社会人が必要な時にいつでも大学などに戻り、最新の専門知識や技術を学ぶ「リカレント(還流)教育」を今年度から本格的に推進することとし、24日、学識経験者らによるリカレント教育推進企画会議を発足させた。企業から大学や専門学校へ数ヶ月間派遣され、実務的な外国語やソフトウェアの知識・技術を「補給」といった形の再学習制度で、アメリカなどでは広く行われているが、日本ではシステムが未整備だ。(4.25日付 朝日)

★育児休業法案成立

子どもが1歳になるまでの育児休暇を男

女ともに保障する育児休業法が、8日の通常国会で成立した。今春闘でもこの制度の導入を要求に掲げた労組が目立ったが、すでに導入している企業をみると、休業中に給料が支払われず、社会保険料の負担も求められるケースが多く、なかなか利用しにくいのが現実という。(5.9日付 読売)

★看護婦確保に大学設立

深刻な看護婦不足を背景に、4年制の看護大学を設立する動きが各地で本格化していることが、11日日本看護協会のまとめでわかった。社会の高学歴化に対応、少しでも若者を引きつけようという狙いだが、国内での養成は、高卒者や中卒者を対象とした専門学校が主軸だが、厚生省も教育の高度化は今後の大きな課題と積極的に後押しする予定だ。(5.11日付 朝日)

★資源ごみを本格回収

ごみ問題が深刻化する中で、瓶や缶など再利用可能な「資源ごみ」の回収に乗り出す自治体が増え始めた。これまでは、集団回収に補助金を出したり、集めた中から資源ごみを抜きだしたりが中心だったが、専用収集車で集めるところも登場。少しでもごみの量を減らし、パンク寸前の埋め立て処分場を長持ちさせようという危機感の表れでもある。(5.12日付 朝日)

★企業の文化支援——「メセナ」がブーム

メセナ——企業による芸術文化活動への支援を意味するフランス語。従来の企業宣伝のための活動ではなく、見返りを求めない文化支援がその理念。昨年発足した「企業メセナ協議会」の調査によると、昨年中にメセナ活動を行った企業は4割を超えたが、課題は人材養成。企業が社内に企業文化部や社会貢献部などを新設しても、専門知識を持ったスタッフがそろわない。文化活動を支援しようにも、音楽や絵画のことがわからない。このため大学などが設けたメセナの「入門講座」にビジネスマンが殺到し、盛況を呈している。(4.26日付読売)

●●●●●●●●●● 編集後記 ●●●●●●●●●●

◆ 去る五月十二日、関西・関東でそれぞれ集った「We初夏のつどい」のもようは、次号に掲載します。

◆ 夏季フォーラムの申込み受付中です。定員(百五十名)になり次第、締切りますので宿泊を希望する方は、お早めに。主都圈の方は、日帰りが充分可能な距離です。その場合も、申込みが必要です。お問合せは、事務局(03-3381-1388)まで。(青木)

◆ 「からだは薔のようなもので、その薔が修復できないくらい壊れてしまうと、ちょうちよを解放つ、それが薔より素晴らしいことだっただけで、わかってもらえると嬉しいな」ロス女史が死を真近にした子供に語りかける言葉の美しさを胸に刻みながら「ゆうれい

がいなかったところ(岩本敏男・偕成社)にみる死の世界のイメージの優しさをまた子供に語りたいと思う。(稲邑)

◆ 小三の息子の同級生の母親が亡くなった時、命の重さを感じていたのは何日間だったろうか。あと三カ月の命だとしたら私はどうするだろうかと考えてみる。何も思い浮かばない。自分が死ぬなんてこれっぽっちも考えていないのだ。本当に死に直面したら私は誰に会いたいか。わかっていのに今それをしないのは、やっぱり死ぬとは思っていないからである。(河村)

♥ 今年の一月、義母の一周忌を迎えました。葬儀での最後の別れの時、そつと義母の顔にふれた時の冷たい感触は、

今でもはっきりと憶えています。

小学生の高学年の頃、ふとんの中で死について考えて、不安で涙が止まらなかったことを思い出しました。生と死とは、背中合わせで生活しています。忘れないように心の隅にそつとしまつて。(渡辺)

★「メント・モリ」(汝死すべきことを憶えよ)は中世ヨーロッパの座右の銘、人々は「アルス・モリエンティ」(死の芸術)と題された絵や書物でよき往生の心得を学んだとか。紙幅の都合で掲載できなかったのですが、植垣一彦氏がされたアンケートで、九歳の子供達が真剣に死を考えているのに一驚。でも学校を上昇志向の具とするなら「死を授業で」とは突拍子もない発想でしょう★次号は「ひとと生殖」がテーマです。(半田)

Weバックナンバー (在庫があります。ご注文は、最寄りの書店「地方小扱い」または、料金をおそえの上、振替で直接ウイ書房へ)

- 90/4 '90年代、学校を変えよう(¥567)
- 90/5 生、そして死に迫る教育(¥567)
- 90/6 「家庭生活」をどう語る(¥567)
- 90/7 「環境・資源」を見つめる(¥567)
- 90/8.9 消費者教育は、何を指す?(¥567)
- 90/夏増刊号 家庭科が変わる
—情報化のうねりの中で(¥721)
- 90/10 地域をよみがえらせる(¥567)

- 90/11 高齢化社会がやってくる(¥567)
- 90/12 マス・メディアは何処へ(¥567)
- 90/冬増刊号 出会いは歴史をつくる(¥721)
- 91/1 性役割の固定化は揺らいだか(¥567)
- 91/2.3 新しい家庭科を創る(¥567)
- 91/4 「教師」という仮面を脱ぐ(¥580)
- 91/5 少年・少女の現在(¥580)
- 91/6 心からからだへ(¥580)

新しい家庭科——

Vol.10 No.4 1991年6月20日発行
定価580円(本体563円+税17円)送料共
年間購読料・定価7200円
編集兼発行人/半田たつ子

発行所/(有)ウイ書房

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14
☎・FAX03(3326)1380 郵便振替 東京6-59867
第一勧業銀行 調布仙川支店 普預1075292
印刷所/(有)岩佐印刷所〒112文京区春日1-6-7

家庭科男女とも必修!

共学の授業づくりにWeが贈る

家庭科新時代

—Weからの提案—

小・中・高・珠玉の実践31編

男女共修の家庭科の授業で、

生活を大切にするあなたの座右に

半田たつ子編

2060円 千310円



●男女で学ぶ新しい家庭科 —京都における歩みと実践—

森 幸枝

1339円 千260円

●消費者教育の創造

宮坂広作

2060円 千260円

●教室のミニ舞台から 児玉澄子 —こぼれ話20—

1350円 千260円

●若いいのちの像 児玉澄子 —私のカウンセリング入門—

1339円 千260円

●子どもって不思議 長谷川孝 —学ぶことは生きること—

1339円 千260円

●私塾霞国語教室風景 もしかしたらちいさなじゆくはユートピア

武田秀夫

1751円 千260円

●人間って不思議 —一つの視角—

半田たつ子

1545円 千310円

●木犀の匂う朝に

半田たつ子

1800円 千260円

●子ども発、大人へ —いま生まれる新しい関係—

「学習の主人公」と小沢牧子

1339円 千260円

●らくだが翔んだ 平井雷太 —教育の常識の非常識—

1236円 千260円

〈羽生模子詩集〉

●木、鳥、娘たちとわたし

1030円 千260円

●絵 III

1030円 千260円

●夢運び屋

1545円 千260円

●花・野菜詩集

1648円 千260円

ご注文は最寄りの書店に(地方小扱)。直接お申込みの場合は送料をお添えの上、振替で

ウイ書房

東京都調布市西つつじヶ丘2の25の14
電話 3326-1380 振替 東京 6-59867